693-176
1200501580632
複写

과6090

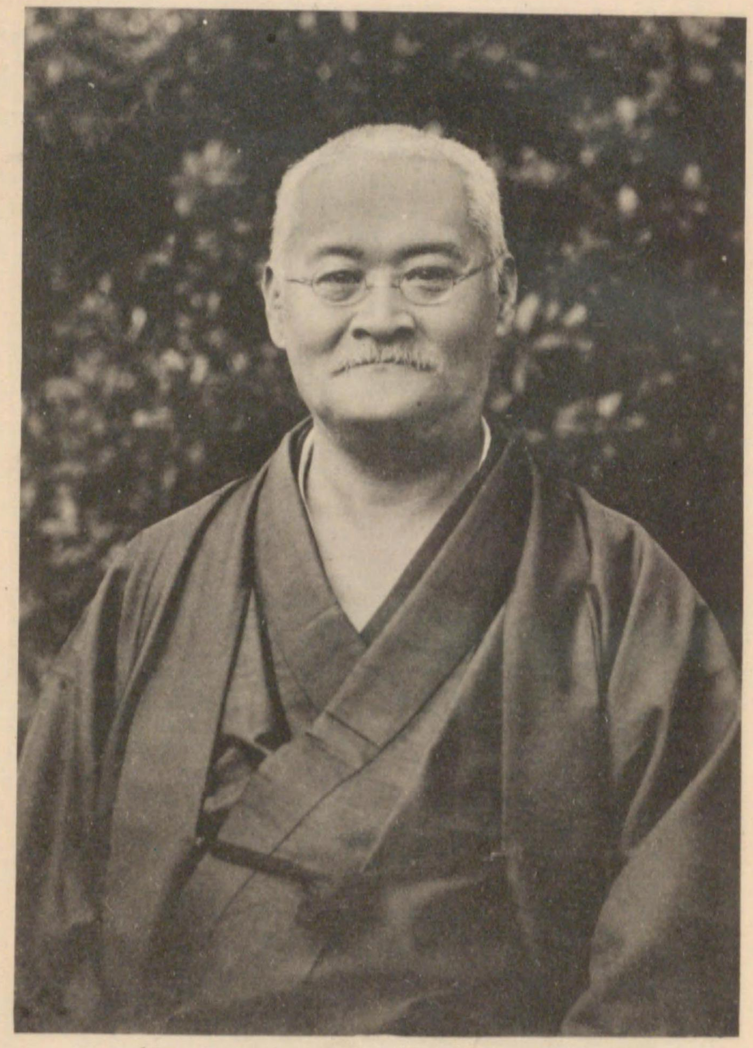
著袋花山田

花袋全集

第一卷

編一十外團蒲·妻·生

花袋全集刊行會



著者　（昭和二年十一月）

妻　（橋本邦助氏筆）

693-176

花袋全集　第一巻目次

序文（島崎藤村）
生……三
妻……二二一
蒲團……五二一
一兵卒……六〇八
土手の家……六三二
ネギ一束……六四四
兄……六五二
少女病……六六七
弟……六八八

寫眞……六九七
車の音……七〇六
おし灸……七一三
不安……七二八
朝……七三六
解說（前田晁）……七五七

田山花袋全集に寄す

島崎藤村

もう一度田山花袋に歸らうではないか。あの熱情を學ばうではないか。あれほどの瘠我慢と、不撓不屈の精神と、子供のやうな正直さと、そしてまた虛心坦懷の德とを誰が持ち得たらう。

吾友、花袋子が熱心な文學生涯は明治二十四年の早い頃から、およそ三十八年の長い間に亘つた。彼こそは文學革新の父と呼ばるべき人である。今日の讀書人がこの全集をさぐるなら、以前とすこしも變ることのない良き師、良き友をこゝ

に見出すであらう。

花袋子が數多き著作のうち、わたしの愛する作品は五つある。『生』、『一兵卒の銃殺』、『田舍教師』、『時は過ぎ行く』、そして『百夜』である。子が亡くなつた後、わたしは子が藝術を子の生れた上州の自然に結びつけて見て、ひとり回想に耽ることがある。子の『生』及び『一兵卒の銃殺』は、たとへば榛名、赤城に見るやうな上州の山々の活動のすがたであらう。そこには滴るばかりの生氣があり、潤ひがあつて、しかも物凄くない。子の『田舍教師』及び『時は過ぎ行く』は、たとへば利根川の沿岸にひらける上州平野の靜息のすがたであらう。さらに子の『蒲團』あたりから、あるひはもつとずつと初期の文藝倶樂部や、國民の友に發表した作品あたりから、激して來た一筋の流れが、『殘

雪』をも、『戀の殿堂』をもあつめて、晩年の『百夜』にまで到達したのは、あたかも靜かな深い利根の河口のおもむきにたとへたい。長い文學生涯の最後まで子の老いなかつた何よりの證據だ。そこには最早何等の誘惑もない。教育がある。感情の教育がある。

花袋子の筆は平明のやうに見えてゐて、その鍛錬された落ちつきの底には、名狀しがたい嵐を伴ふのを常とする。異常な天賦はあまり深く自省し得せしめたのだ。もしそんな嵐のないところに身を置いたならば、あるひはより愁ひのすくない生涯を送つたかといふに、晩年の花袋子に見るやうなあの至純に達し得たかどうかは言ひがたいと思ふ。記念すべき友の七周年忌に際し、全集刊行の企てをよろこび、曾ては花

袋子を迎へて燈下に相語つた飯倉の小樓にありてこれをしるす。

生

生

一

『今晩嫁入があるッモな。』

『何處で？』

『すぐ此の下の家で。』

『下の家ッて何處だい。』

『そら、あの酸漿を鳴らして通る、白髪のお袋さんの居る家さ。』

『よく彼處では嫁入があるな、このお正月にもあつたぢやねえか……。それに、あのお袋さん、病氣が惡くつてとうから臥てるッて言ふぢやねえか。』

『お正月のは弟の嫁だアな。そら、ぢきあの裏に居るアな。色の白い肥つた、八丈の羽織などを着てよく通るぢやねえか。今晩來るていのは、その兄貴の嫁さんだ。』

『兄貴の？　さうか、毎日洋服を着て役所へ行く？』

『さうよ。優しい、人柄な、熊公のよく挽いて行く旦那だ。』

『あの旦那にや女房があつたちやねぇか。』

『なァに、あのお袋さんの氣に入らねぇで、昨年出して了つたァな……あのお袋さん、あれで中々難かしいから。』

『さうかな、優しさうなお袋さんだが……始中終酸漿を鳴らして、莞爾して通るが……』

『さうよ、鳥渡見ると、人柄な好い婆樣だが、あれで中々豪い氣丈者だッて言ふから。』

と言ひ懸けて、植木職の定公はちやぶ〳〵と手拭て顏を洗つた。早稻田に近い牛込の喜久井町、柳の湯では今洋燈が點いたばかり、戸外はまだ薄明るかつた。夕飯時の客は少く、三助は空いた桶をがたんがたんと流しの一隅に片寄せて行つた。八歳位の、年にしては丈の高い一人の子供が今し湯から上り懸けて頰りに身體を拭いて居たが、そゝくさと着物を着て、帶を卷き附けて、戸を烈しくたてゝ、出て行つた。

『今、出て行つたのが息子だァな。』

『さうかあれが……』と相手は點頭いて、『あの旦那にあんな大きな息子があるんか。』

『何でも先妻の子だッて言ふ話だ。』

『先妻ッて、此間まで居たのは、まだ若かつたちやねぇか。』

『あの前の前の先妻の子だ。』

『や、それァ大變だ。隨分澤山な女房持ちだナ。』と顏を手拭て撫で廻して、『女房もさう澤山持つたら好いだらうな。』

『本當よ、己達のやうに、しつかりとこびりつかれて居ちや遣り切りねぇ。偶にやあほつくり參つて後の若いのつてやうな幕も打つて見てぇな、』と相槌を打つて笑つた。

客の無い廣い流しには、洋燈がぼんやりと點いて、岡湯の漲る音が靜かに聞える。女湯にも一人か二人の客らしい。

『ちや、何うせ大年增だ。』

『そりァ當り前よ。』

『嫁入ッて聞くと、何だかかう自暴に氣が若くなるやうな心持がするが、大年增の、ひね旦那ぢや始まらねぇ。』

『別嬪だとよ。』

『ちやらつぽこ言ひねぇ、……知りも爲ねぇ癖に。』

『だッて、あの家の隣の若夫婦の媒妁だッて言ふぜ。何でもあの若い上さんの友達だつて言ふから、滿更でもあるめぇと思つてよ。』

『馬鹿言ひねえ、紺屋の上さんのやうな別嬪にも、己の嚊のやうな友達が居らア。はッはッ。』

面白さうに二人は笑つた。

もう日は暮れた。客が一人入つて來た。

『入らつしやい。』といふ番臺の女の聲が高く四邊に響く。戸外を荷馬車の通る音ががた〳〵と聞える。

五月は下旬、空氣の濕つぽい暖かな晩であつた。

二

柳の湯から少し行つて、通を曲ると、柴垣、枳殼垣、冠木門、庭樹の鬱蒼と茂つた古い藁葺の家が一軒、それからだら〳〵と下り坂になつた盆の底のやうな卑濕地には、夜霧が闇に微白く靡いて居た。老いた蛙の聲が耳を聾するばかりに聞えて、雨催ひの空は暖かく、星の影は一つも見えない。この盆の底のやうな處は、曾てはさる大名の下邸の庭の泉水で、向うに靡く低い丘は立派な築山であつたといふ。潰れた邸の址は、久しく藪地になつて居て、其泉水の緣を縫つて早稻田南町に出る細い路は、惡戲をするものがあるのと、質の惡い野犬が居るのとで、日が暮れてから女はなどは殆んど通らなかつた。かうして唯藪地にして置くのは惜しい、開墾して麥でも播かうと、ある百姓の老夫婦が思ひ立つて一坪二厘の地代で其一隅を借りて、肥溜の小屋を造つたのは、それから餘程後であつた。日清戰爭の少し前には、

或山師が近郊の避暑地の流行から思ひ附いて、見晴が好いのを利用して、築山の下の樹蔭に小屋掛をして、細い瀧などを落して、麥酒の罐を清水に浸したこともあつたが、二年と續かずに失敗して止して了つた。原には春は野蒜、蒲公英、嫁菜などが出た。紙鳶のうなりも聞えた。通行する人は誰も好い惜しい地所だと思はぬは無いが、さりとて此の廣い藪地に手を着けようとするものもなかつた。

處が、ある日突然大工の棟梁らしい男が羽織を着た旦那らしい鬚面と一緒に此原に來て、篠笹の藪地に頻りに繩を引き始めたが、二三日經つと鉋の音が珍らしく聞え出して、二三人の大工の甲斐々々しい姿が其處に見えた。新しい木材の匂、鉋屑が風に吹かれて四邊に散つた。で、原の中央に一軒、西北の一隅に二軒、新しい貸家が建てられて、原を往來する人々は、其路の賑かになつたのを喜んだが、斜に貼られた貸家札は徒に雨風に吹曝されて、久しく住む人の影も見えなかつた。

それから一二年經つた。原の中央の家は少くとも借手が三度變つた。角にある老梅樹は三代將軍が鷹野の歸途、此大名の邸に御立寄になつた時、手づから植ゑられたもので、其下にある大きな花崗石は、將軍が其時腰を懸けられたものだ相だが、其梅樹は年々美しく花を着けて、路行く人々の袖に薫る。丁度春先のある暖かな日、目隱しに植ゑた檜、樫、椎などの繁つた間に、箪笥やら長持やら本箱やら勝手道具やら竈やらを載せた引越車が三臺ほど引込まれてあつた。一月ほど空いて居た此家は新に主を得たのである。半白の、中脊の、人柄な母親が先に立つて働いて、嫁らしい赤い手絡を掛けた若い丸髷が、

頻りに井戸に出て水を汲んだ。主人は髯の濃い三十二三の柔和な男で、二十四五の、髪の長い色の蒼白い神經質らしい弟と一緒に、箪笥、本箱などを室内に運んだ。

喜久井町から早稲田の通は、まだ其頃は淋しかつた。家屋の絶間には、麥や菜の畑が青々として、雲雀が鳴いて居た。引越蕎麥は早稲田の穴八幡の前の蕎麥屋が配つた。四疊半の離座敷を弟は自分の書齋にして、壁に面して机を据ゑて、前硝子の本箱を其の傍に置いた。雑誌新刊物などの中に洋書が五六册交つて入つて居た。一間の押入の中には上に寢道具、下には古雑誌や古原稿を荒縄で一括りにからげたのを、其儘無造作に投り込んだ。

主人は最後に植木を庭に移した。亡父が生前に此上なく愛して居たといふので、態々田舍から携へて來た大神樂といふ椿は、都會生活の度々の移轉に、生長する暇もなく、葉も枝も萎れ果てゝ居た。其他躑躅、萩、寒竹、毘沙門の縁日で買つた木犀――尻を端折つて、一生懸命に鍬で土を掘つて居る主人の姿は、夕暮の空氣の中にはつきりと見えた。そして其時五歳になる先妻の男の兒は何か無邪氣なことを言ひながら、はつちやけて庭を遊び廻つて居た。で、それが濟むと、主人は縁側に置いた釘箱と金槌とを取つて、小さな門に、古びた郵便受函と標札とを打つた。標札には禿びた字で――『吉田寓』

風の吹く日は裏の雨戸は明けられなかつた。八疊二間續き、玄關が三疊、古箪笥の上に佛壇が置かれて、其上に神棚があつた。主人は何時も同じ脊廣の洋服を着て、原の路を丘と田との間に添つて通つて、

淡竹の大藪の彼方へてく〳〵と出て行く。そして五時過には、夕日に向つて其同じ道を歸つて來るが、其頃は丸髷姿の若い細君が屹度其道に向いた井戸端で頻りに米を炊いで居た。弟は四疊半の書齋に籠つて、終日書を讀んだり、筆を執つたり、所謂神來の想を得る爲めの樂寢に耽つたりして居た。渠は戀と文學とを一緒にして、そして美しい夢を見て居る青年の群であつた。時々同じ夥伴の友人が來て、文學談から宗教談、難かしい人生問題、其論爭の聲は垣の外を行く人々の足を停めた。

母親は其頃五十一二であつた。士族が祿を失つた維新前後の浮世の大波を被ぎながら、早くから夫に別れて難かしい舅姑の世話、多い子供等の教育、忍耐に忍耐した不滿の情は今に及んで、一種嶮しい荒涼たる性格を形づくつた。望を懸けた子供等がひとりは役所の下級官吏、ひとりは物の役に立たぬ空想家、ひとりの娘は田舍の貧しい機屋の細君、息子共が成長くなつて東京に出られるやうになつたらと、いろ〳〵に樂んだ美しい空想は片端から脆くも崩れて、嫁は皺だらけの手、世の常の大きな足、それにちやほやする長男を見ると、むしやくしやせずには居られなかつた。で、家庭の衝突を重ねて、初めの嫁は初兒の産褥で倒れて了つた。

其初兒を母親は抱寢をして育てた。

上顎の齒が大方拔けて、何だか緊がない處から、酸漿を鳴らすのが習慣になつて、後には丹波酸漿の木を庭に植ゑた。八月には鈴生になつた其酸漿の赤い色が美しく庭を飾つた。

其頃の日曜日には、母親は屹度玄關の三疊の高窓から顔を出して喜久井町の通に出るだら〳〵坂を眺めて居た。やがて靴の音劍の音と一緒に脊の高い活潑な士官候補生の姿が顯はれる。『そら秀雄が來た、』といふ。其母親の顏には喜悅が溢れ渡つた。母親の最後の希望は此三男の勇しい軍人姿に懸けられてあるので、自ら呪ひ自から傷けた荒凉たる生活に、糧でもあり花でもあるのは此唯一の士官候補生であつた。で、日曜日のみは賑かに樂しげに送られた。餅菓子、果物、蕎麥、饅頭の旨いのが馬場下にあるのを、母親は自から使に行つて買つた。快活なる軍隊生活、勇ましい練兵と術科、家庭の小さい紛紜などは何うでも好いと謂つた風な物語は、單に母親の荒凉たる心を暖めるばかりではなかつた。淋しい暗い家庭に、一週一度の此光明を誰も皆待つた。

『お前が來て呉れると、母樣の機嫌が丸で變るんだから……日曜には成べく來るやうにして呉れ。』などと主人の兄が謂ふと、

『矢張、母樣は難かしいかナア、何うも困るナア。何故彼樣になつちやつたか。本當に家の揉める位つまらんことはない。』

平氣な調子だ。

そして空想家の兄の書齋に入つて行つては、『銑ちやん（兄さんとは決して言はなかつた）何か面白い小說本は無いかな。』と言つて、其仲兄が髮を長く、色を蒼く、神經性な瘦せた顏をして、一生懸命にセ

ンチメンタルな冗漫な誇張した長い憧憬小說を書いて居る傍に寢そべつて、雜誌やら小說やらを無造作にひつくり返して、面白さうなものがあると、講談であらうが、探偵物であらうが、鷗外露伴のむづかしい小說であらうが、そんな區別には頓着せずにすぐ讀耽る。

銑之助の抱負では、軍人などを豪いと思つて居なかつた。今に見て居れ、傑作を作つて天下を震撼させて呉れる。不朽の名を明治文學史上に刻んで呉れる。かう思つて居る。けれど軍人ののんきな快活な生々した生活は羨しかつた。暗い家庭に居て、朝から晩まで痛い小さい衝突に神經を昂らせて、其揚句に辛い辛い机の上の煩悶、生理上の烈しい壓迫も愈々其頭腦を不健全にした。憂鬱な我儘な正直な臆病な性質を渠は最も多く其母親の血から承け繼いで居たのだ。

母親の憂鬱な顏の一線の動いたのにも渠はすぐ胸を曇らせた。

士官候補生の制服、軍帽、短かい劍——その暢氣な生活が堪らなく羨しい。門限が來ると言ふので、次の日曜を約して、夕暮に其弟が歸つて行く。母親は玄關の高窓から其後姿を見送る。渠は書齋の前の障子を明けて、だら〳〵坂を急いで上つて行くのを見て居る。軍隊の生活、寢臺の上から落ちた話、消燈喇叭が鳴つた後も西洋蠟燭をこつそり點けて勉強するといふ話、さま〴〵の話が思出されて胸が一杯になる。郊外の秋の日、美しい日の光に浴して、兵士の群が彼處に一團、此處に一團、餘念なく演習を遣つて居るのを見て、かうした無邪氣な快活な生もあるのだと思つて、熱い涙を流したことをも思出した。

日の暮れる頃、わァーッわァーッと言ふ聲が聞える。これは士官學校で、生徒が食後の運動の爲め、號令の練習を遣るのである。其頃初めて牛込に住んだ人々は、必ず一度は此聲の何なるかに驚く。現に此一家族も田舍から出た時には其耳を疑つたのである。此聲の聞える頃、漸く洋燈が光を放つた頃、其時分が一番佗しく一番暗かつた。生の荒涼から覺えた晩酌を母親はいつも遣るので、難かしい顏は旣に赤くなつて居る。皮肉な我儘な道理も何も無い小言が、平生沈鬱な母親の口から迸るやうに出て、其矢面に主人と若い嫁とが立たなければならなかつた。いつものことゝて大概は柳に受けて聞流しては居るが、其皮肉がいかにも勁烈なので、時にはいかに優しい主人も默つて居られなくなる。田舍出の若い細君は飯も咽喉に通らぬといふ風で、勝手へ立つて行つて、顏を障子に押附けて泣くことなどもあつた。

暗い洋燈の下に長火鉢、膳、椀、鍋、處々破れた障子、佛壇も神棚も總て闇で、嫁の持つて來た前桐の安簞笥のみが白く室の中に目立つて見える。銑之助はこれが始まると、そゝくさと急いで飯を濟して了つて、すッと立つて書齋に入つて了ふ。兄や嫂の身にしては、何とか母親をなだめて呉れても好ささうに思はれるが、かれの神經質では、醜い其の光景に堪へ難いので、暗い洋燈の光と母親の赤い嶮しい顏を見ると、此世も盡くるかとばかりつらく悲しかつたのだ。

机の前に坐つて、

『傑作！　傑作を。』と心に叫んだ。

時はさうして居る中にも經つた。兄の日毎の役所勤め、弟の絕えざる文學上の勞作、若い細君は難かしい姑に睨まれながら、朝夕の炊事、汚れ物の洗濯、[illegible]屋、肴屋、豆腐屋、八百屋の中親爺は落合あたりから車を挽いて毎朝遣つて來る。小松菜、蓮根、慈姑、葱、甘藷、秋から冬に懸けては、漬菜や干大根を山のやうに積んで、老母の裁縫をして居る緣側に來て、廉く負けるからと言つて二樽ほど賣つた。

山の手も段々と開けた。鉋の音が到る處に聞えて、新建の貨家が日增しに殖える。原ではだら〳〵坂の西の臺地に二階造の和洋折衷の大きな家屋、續いて其上に、茅葺屋根の寺のやうな家屋が建てられた。其長い緣側には、綺麗な娘が派手な帶を締めて、色白の顏を浮彫のやうに見せて、四邊の好眺望を眺めて居た。

隣の藪地が五十坪ほど切開かれて、やがて小さい三間位の家屋が建つた。小さな門、小さな庭、小さな入口、何ういふ人が入ることかと評判されて居たが、母親がある日銑之助に、『お前のお隣には別嬪さんが來たね。』と笑ひながら言つた。母親は今少し前色の白い、二十五六の、髮を花月卷に結つた女が其處から出て來るのを見たのである。

其翌日引越車が三臺來た。簞笥と本箱とが殊に目に立つた。越して來たのは、早稻田の法科に籍を置いて居る三十男で、昨年まで地方で基督教の傳道に從事して居たが、生活問題に不安を感じ始めて、新に法律を學ぶ爲め、質素な生活を此處に夫婦して始めるのであるといふことが段々解つた。細君は小づ

くりな、色の白い、かなりの美人で、子が無い故か、すべてが年に較べて派手づくりで、紅い帶揚にメリンスの半襟、顏にはいつも白粉をべつたりと附けて居た。前の井戸で一緒になるので、やがて懇意になつて其細君の母親だと謂ふ、人の好い眼の悪い老母が、折々吉田の家に訪ねて來た。

『あのお婆樣には困るよ。話が長くつて、くどくつて、そしてながつちりだからねえ。あゝいふ用の無い閑人はあゝして居ても好いかも知れないけれど、私のやうに、嫁の世話から孫の世話まで爲なけりやならんものには、とても交際は出來ない。』などと吉田の老母は滴して居たが、それでも時々は其家に自ら出懸けて行つて、其老母よりも若い細君を相手に一時間も長話をして來ることなどもあつた。

あたりは益々開けて、新しい家屋は原を緣取つて幾軒か出來た。淋しかつた道には往來が繁く、野犬が居たり、悪戯をするものがあつたりした時代は何時のことかと思はれた。二階屋からは家の娘の彈く琴の音が聞え、近所の家からは軍人の細君らしい若い女が盛裝して出て來るやうになつた。

三年は經過した。

此間原の家では、家庭の衝突は同じく絶えなかつたが、前後に事件が二つ起つた。一つは三男の士官學校卒業の祝、一つは若い嫁の生兒の死に續いて起つた離緣騷ぎ。

弟の秀雄は優等で學校を卒業した。老母は一生の晴れだと言ふので、其卒業式には態々白襟の紋附を造つて、晴々しい氣色で列した。子息のことを人に誇るやうな甘い性質ではなかつたが、此時のみは逢

ふ人々に其末子の成功と幸運とを語つた。秀雄は高崎の第十五聯隊から士官學校に入學したのであるが、丁度其時日清戰後の軍備擴張で、弘前の第八師團が新設されたので、急に第三十一聯隊附を命ぜられた。東京に居られぬのを母も當人も殘念がつたが、何うすることも出來なかつた。新しい少尉の軍服、軍帽、目に眩するやうな立派な劍、非常な入費も戸主だからと言ふので、總領の兄は無理算段迄して調達して遣つた。そして其月の末には弘前に發つた。

若い嫁は其翌年の六月懷姙して、其翌々年の三月男の兒を產んだ。主人の喜悅は一通でなかつた。これで家庭もいくらか圓滿になるであらうと思つた。銑之助もさう思つた。ところが、四月のある朝、ゆくりなく其生兒の冷たくなつて居たのを發見した。父母の涙は盡きぬのに、間も無く離緣話が持上る。細君の實家の親戚からも强硬なる態度の談判が續く。其六月には、其細君の姿は遂に此の原の家に見えなくなつて、井戸端には老母が桶を下げて水汲に出た。

丁度顏を合せた隣の細君が、

『お雪さん、何うか爲さいましたか』と訊く。

『あれは一昨日實家に戻して了ひました。』

『おや、まァー左樣ですか。』と吃驚して、老母の顏を見て、『ちつとも存じませんでした。此頃御見えにならないから、何うかなすつたかと存じて居りました……』

『馴れたものですから、あんな不肖なものでも、成らうことなら置いて遣り度いと存じましたけれど……此間のやうな、人樣に御話も出來ないやうなことで御座いますからねえ、いくら眠いからッて、自分の子を……ねえ、貴方……』

『本當にねえ……』

と隣の細君は返事に困つた。

總領の兄は名は鐐と言つた。明治十八年頃の書生生立で、下級官吏の生活と貧しい家の事情とが若い頃の功名の念をも銷磨し盡したといふ風。座敷にある古本箱の中の漢學、國學、歷史學の數多い書籍は明かに其人の半生を語つて居た。机の上には塵が堆く、硯箱の蓋も滅多には取らうともせぬ此頃の狀態を見るにつけても、銑之助は家庭の爲めに犧牲になつた此兄の心を傷まずには居られなかつた。銑之助も秀雄も此兄の口からこそ功名の念を吹込まれ、人間としての理想をも敎へられ、孤往獨邁の尊い精神をも鼓吹せられたのだ。早くして父を喪つた兄弟は此兄を師とも父とも賴んだのであるっであるのに、一度世の中の實際に觸れて、氷の如く解け去つた其理想、其精神！　まだ世に出ぬ身の好くは解らぬが、銑之助は少くとも餘りにその臍甲斐の無いのを惜しんだ。さうしてでなくては渡られぬ世の中なら、いつそ今の中に自殺して死んで仕舞ふ方が本望だとまで感情的に心中に絕叫したこともあつた。役所に出勤して、歸つて飯を食つて母親に小言を言はれて、妻と一緒に早く寢て、一月を一圓か二圓の小遣で滿足

して、偶に金が入ることがあればこつそり遊廓に出懸けるといふやうな平凡な生活にどうして甘んじて居ることが出來るかと疑つた。四疊半の書齋に閉籠つて空想にばかり耽つて居る渠には、人間の中年の平凡な苦痛などは解らう筈がなかつた。

妻を離緣した後、主人はよく家を空けた。三晩ぐらゐ續けて歸らぬこともあつた。丁度其頃或書肆の歷史編纂の手傳をして居たので、錢廻りは好かつたのと見える。母は半は憂ひ半は怒つた。歸つた顏を見ると安心はするが、羽織でも洋服でも、『何處の馬の骨が觸つたのだか解らん』などと謂つて、碌々疊んで遣りもしない。時々機嫌を取る氣で、旨い西洋菓子などを買つて來ても、『そんな見え透いた御世辭の菓子などは食ふと口が汚れる』と言つて手にも取らずに庭に捨てた。子息の心底から思つてする行爲も母の眼には通り一遍の御世辭で、『鐐の猫撫聲は油斷がならん。腹では何を思つて居るか知れはしない。あんな腹の黑い男は澤山ないぞえ、銑なども用心しろ』などゝ聞えるやうにつけ〳〵言ふ。

後には馴染から手紙がよく來た。銑之助は初めは母に見せまいと思つて、自分で受取つて、こつそり兄の机の抽斗に入れて置いて遣つた。けれど其手紙がいかにも多い。日に二三通づゝ來る。で或時、何んな事が書いてあるものかと思つて、自分の四疊半に持つて來て、所謂神聖な戀愛小說の書きかけの原稿の上で封を截つた。金釘の解らぬ字で、嬉しがらせの文句が一杯、別に白い紙に墓に薄の生えた拙い繪がなすくつてあつて、恨めしい！　と書いてある。銑之助は女郎の手紙の殺風景なのに呆れざるを得

なかつた。それからはもう顧みようともしなかつた。兄は？　と見ると、兄も其手紙の封を截つたことは滅多に無い。机の抽斗は其手紙で一杯に爲つた。

三

また一年經つた。

喜久井町の通にはミルクホールが出來た。畑を潰して、蕎麥屋、西洋菓子屋、米屋などが軒を並べた。原にはまた一軒新建の家屋が殖えた。二階屋の前の空地にも四間位の烏渡した貸家が建てられて、新聞記者だといふ若い美しい細君を持つた人がすぐ入つた。原の家でも大なる變遷があつた。九月に次男の銑之助が四疊半の書齋から出て裏の三間の小さい家屋を借りた。十一月頃から、老母は兎角氣分がすぐれなかつたが、年を越すと段々容體が惡くなつて、醫師の口振では不治の病であるらしい。一月には銑之助は足元から鳥の立つやうに急に思立つて、自から進んで妻を貰つた。花は咲いて散つた。老母の容體は益々惡い。親戚から娘が手傳に來る。主人の獨身を目的に、旨く行つたら後添にならうといふ特志の中年の下婢が、白粉をべた〳〵と顏に塗附ける。裏の家からは新しい嫁が毎日糸織の着物に黄八丈の羽織といふ若々しい扮裝で見舞に來る。別の家かと思はれるやうに賑かになつた。

今度は隣の夫婦の媒妁で主人の嫁が來るといふ。

四

其夜原の家の高窓は、夜霧の微白い闇を隈取つて明るく見えた。

何時も早く戸を閉める長い縁側にも人の影が往來して、庭樹の葉裏に座敷の燈光が流るゝやうに射し渡つた。今少し前、嫁の道具が着いて、箪笥やら鏡臺やら行李やらを、人々が寄つてたかつて奥の座敷に運んだが、それも濟んで、今は嫁の君の一行を待つばかり。

蛙の聲が間斷なしに聞える。暖かい濕つぽい空氣はしつとりとして、葉を出し初めた芭蕉の夜風に戰ぐ音がをり〳〵四邊に響く。

高窓に接した勝手元では、今宵の料理の準備に忙しいと見えて、膳椀を扱ふ音、物の落つる音、流元の水の音、けたゝましい笑聲も時々起つた。今し大丸髷に結つた家婢は、大和障子を明けて、兩手に桶を提げて、柴垣に添つた細い路を、前の井戸端へと水汲に出たが、不圖氣が附くと、其傍に今から半年ほど前、此家に周旋して呉れた老母の姪に當る四十恰好の女が立つて居た。

『まァ、吃驚した。誰かと思ひましたよ。』

女は手で制して、小聲で、

『たうとうかういふことになつて、お鐵さんには本當に御氣の毒……。』

『いゝえ、私なんか。』

『でもねえ、難かし家ですからねえ、却つて好かつたかも知れない。』

『いゝえ……。』

『叔母があゝだから、本當に困るよ。今度の嫁さんだつて、また屹度酷められるにきまつて居るからねえ。』

お鐵は此女が此處に周旋して呉れる時、口を極めて、其主人の溫情、家庭の平和を說いたことを思出した。

『鎌さんは善い人だがねえ。』

『えゝえゝ旦那樣は本當によく物の解つたお方、……でなけりや、私なぞはもうとうに何處かに行つて居りました。お駒さん、私は隨分酷いと思つて、口惜しくッて泣いたこともありますからねえ。あなたの叔母樣ですけれど、御年寄は本當に酷い方ねえ、何ほ私だッて押附嫁に來た譯ぢやありませんし……そりやこんな至らぬものでも、旦那樣の御氣に叶へば……と思つたばかしですもの。』

『左樣ともねえ、本當に。』

『ですのに、鳥渡でも旦那樣と話しでも爲て居ようものなら、それや大變。怖い眼で睨まれて、色々なことを言はれて、旦那樣にまでそれは酷く當るんですから』と言懸けて、『旦那樣は本當に御可哀相……』

大丸髷に結つて、自分から家婢の積りではなく、いろ〳〵心から世話をして遣つたことを思出した。小さい時天然痘に罹つて鏡をも見る氣にはなれぬ痘面、それを氣恥かしくもなく、紅やら白粉やらを塗りつけたことをも思出した。女は容色が惡くては、どんなに正しい心を抱いて居ても振向くものも無いのかと思ふと悲しくもなる。

少時して、『私、本當に、今度は好いお嫁さんが來れば好いと思つて居ますよ。お話を伺ふと、旦那樣は隨分不仕合せな方ですものねえ。』

『本當ですよ。學問が出來て、何一つ知らぬことは無くつて、親孝行で、優しくつて、それは好い人なんですから。』

『本當にねえ。』

提灯の火が坂の上に見えた。『嫁さんではないかと思つたが、さうではなかつた。

『お嫁さんを見たことはないの？』とお駒は訊く。

『えゝえゝ、此間ね、お隣で見合をするッて言ふ時、何うかして見て遣りませうと思つて、それは骨を折つたけれど、後姿を鳥渡見たきり。』

『何んな女？』

『脊のすらつとした、糸織の鐵がゝつた衣服を着て居ましたよ。』

『お隣の奥さんの友達ですッてね。』

『え、國でお針に一緒に行つた友達ですッて、前の亭主は船乘で、始中終家に居ついたためしが無く、偶に歸つて來ると、新潟の女は何うだの、長崎の女は何うだのッて、そんなことばかし言つてるんですッて。道樂者には懲々したから、何んな苦勞でもするから、しつかりした亭主を持ちたいと……。』

『お鐵さん、お鐵さん！』

と呼ぶ聲がする。

『お母さん！　何處に行つてるの？』と續いて、若々しい聲がして、今歳十六になるお駒の娘が其姿を半ば勝手口から現はした。

『二人は何してるんだらう、此忙しいのに……』といふ聲が戸内でする。

『はい〳〵今行きますよ。』

戸内に入ると、勝手は戰場のやうに混雜して居る。仕出屋の料理、さしみ皿、吸物椀、お平、栗のきんとん、酒樽が傍に轉つて居るかと思ふと、七輪には鍋が湯氣を白く立てゝ煮えくり返つて居る。引物の青い籠には大きい蛤と鰹節が入れられてあつて、茶の間では、花婿の主人が平生の衣服で、車夫に遣る祝儀を一生懸命に半紙に包んで居た。

羽織袴の銑之助が其處へ遣つて來て、

『兄さん、そんな事は誰かに遣らしたら好いぢやないか、もう來るよ、早く衣服を着替へないと……。』

『うん、よしよし。』

と言ひながら頻りにそれを遣つて居る。

『木當にサ、早く。』

『うん、よし。』

媒妁役の隣の主人が同じ羽織袴で遣つて來てまた促し立てた。で、主人はそれを親戚の男に賴んで座敷に行く。其處には羽織袴、衣服、羽織の紐、白足袋などが整然と揃へてあつた。前の細君と結婚した時も此羽織に此袴に此衣服であつた。斜子の羽織は黃く汚れ、仙臺平の袴にも處々汚點が附いて居る。お駒が來て、手傳つて襟の具合などを見て遣つた。

座敷のさまがまた面白かつた。床の間の八疊には、紅入メリンス、黃八丈など近所から借集めた座蒲團が不揃に並んで、煙草盆と火鉢とが打交ぜに置いてある。嫁の簞笥は新しく、鏡臺の鏡は光つて、ニッケル臺の空氣洋燈は眩ゆいほど室内を照して、今少し前まで不治の病氣に罹つた母親が寢て居たとは思へぬ位明るかつた。銑之助の結婚の時には母親は床を疊んで、三男の士官學校卒業式の時に拵へた紋附を着て、晴々しい顏色をして席に列つたが、今は長く座に堪へぬので、一時其寢床を四疊半の離座敷に移したのであつた。茶の間の八疊は、古文書の銅版を貼つた二雙屏風と古い先祖傳來の四雙屏風で中

央を旨く仕切つて、陰に長火鉢やら料理やら膳椀やらを混雜と置いた。玄關の三疊から此八疊を經て客間に通るやうにしてあるのである。

銑之助が別居してから、離座敷の四疊半は、其儘主人の書齋となつたが、青年空想家の曾て住んだ名殘としてダンテの肖像とハイネの肖像とが壁に張られたまゝ黑く汚れて、薄暗い洋燈の光を受けて居る。寢床の上に母親は坐つて居た。病みついてから體は愈々瘦せ、顏は暗い一種の影を帶びて、嶮しい表情は更に一層際立つて見える。其傍に一人の實直らしい老人が居た。これは老母の義弟であつた。

『嫁取と謂ふものは手數なもんで……』と老人が言ふと、

『本當ですよ。かう幾度も嫁を貰つては、大抵な身代では堪りつこはありはしません。』

『今度は好いのが欲しいもんだが……。』

『本當ですよ……。』

少時默つて居る。

『此頃は腹の痛みは？』

『少しは好いやうですけれど……好いが好いにならんで困ります。』

『好い醫者にかゝつて見なすつたら如何です？』

『鐐もさう言ひますがな。何うせ、もう世話ばかり燒かして居るんですから。』

『そんな事は無い。姉さんなぞこれから少し樂をしなければ……。』

坂の上に何となく騷がしい氣勢がする。それ！　と出て見ると、提灯の光が彼方此方と賑かに動いてがら〳〵と車が五臺、其の一臺は幌が懸けてあつた。

羽織袴の兄弟に護られて、嫁は入口から玄關に上つた。仕切の障子が外されてあるので、二間續きの座敷は明かに見渡される。銑之助と銑之助の嫁とお駒の娘と家婢のお鐵とは、庭に向いて明いた緣側に並んで立つて居たが、屏風に添つて其の嫁の一行の通る時、髪を丸髷に結つた白襟黑紋附の、低頭勝の背の高い姿を誰も皆見た。

嫁の一行は座敷に通る。一番上座に嫁が坐つて、續いて先方の兄と弟とが媒妁役の隣の主人に挨拶して座に就く。花婿はかういふ儀式には馴れ切つた沈着いた態度で、一通の挨拶が濟むと、緩い優しい柔かな語調で、顏には絶えず微笑を含みながら、靜かに世の常の會話の緒を開いた。嫁の眩しさうに低頭いて居るのを、媒妁役の隣の主人が見て、平生遠慮なしに戲談を言合つたことなどを思ひ出して、其生眞面目なのが吹出して笑ひたい程可笑しかつたが、ふと振返ると襖の一枚開いた處から、幾箇となく重り合つた顏！

隣の主人は立上つて、襖の外に出て、

『障子の穴から見るものですよ……障子の穴から。』

と言つて襖を閉切る。

家婢のお鐵はそれにも頓着せず、閉切つた襖をそッと一分ばかり明けて、熱心に嫁の容色と扮裝とを自分の身に引較べて見て居た。襖から追はれて緣側に廻つた群は、障子の紙を唾で濡して、處々に穴を明けて、滿たし難い好奇の眼を集めるのであつた。

少時して、

『別嬪ねえ』

とお駒の娘が銑之助の嫁に向つて小聲で囁く。

『さうねえ、別嬪さんねえ、あれで二十八ですッて、若いのねえ。』

『二十八？　さう……』と娘はまた覗く。

銑之助の若い妻は姉になるべき人のことを烏渡念頭に浮べたが、續いて五月前に其身もかうして結婚したことを思出した。式は裏の家で擧げたので、障子の穴から隙見などはされなかつたが、それが濟んで、此座敷へ伴れられて來て、難かしさうな母親に引合された時のさまは歴然と今も見える。兄さんとも兄妹のかためをした。九歳になる男の兒にも盃を差して、お駒さんが德利から酒をつぐ眞似をすると、其男の兒は、それを手に取つて、『何だ坊のは一つも入つてやしない！』と言つて一座を笑はせた。あの時お父さんが醉つて、大きな聲で高砂を謠つたッけと思ふと、實家の母親が今更のやうに戀しくなる。

年はまだやつと十九、丸髷は重く里心は失せぬのである。

お鐵もいつか其處へ來て、障子の穴から一生懸命に見て居たが、

『烏渡々々、お梅さん。』

と若い細君の袖を引いて、

『烏渡々々御覽なさいよ。今お盃の處ですからさ！』

若い細君も覗く。銑之助も覗く。手傳に來た親類の男も覗いた。——丁度今嫁さんが盃を受けた處で、色白の顏をぱつと上氣させて、低頭き勝に朱塗の金蒔繪の淺いのを兩手で持添へて、靜かに紅なる唇に當てた。洋燈の光が一座に輝き渡る。戸外では蛙の聲が一しきり絶えて、また喧しく聞え出す。

再び若い細君の袖を引いたお鐵は、小聲で、

『何うでせう。あの旦那の濟しやうは！　平生はあんなに戯談ばかり仰有つて居て……そら御覽なさいよ。あれで三度目よ。』

三献の儀式はやがて濟む。と、媒妁人は少し下り加減になつた袴を引摺つて、人々の覗いて居る緣側をあたふたと通つて、離座敷の四疊半の扉を五寸ほど開けて、

『母樣のお支度は？』

今しお駒は其病める叔母に急いで衣裳を着せて居た。濃鼠色の三紋附、繻子の帶を輕く結んで、白足

袋を穿かせようとして居る處であつた。無造作に束ねた白髮頭、痩せた皺だらけの蒼白い顏、四邊には蒲團やら搔卷やら寢卷襦袢やらが混雜と散らばつて居る。

老母はお駒に介抱されて座敷に出た。孫の男の兒は、肩揚の附いた三紋の黑の羽織に仙臺平の袴を穿いて、大人を小さくしたといふ形で、兩手を膝に置いて、しやんとして其傍に坐つた。

『こまつちやくれた兒だ！』

と嫁は思つた。

嫁は盃の儀式を爲ながらも、新しい夫の美しい鬚と優しい柔かな應對とを嬉しく、前の夫の荒々しいのに比べて、一種暖かい思を胸に漲らせて居たが、母親の蒼く嶮しい皺だらけの顏を見ると、兼ねて其難かしいのを聞いて居た故でもあらうか、忽ち後から水を浴せ懸けられたやうな氣がした。『なゞに長くつて半年の辛抱ですよ。もうお醫者樣も見放して居るんだ相ですから、お桂さんは運が向いて來たんですよ。旦那さんは、それは優しい善い人ですから、』と言つた隣の細君の言葉をふと思出した。

母親の眼には、稍々色の褪せた紋附と、顏の長い髮の毬れた女の顏とが映つた。何と謂つても元木に勝るゝら木無し、英男（孫の名）の母親が一番好かつた。容色も滿更ではなかつたし、優しくもあつたし、女らしくもあつた。何故早く死んだのか。かう思ふと難かしい小言を言つたことが今更のやうに悔まれる。

お駒が先方の人々に老母を引合せる。一通の挨拶はやがて濟んで、嫁と姑とのかための儀式が行はれる。男の子も新しい母親の手から盃を受けた。

『私はもう此の通り役に立ちませんから、これからは、これが、……』と孫の頭を撫でゝ、『さぞ世話になることでせう。婆育ちの三百安しで、平生あまやかして育てゝありますでな、さぞ骨の折れることでせうけれど、親のない不仕合せな子だと思つて、面倒を見て遣つて下さい。英！　今日から坊の母樣だから、よく言ふことを聞かねばなりませんぞ。』

かう言つて一座を見渡して、

『生れ落ちるとから、世話を燒いたものですから、祖母ちやん、祖母ちやんッて、私でなけりや夜も日も明けませんでな……。前の嫁など何うしても懷きません。何うかして懷かせたいと色々苦勞もして見ましたけれど、たうとう母さんと一言言つたことが無いので御座いますからねえ。』

『不束者ですから、種々敎へて戴きませんでは……。』

と先方の長兄が言つた、

『いえ、いえ、もう私が惡い。つい可愛ものですから、自分で世話を爲ますがな。それが、矢張いけないので御座いますよ。今度はお桂さん……確かお桂さんと言はしつたな。……お任せしますから、何うか不仕合せな兒だと思つて面倒を見て下さい！』

老母は孫の頭を今一度撫でゝ、

『本當に言ふことをよく聞かねばなりませんぞ。』

『英さんは本當に祖母樣子だからねえ。』

とお駒は調子を合せた。

こんな事で濟んで、今度は銑之助と其若い細君とが新しい嫁に引合された。母親は病人だからと言ふので御免を蒙つて、其儘四疊半に引込んで了ふ。內々の親類ばかりを招いたのであるが、先方の客が長兄と仲兄と弟とで三人、主人と主人の叔父と義兄と銑之助と其妻と、それに花嫁と媒妁夫婦を加へて都合十一人、八疊の一間には準備した料理がずらりと並んで、引物の青い籠が一つ一つ其膳の側に据ゑられた。貧しい家庭、儉約に儉約した宴ではあるが、兎に角に目出度い結婚の席なので、銚子は羽の生えたやうに飛んで、二十分も經つと、人々の顏は赤くなつて、賑かな笑聲が一間に滿ち渡つた。お駒の娘とお鐵とが酌に立つたが、手が足りぬので、主人は自から德利を取つて酒を勸め、快活な調子で面白い洒落を言つて人々を笑はせた。『かうした花婿もあるものか、』と銑之助は不思議に思つた。

銑之助の結婚した時はかうしたものではなかつた。其時は新しい歡喜と新しい不安とで、自から我を堪へ得ぬほど頭腦が動搖した。床の間近く、强ひて新妻と並べて坐らせられた時には、餘りに晴がましいので、何だか其身が侮辱されたやうな氣がした。客が皆な自分等を見てくすくす笑つて居るやうである。あの四疊半の變人もたうとうこんな平凡な幕を打つたかと誰も言つて居るやうに思はれる。理想がツてピュリタンを以て任じて居た處で、要するに人間はかうしたものだと誰かが耳の傍で罵つて居る。媒妁に立つて吳れた二人の親友の手前も何だか恥かしい。平生戀愛の神聖を說き、少女の美に憧れて居て、そして內心では烈しい生理的の壓迫を受けて居ただけそれだけ、これが一種の降服のやうに思はれて厭な氣がした。母親はそのすぐ側に坐つて居て、何か食つたら好いぢやないかね、後で腹が空くと仕方が無いと小聲で言つて吳れたが、その愛情すら何だか皮肉のやうに感じられた。一座はやがて酒に亂れて、赤い顏、駄洒落、唄——何うしてかういふ惡習慣が日本にはあるのか知らん、結婚の席で騷ぐのは、結婚そのものゝ神聖を瀆すものだと苦々しく思つた。それに比べると、此の兄の結婚は！　かうした結婚をする兄も、最初は自分と同じやうな思をして結婚したのか、それとも丸で人間が違ふのか、時代が違ふのか、銑之助は惑はざるを得なかつた。

銑之助のセンチメンタルな心では、人が再婚するなどゝいふのが既に解らなかつた。世間では妻を亡ふと四十九日も經たぬ中に後を搜す、五十以上の老人が四十位の中老婦と結婚する。結婚とは隣から猫を貰ふ位にしか思つて居ぬらしい。夫婦の愛情と言ふものはそんなつまらぬものか、そんな無意味なものか、不圖封の切らぬ女郎の手紙が兄の机の抽斗に一杯埋められてあるのを思ひ出して、赤い顏をして平氣で洒落を言つて居る兄と、古い婚禮衣を着て笑を含んで默して坐つて居る嫁とをぢつと見詰めた。

少時して、お開きとなつた。先方の客が先づ座を立つ。膳の料理を折詰めにして、引物の青籠と一緒に風呂敷に包む。戸外に待つて居た車夫は、提灯を闇にかゞやかして、入口の格子の前に寄つた。歸る人を送る聲が一しきりあたりに聞える。俥はがら〳〵と坂を上つて、提灯の火が賑はしく動く。

一人歸り、二人歸り、大風の吹いた後のやうに室は靜かになる。

銑之助夫婦は四疊半へ行つて、母親に暇を告げた。

『もう歸るかぇ？』

母親は機嫌が好い。

『もう十時過ですから』

『さうなるかねぇ、早いものだねぇ。また明日來てお吳れ。』

『今日は餘りお惡くありませんでして？』

と若い妻が訊くと、

『あゝ、今日は少し好かつた。いつも今日のやうだと好いんだけれど……。』

『腹も痛まんでしたか、』と銑之助が續いて訊く。

『あゝ、痛まなかつた。御馳走を澤山頂戴したよ、』と笑つて居る。

枕元には御膳が据ゑてあつて、酒が一本ついてゐる。

『酒を澤山飲んぢやいけませんよ。』

『なァに、ほんの少しさ。……お祝だからねぇ。……栗のきんとんが旨かつた。』

『栗のきんとんなどは餘り好くないでせう。』

『何に、少しだから。』

機嫌の好い時は何處から平生のあの皮肉やら惡罵やらが出るかと思はれる位優しい。

『お梅、其處に居たか、顏をお見せ。』

若い嫁が肥えた莞爾した顏を其枕元に出すと、『火の用心を氣を附けてね、若い時といふものは、よく油斷をするものだから、粗相があつてはならんから、よく氣を附けてね。』

『え、……』とお梅は頭を下げる。

『それではおやすみ。』

『お休みなさいまし。』

二人は兄夫婦に挨拶して、折詰を包んだ風呂敷を持つて戸外へ出た。

五

門前の低地に霧は微白く沈んで、空にはをり〳〵星が見える。夜風は顏を撫でるやうに輕く吹いて、

草木の茂りの薫がしつとりとした空氣にそこはかとなく傳はると、大地からは物の生育する氣があたり一面に緩く暖かくしめやかに滿ち渡つた。

蛙の聲が田から畠から聞えて來る。

前の二階の西洋風の窓には、燈光が明るくかゞやいて居た。何處か遠くで琴の音が微かにする。艶めかしい女の匂がして、盛裝した着物の絹ずれが歩く度にやさしい柔かな音を立てた。女の顏は際立つて闇に白い。

銑之助は妻と並んで歩きながら、その左の手を力强く握つた。

『お前の手はつめたいねえ。』

『貴郎のは何うしてまゝこんなに暖かなの？』

『熱情があるからさ』

お梅は默つて唯手を堅く握り返した。につこり笑つた顏は白く美しかつた。

『今日は母樣は機嫌が好かつたのねえ。』

『うむ……。』

『母樣の機嫌が好いと、本當に嬉しいけども……。』

『まゝ、好いよ、そんなことは何うでも。』

と銑之助は愈々手を堅く握つて、其儘並んで歩く。

畑に添つた道、穗の長く出た麥に夜露は置いて、其向うに、大きい榧の樹の黑くこんもりとした影が見える。銑之助が四疊半の汚い書齋から始めて世の中に出た家は、此畑道の突當りの處にあるので、いつも若い妻が水汲に出る車井戸の前を通り過ぎると、小さい開きの門があつて、庭には高い檜の樹が二本、檐の低い小さい家屋は闇にもそれと明かに見えた。

開きの棧を明けて二人は垣の中に入つたが、

『鍵を持つてる？』

『え、』と言つて、お梅は右の袂を搜したが無い。左の袂を見たが、矢張無い。『何うしたんでせう、さつき確かに持つて來たんですのに、……』と言懸けて、風呂敷包を夫に持つて貰つて、今度は帶の間を搜し廻したが、

『ありました。』

と、やがて鍵を夫に渡した。

夫婦二人暮し、目ぼしい道具とても無いので、何時もかうして玄關の戸に鍵を懸けて二人は出るのである。銑之助は鍵を外して、戸を明けて、其儘戸内に入つた。茶の間の六疊には、三分の鈎洋燈がぼんやりと薄く點いて居たが、螺旋を捩ると、明かなる光は其儘一間に照り渡つた。細君の栗梅の縮緬の紋

附と繻珍の帶と赤い手絡をした丸髷とが此上なく美しく似合つて、何の事は無い結婚當夜の姿を見るやうに銑之助は嬉しく思つた。色の白いのと眉の濃いのが取柄で、他は十人並以下の顏立、自から進んで妻にしたには相違ないが、時にはもう少し、容色の立勝れたのを欲しかつたと思ふことも度々であつた。

『戀愛が神聖だとか何とか言つたッて要するに懷都合で天麩羅を食ふ處を蕎麥で間に合はせたりするやなものだ、』といふ極端な議論に反對して、『戀愛は神聖である。美醜問題ではない、精神問題である、』と論じたこともあつたが――いや今でもさう思つては居るが、矢張美しい妻を持つた人は羨しかつた。

最先に着物を着換へようとする妻を遮つて、

『まァ、着換へないで、さうして居る方が好いよ。もうすぐ寢るんだから。』

と銑之助は言つた。

『でもお茶を上がるでせう。』

『うん、飲まして呉れ、』と言つたが、『まァ先に一杯水を呉れ。咽喉が乾いて爲方がない。』

『お酒を餘り召上り過ぎるから惡いわ？』

と赤い銑之助の顏を見て、若い妻は莞爾する。

『そんなに飲みやしないが……弱いからすぐ醉ッちやつた……。』

妻の持つて來たコップの水をぐつと旨さうに一氣に呷つた。お梅は若々しい無邪氣な態度で、長火鉢

の前に坐つて、鐵瓶を下して、火をかき起した。

『私、始め大變別嬪さんだと思つたのよ。』

『烏渡遠見が好いからねえ。』

『顏のかたちが好いでせう。それに御つくりしてるもんだから。』

『本當に烏渡綺麗に見えた。年にしちや若い。惜しいことには髪が少し毬れて居るね。』

『さう、……私、知らなかつた。……』

鐵瓶が微かな音を立て始めた。

『貴郎、烏渡お茶の罐を出して下さいな。』

茶簞笥一つ無い貧しい新世帶、傍の一間の押入の下段に、炭取やら膳やら茶盆やらが一かたまりに混雜と置かれてある。押入は總てがらんと空いて居た。銑之助はブリキの茶の罐を取つて渡す。

日光土產の茶盆に、此間毘沙門の緣日で一緒に行つて買つて來たお揃ひの布志名燒の湯呑茶碗、茶を淹れて、一箇を猫板の上に置いた。

『何か無いか。』

『なんにも……。』

と妻は笑顏をする。

『甘納豆はまだある筈ぢやないか。』

『もうありませんの。』

『食つちやつたのか。』と驚く眞似をして、『實に遣り切れんなァ。すぐ平らげて了ふんだから。お前に懸つちや堪らん。』

『だつて旨しいんですもの。』

『旨いのはきまつてるさ。』

その無邪氣な容子が一層いとしいといふ風で、じつと妻の顏を見る。

ふとある不愉快な思ひが銑之助の胸を衝いた。其甘納豆を昨日日本橋の榮太樓で買つた。魚河岸の賑ひ、鐵道馬車、渠の原稿を賣る雜誌社は本町にあつた。漸く文壇に出たか出ぬかの青年文學者が雜誌記者から受ける侮辱、それが言ひ知れず痛く渠の矜持を傷けた。新刊雜誌を滿載した馬車、市下渡しの分を逸早く受取に來る函車、店では男が幾人となく地方發送の荷を一生懸命に繩で絡げて居る。算盤の音、ペンの紙上を走る音。靴の音、スリッパの音、四邊の目覺しい活動は先づ渠の小さな膽を奪つた。其日は主筆は逢つて呉れたが、さも忙がしいといふ風で、書いた短篇小說を詰らなさうにひねくり廻して、此間も頂載してまだ載らずにあるんだからと謂ふのを、無理にいろ〳〵に賴んで、一枚三十錢の割で六圓六十錢貰つた。甘納豆は其歸途に態々寄つて買つて來たのである。銑之助はもう十二三日しか無い今

月の月末のことを考へずには居られなかつた。妻には會計のことは一切隱してある。金錢は自から始末して、入用の雜費は一々妻に渡すやうにして居る。實家の親達から入智惠をされて、收入のことをも知らうとする細君をなだめるにも一方ならず心を費した。萬一を慮つた少許の紙幣は、半紙に包んで本箱の奥の書籍の頁の間にこつそり入れて置くのである。

銑之助は原稿を買つて呉れさうな雜誌社と書店とを考へたが、何處も塞つて了つて心當は無かつた。紅葉露伴――分けても近頃賣り出した某々新進作家が羨しい。思はず長嘆息を吐くと、

『何うかして？』

『いや。』

『だつて何か考へて居るぢやありませんか。』

『いや――烏渡。』

月末の苦勞が胸につかへた。

『母樣のことを心配してるんでせう？』

『いや――。』

『私、出來るだけは看病して上げたいと思つて居ますのよ。私こんなぼんやりで氣が利かないけど、母樣は本當にお氣の毒ですから』

『本當によく世話をして呉れ。』

『えゝ。』

と夫の顔を見る。

少時して銑之助は思返した。

『もう寢ようか。』

『えゝ。』

で、お梅は立つて座敷に行く。其處には嫁が持つて來た簞笥があつた。ねまきに着更へる樣子で、帶を解く音、さゝやかな絹ずれの音——一枚明けた襖の彼方には、線を劃して射し渡つた狹い燈火を限取つて、女が丸髷姿を低頭かせながら、頻りに着物を疊んで居るさまが見える。

疊み終つた着物の上の足袋の白いのが際立つて眼に附く。

やがて簞笥を明けて藏ふ音が聞える。銑之助は種々の混亂した思ひを胸に漲らせながら、若い細君が押入から蒲團やら搔卷やらを出して頻りに寢床を並べて敷いて居る氣勢を聞いて居た。

『戀愛は本能である。』

と非戀愛神聖論者の言つた言葉が第一に胸に浮んだ。

戀愛とは要するに本能か。

頭腦が烈しく動搖した。天上から地の底深く陷るやうな心地がする。センチメンタリズム、アイデアリズム、かれは尠くとも美に憧憬した。所謂理想をも追究した。美しき面影を頭腦に浮べて、身に汚なき業をする時にも、それを本能の盲目的威力に歸することが出來なかつたのである。醜い汚れたこの人間の總ては、努力して改善して行つたならば、必ず理想の境に達することが出來ると信じて——寧ろ反抗的に病的にそれを信じて、四疊半の不潔な一室に汚ない生活を送つて居た。硯には塵が堆く、雜誌書籍の四邊に散亂して居る中に、髮を長く、顏を蒼く、自から其身を傷つけて居たさまが歷々と眼に見える。机の上に鏡が置いてあつたが、其鏡には鬚の茫々と生えた神經性の顏がよく映つた。洋燈の蓋には戀、神聖、菊子、Love, Amour, mein, leibe, 苦悶、懊惱、傑作などゝ謂ふ字が一面に書いてあつた。そして兄が文箱の底に秘めて置く一册の書をこつそり出して、またこつそり藏つて置いた。

母親の苦惱といふことが續いて考へられる。兄の實際的生活も思出された。

兄などの生活から判斷すると、此の人生は平凡主義快樂主義である。快樂を追究しさへすれば好いのである。平凡なる現象を追つて、ある盲目的な力に屈從して行きさへすれば好いのである。

『それが人生か？』

と續いて思つたが、『すぐ考へが變つて、

『母親は——母親は死に瀕して居る！』

死に瀕して居るにも拘らず、其子等の結婚、この事實が銑之助の頭腦をまた烈しく動搖させた。母親のことが簇々と胸に上つて、堪へ難い一種の同情が湧き返る。其身が幼い頃、母親と一緒に住んだ田舍の士族町のさまから、菜の花の咲滿ちた畑道を母と伴れ立つて町に買物に行つた昔が眼に浮ぶ。母は優しい性質であつた。感情的な處があるので、時には嚴しい折檻を受けたこともあつたが、要するに、それは父親の無い子供等の教育に必要であつたからである。母は花が好き、景色が好き、雲の色などに憧れて見とれて緣側に立つて居ることもあつた。銑之助は今も思つて居る、自分にもし文學的の想像の血が流れて居るならば、それは母親から承け繼いだ尊い賜である、と。思出せば弟が士官學校入學試驗に合格した年の秋、母と三人して日光に遊んで、あの中禪寺湖畔の紅葉の隧道の中を樂しく過ぎたことがある。其時の母親の喜ばしさうな顏！　それを思つて居ると、今度は晩酌の時の嶮しい悲しい顏と、此頃の病氣に衰へた痩せた顏とが一つになつて銑之助の眼前を通る。

母親を幸福にすることの出來なかつたのは吾等兄弟の罪である！　と渠は思つた。

若い細君は寢床を敷き終つてねまきのまゝの艶めかしい姿で茶の間に來たが、いそ〳〵と長火鉢の前に坐つて、

『もう、貴郎お茶を召上らなくッて？』

『今一杯呉れ。』

お梅は急須から湯呑に茶をついで夫に渡した。そしてちよつと自分のねまきのまゝの姿を自分で見て

『こんな旨い恰好して！』と、莞爾する。

やがてお梅は言葉を續いで、

『母樣は、もう治らないのでせうか。』

『三崎博士もあゝ言ふ位だから、とても難かしいだらう。』

『なんと言ふんですッて、病氣は？』

『盲腸炎だ相だけど、醫師の口振では癌が腸に出來たらしい。』

『癌ッて何なの？』

『癌腫ッて、胃癌だの、何だの、よくあるぢやないか。癌に取附かれては切開して治すより外に道は無い。』

『切開！』

とお梅は傷しさに堪へぬといふ顏をする。

『母樣なども若ければ切開するのだけれど、あゝ年を取つちやとても難かしいからねえ。』

『さうでせうね。』

と言つて少し考へて、『私の來た頃はまださう大して惡くありませんでしたがねえ、よく酸漿を鳴らし

て其處の緣側に腰を掛けちや、畑の莢豌豆に手を今少し澤山遣らなければいけないの何のッて、世話を燒いて下すッたのにねえ。』

『まだあの頃は好かつた。』

『何うしてあんな病氣に取附かれたんでせう。』

銑之助は荒涼たる家庭と母の性格とを思ひ遣つた。人間はこの世の生活に伴はなくなれば次に來るのは死だ！　母親のは確かに自から呪ひ自から傷けた結果の病氣である。昨年の十一月、兄が頻りに家を空ける頃、自から其衝突にも疲れて、『私のやうな我儘者はもう死んで了ふ方が好い！』と我とわが身を捨てゝ居た。十二月の初には其病氣が既に萠し出した……。

『私、此間は困りましたわ、』と細君は話を更へた。

『此間ッて？　何時？』

『そら、藥罐を割つたでせう。』

とお梅は夫の顏を見る。

『さうさ、あんなことをするから。』

『藥取の歸途に、紅谷で、鹽釜を二本買つて來て吳れッて母樣が仰しやつたから、彼處に寄つて買つて居ると、つい手がすべつて罐を落したんでせう。彼處は三和土になつて居るもんですから、すぐ割れて了つて、私何うしやうかと思ひましたのよ。』

『また貰つて來りや好いのに。』

『あの時はどうしてさう想はなかつたでせう。仕方が無いと思つて歸つて來たんですよ、私、餘程何うかして居たのよ、あの時は。歸つて來て、お駒さんにこれ〳〵と言ふと、よくお斷りを言つて置いてやるからッて言ひますからね、其儘母樣にも挨拶も爲ずに家に歸つて、小言を言はれるか言はれるかとびくびくして居たのよ。處へ、お貞さん（お駒の娘の名）が來て、祖母樣がお梅さんに鳥渡入らつしやいッて言ふから、幾許か安心して行つたけれど、あの時はどうしやうかと思ひましたよ。』

『小言はそんなに言はなかつたッていふぢやないか？』

『えゝ〳〵。あゝいふ時は、挨拶してお詫をして行くもんだと仰有つたきり、別に變りはなかつたけれど……。』

『注意する方が好いよ。』

『えゝ〳〵。……』

不圖時計を見て、

『もう十二時よ、貴方。』

『寢よう、寢よう』

と銑之助は立上つた。種々の煩悶苦痛、これを忘れるのは目前の快樂と睡眠とに限る。ふと兄と新妻とのことが頭腦を掠めて通つた。座敷のさまが續いて眼に映る。

『貴郎、ねまきは其處に出してありますよ。』

銑之助が衣服を着替へると、若い細君は簞笥の側の襖の一枚明いた處で、其のぬぎ捨てた着物を丁寧に疊んだ。で、それを簞笥に藏ひ終ると、今度は茶の間の釣洋燈を手にして、勝手から入口、裏の雨戸のしまりを殘る處なく見て廻つた。

六

それから一時間ほど經つた頃、前の雨戸を叩く音が耳に入つて、銑之助は熟睡から覺めた。

『誰だえ？』

『私ですがね……。』

家婢のお鐵の聲である。

『何うした？』と銑之助は飛起きた。

『御隱居樣がね、御腹が痛い！　と仰しやつて。』

そゝくさと雨戸を開けると、お鐵は其處に立つて居る。

『急に御腹が痛み出しましてね。旦那樣も奥樣も起きていらしやいますのよ。旦那樣が裏の家にもさう言つて來いと仰有いましたから、大急ぎで飛んで來ましたの。』

『餘りいろんなものを食べるから惡いんだ！』と銑之助は言つたが、

『誰れか一人家にも來て居て貰ひ度いものだな、お梅は一人では淋しいから。』

『お貞さんにでも來て居て貰ひませう。』

若い細君も起きて來て、ねまき姿のまゝ、一枚明けた雨戸から半身を現はした。

『御腹が痛むんですつて？』

『おや――お休みになつたばかしの處を起して御氣の毒でしたねえ……。急に痛み出したんですッて。私ね、成だけ旦那樣を起さないやうにと思つてね、お駒さんと一緒に介抱したんですけれど、餘程强く御痛みなんでせう。ついお聲が出るもんですから、旦那樣も奥樣も起きて入らしッて……。』

『さう……。』

お梅は暗い戸外を見た。

銑之助が行つて見ると、母親は四疊半から寢床を移して、いつもの通り南向に客間の八疊に突伏して寢て居た。腹の痛むのを自から押へて居るのである。枕元には竹筒臺の置洋燈が薄暗く點いて居て、後

には古屏風が半疊まれた儘置かれてある。今宵此座敷で目出度い晴れやかな結婚の宴があつたとは如何にしても思はれぬ程あたりが暗く佗しかつた。お駒は叔母の側で、及び腰になつて痛む腹を押へて遣つて居る。

『母様、何うしました？』と聲を懸けると、病人は顔を此方に向けて、

『銑か……痛くつて……あゝ痛い。』と顔を蹙める。

『餘り酒を飲んだり何かするから惡いんだ！』と銑之助は強く言つたが、しかも母に對する同情の念は禁め得なかつた。

兄は茶の間の長火鉢の前に坐つて、幾度となく鍋の蓋を取つては、頻りに罨法用の蒟蒻の加減を見て居る。新しい嫁は交織の黄縞の袷を着て手を出すにも出し兼ねてそは〳〵と立つたり居たりして居た。裏の家に行く爲めに熟睡から起されたお駒の娘は眠い目を摩りながら今格子戸を明けて出て行つた。

『痛い、あゝ痛い！』

老母の顔には見る〳〵深い苦痛の皺が刻まれる。

『もう、蒟蒻が暖まりさうなもんだなァ、』と絶望的にいふ。

『蒟蒻、蒟蒻！　鎌さん、もう大抵で好いでせう、』とお駒が促す。

嫁が長火鉢の前に立つて行く。主人は熱くなつた二枚の蒟蒻を長い布片にふう〳〵と吹きながら包んで、それ！　と言はぬばかりに急いで立つて、お駒に渡すと、お駒はいつもするやうに、老母の脇腹の凝結（しこり）の出來て居る處にそれを當てた。

苦痛は猶少時續く。

『醫師を呼んで來ようか。』

銑之助がかう言ふと、

『なァに、これで落着くだらう……。それにもう一時過ぎだから。』主人はかういふ發作にはよく慣れて居る。

『一體、酒など上げるからいけない。』

『でも、お祝ひだと思つて、ほんの少し上げたんだけれど……別段それが當つたといふ譯でも無からうがねえ。』

『もうさつきからですか。』

『四十分位前。』

『此方に來てからぢき？』

『さうさ、それから一時間位經つてからだらうか。』

主人は眠さうではあるが、例の落着いた緩かな調子。

疼痛が容易に取れぬので、腹を撫でたり、蒟蒻を替へたりして、誰も其夜は手を離すことが出來なかつた。四時近く、それでも少しは落着いて、病人も横になつて寢ることの出來る頃には、夏の空の明け易く、黎明の新しい光が既にあたりに充ち渡つて居た。銑之助は曉の新鮮なる空氣を吸ふべく前の雨戸を手づから繰つたが、四疊半の開きが少し明いて居るので、何の氣も無く見ると、暗い洋燈の一室には、蒲團、搔卷、嫁の着物やら帶やらのぬぎ捨てたのがその儘になつて居た。

七

原稿に倦んだ進まぬ勝の筆で、銑之助は弘前の弟に遣る長い手紙を書いた。

拜啓仕候。昨夜兄上は目出度く結婚致し候、嫂になりし人は、既に此春お出の節其話だけは御存じの筈の隣の細君の友達に有之候、生れは小生の妻などゝ同藩の武州行田のものに有之候よし、母などは何方かと申せば、餘り賛成には無之候ひしも、兄上自から進みて話を定め候次第、小生等は只切に兄上の爲めに將來の幸福を祈るのみに有之候。兄上、眞に不運なる兄上！　兄上は吉田家の爲め、小生等の爲め、其功名の念をも學問をも何も彼も捨てられたるに候、吉田家の爲め、一人取殘されし母上の爲めに盡さねばならぬ責任と申せば、兄上のみにあらず、小生も貴下も十分に負はねばならぬことは言ふまでも無し、然るに、長男に生れしばかりにて、兄上は小生等の責任をも一人して負はれたる次

第、兄上にして常識に富み、世故に長け、犧牲の貴き精神を有せざりしならば、小生等はいかに相成り候べき。貴下は無論學資なき爲めに成城學校に學ぶ能はず、從つて今日の成功を見る能はざりしなるべく。小生は官省の下級官吏などに身を投じて、自ら生活の荒波に沈まねばならざりしにて候。小生の眼より見れば、兄上は勇氣に乏し、自信に乏し、奮勵の意志に乏し、されど兄上は初めより自信なく勇氣なく意志なき人物にて有之候ひしや。田舍より東京に移りし際貴下は十二、小生は十七、あの富久町の最初の僑居を何れの日か忘れ候はむ。あの頃は嚴格なる兄上にては候はざりしや、唐宋八家文の無點の素讀が滿足に出來ぬとて、半日の跪坐、長煙管の雁首にて頭を打たれ候ことはお互に忘るゝ時なかるべくと存候。兄上の優しき胸にも曾ては吉田家の烈しき血流れたるにて候。今こそは其血は乾き其胸は靜まりたれど、其今日に至りし原因を考へ候へば、暗涙の袖を濕すを禁め得ず候。貴下は二十七年以後多くは軍隊生活學校生活を爲したり、從つて家庭の苦痛を適切に身に感ぜざりしやも知れず、されど英男の母親の死亡前後の母上は知れる筈に候。小生はある時は母上の沒人情沒道義を呪ひたることすら有之候ひし、されど母上のかく爲りし徑路にもまた涙なきや。田舍を出づる時は鐐の世話になると申して、あれほど樂しみにせし身を、一朝にしてかくの如き境遇に置く。父に早く別れしこと――これ一家の悲劇の根本と存じ候。

母上の病氣は愈々惡しく相成候。此三月貴下のお出の頃は晴れたる日など小生宅まで自から歩み來り

候ひしが、今は全く床上を離るゝこと能はぬ容體と相成候。十日程前三崎博士來診、兄が後に聽きたる處にては腸に癌を生じたるらしく、とても不治とのことに候。小生等は自己の野心と自己の經營とに逐はれて、未だ一片の恩義をも報いざるに母上と別れねばならぬことを考へ候へば、腸九廻の思に堪へず候。公務にてお忙しきは萬々承知なれど、其中又一度御出京被下候やう賴入候。

弘前は如何。未だ參らぬ土地とてよくは解らず候へども、此間お出の時の話にて大抵は想像致し居候。下宿は城址附近の素人屋、貴下の起臥する室は二階の由なれば、前に近く山の見ゆることゝ存候。每朝士族町を拔けて郊外の聯隊本部へ御出勤、若々しき士官の面影眼に浮び申候。練兵の光景なども思ひ出し候。當地は麥の穗長く、蛙の聲前の田に喧しく、夜など母の病牀に侍し居候へば、一種狀し難き哀愁を覺え申候。

銑之助は此處まで書いて來て、行を更めて、『琴彈く娘の物語も承り度く候』と書添へたが、烏渡考へて、墨くろ〴〵と消して了つた。

秀雄が此三月に母親の病氣見舞の爲めに十日ほど來て居た時、琴を彈く銑之助の妻の側に坐つて、『嫂さんのは山田流と謂ふのか、弘前では山田流なんか一つも流行りはせんよ、皆な生田流だ！』と謂つて自分で武骨な大きな指に琴爪をはめて、覺束ないながらも六段のある部分をシャンシャンシャンと鳴らした。思ひも懸けぬ隱藝、『御上手ねえ、お稽古なすッたんでせう、』とお梅が謂ふと、青年士官は大得意

で、『かう見えても、ちやんと立派なお師匠さんが附いて居るからね、』と言つて笑つた。

其立派な御師匠さんは下宿して居る士族の家の娘であることがやがて解つた。嫂さんのとは餘程違ふといふ生田流の調子は、其の娘の琴の音に聞き覺えたのである。縣廳を青森に取られて次第に衰へた津輕歷代の城市、商業も工業も活氣を失つて、半歲を深雪の中に埋められる淋しい市街も、日淸戰役後、第八師團の增設と共に新しい活動の氣は到る處に充ち渡つた。劍鞘を鳴らして勇ましく街頭を步み行く青年士官の群は、尠くとも古く衰へた屋敷町の津輕少女の眼を聳たしむるに十分であつた。

『あだねす、こだねす、どせばよごいす』

などゝ謂つて、秀雄はよく人々を笑はせた。

『津輕辯、大津繪ぶしこ』といふのをも歌つて、風俗の違つた言葉の解らない北の國の物語を飽かず語つた。下婢のお鐵は面白がつて『椀子』『釜子』『べこゝ』『猫子のこつこ』などゝ謂ふ言葉を無闇に遣つて腹を抱へて笑ふ。銑之助も調子が可笑しいとて、『笠も冠らねえで、けらこも被ねえで』などゝ口癖のやうにいふ。あやしげな解らない津輕辯は、秀雄の居る間、一家の人々の嬉々たる團欒の種となつた。

『實に彼方の女は綺麗だ。何うしてあゝ色が白いのかと思ふ位ですよ。何でも上方の種だッてね、彼處等の女は、……』

などゝ言ふと、歷史通の長兄が、

『さうとも、あの津輕や秋田は皆な昔から船便の早く開けた處で、酒田から能代、深浦、鰺ヶ澤なんて、上方の船着が非常にあるのだからねえ。日本の歴史では太平洋岸より日本海岸が早く開けた。安部比羅夫が肅愼を伐つた時も其方側の道路を通つたものだ。だから上方の種が多いさ、』と、得意になつて講釋する。

母親も非常に喜んだ。あけび細工の籠に紅い青い林檎の數、汽車で買つて來たといふ南部鐵瓶、青森名産の雲丹、甘鹽の鮭など處狹きまで座敷に並んだ。母親は床から起きて來て額に帽子の痕の際立つて白い青年士官と相對した。秀雄は母親の病氣などは餘り苦にならぬといふ風で、元氣よく種々のことを語る。風が強く吹く日で、裏の雨戸は閉切つた儘、室は常に變らず陰氣であつたが、一座は何となく賑かで樂しかつた。銑之助は其時始めて自分の新妻を引合せた。『あれほど女に憧れた兄貴の嫁は要するにこんな女か』と思はれるやうな氣がした。其頃、母親は寢たり起きたりして居た。脇腹の凝結の痛まない日にはよく緣側の日向に出て居たのである。

銑之助は其時から今日までのことを頭に浮べたが、書き懸けた手紙の筆を取つて、

戀の問題は眞面目ならざるべからずと存じ候。曾て貴下は士官學校の入學試驗に合格し、高崎聯隊に入營せし時、その停車場前の旅店の二階にて淺間おろしの吹荒るゝ音を聞きつゝ、戀のこと物語りしを御記憶のことゝ存候。淸き少女を得よ、美しき少女を得よ、二人の兄よりも比較的世間に成功せし貴下は眞面目なる考にて理想的の少女を得よといひしことを御忘れ下さるまじく候。美しき淸き妹を得んことは小生等の願に候。不一。

五月十八日　　銑之助

秀雄　様

こんなことを書いて馬鹿々々しいと思つてまた消さうとしたが、思ひ返して封筒に入れて宛名を書いた。時計がカン〳〵と鳴つた。數へると十二時、表の家に看護に行つた妻は何うしたかまだ歸つて來ない。五月の日影は庭の緣葉に美しく照つた。

八

細君はやがて看護から歸つて來た。

すぐれない顏を爲て居る。眉のあたりが深い影を帶びて居る。銑之助は一目見て何か事のあつたのを知つた。里心の失せない新妻を庇ふ情と母親の理由のない難かしさを嘆く念とが同時に胸に迫つた。

『母樣、機嫌が惡るかつた？』

『え。』

としほ〳〵する。

『また何か粗相をしたんぢやないか。』

『いゝえ。』

『だつて厭に悄氣てるぢやないか。』

『私、氣が利かないんですけれど……』といくらか投げた形で、『私、何うしたら好いんでせう。』

『一體何うしたと言ふんだ？』

『母樣は何故あゝ難かしいんでせうね。私、もう悲しくつて……』

と涙を摩る。

銑之助は若い妻を憐んだ。毎日、朝の跡仕舞を濟ますと、すぐ母親の看護にと追立てるやうにして出して遣る。若い身空で老母の看病の辛いのはよく察して居る。その小さい胸では、其傍に居るのが怖いのであることも知つて居る。けれど自分の妻だけは母親の氣に入らせ度い。何んな犧牲を敢てしても母親に喜んで居て貰ひ度い。長兄の妻の絶えざる衝突を日頃淺ましく思つて居る渠は、自分の妻をも其巴渦の中に入れようとは願はない。まして母親はもう長い命では無い……。

『一體何うしたと謂ふんだ？』

『いゝえ、私ぢやないんですけれどもねえ、』とお梅は赤くした眼を摩つて、『嫂さんが蒟蒻の持つて來ようが遲いつて、ひどく叱られて……。お鐵さんまで小言を言はれて、一體親や主人を何と思つて居る

ッて、それは酷い權幕なの。あんなに弱つて居らしつて、何うしてあんな大きな聲が立つかと思ふ位ですのよ。私はね、背後で肩を摩つて居ましたけれど……怖くつて、怖くつて。』

『お前も叱られたんだらう。』

『いゝえ、私は叱られやしませんけど……昨日來たばかしの嫂樣を捉へて、お前は亭主を持つて苦勞したことがあるんだらうが、そんなことで世の中が渡れると思ふかの何のッて、それは聞いて居られないんですもの……。それに、お鐵さんにも隨分酷いことを言つてよ。鎌が猫撫聲をするから好いと思つて、勝手に人の息子を騙しに來る。お前達は狐だ！　狐だ！　と大きな聲しておつしやるんですもの。』

『困るなア。』

『そして終に、私に言ふんですの、お梅などは年が若いからよく聞いて置け、彼奴……彼奴と仰しやるんですよ。彼奴等のやうな甲羅の生えた狐の眞似をしてはいけない。何でも正直に、一度持つた亭主は、何んなことがあつても見捨てる氣になどなつてはなりません。私なぞを見なさい、若い時には難かしい舅姑に酷められ、三十八の時に連合に死なれ、それからかうして老人の世話も爲たし、子供達も成長くした……と仰しやつて、口惜しさうにお泣きなさるんですもの……私も悲しくなつて。』

『本當に、僕等は母のお蔭で成長くなつたんだから。』

と銑之助は萬感胸に集まるといふ風で聲を曇らせた。

すぐ言葉を續いで、『でもお前は母樣の氣に入つてるんだ。正直に眞心でさへあれば、いくら小言を言はれても、ぢき機嫌が直るんだから……。母樣は表面で好いことを言つて、陰で惡いことをするのが一番嫌ひだ。兄樣の嫁さんなどが此までいつも氣に入らなかつたのは、くど〳〵と陰で話などをして居るものだからいけないんだ。兄樣も今少し打明けて物をするやうだと好いんだけれど……』

『さうね、兄樣は優し過ぎるのね。』

『それからすぐ歸つて來たのか。』

『お晝飯のことも心配になりますけれどそんな風なんでせう？　歸るとも言へないで居ますとね、母樣が、もう晝だ、貴方が待つてるだらうからッて仰しやッたから歸つて來ましたの……。其時はもう機嫌が直つて、此間の蠶豆が旨かつたから、もう少し取つて來てお呉れと仰しやつてでした。』

で、お梅は午飯を濟ましてから、庭に行つた。

庭の一隅に五坪ばかりの畑があつた。昨年移轉した時、母親が樂しみに鍬を買つて來て耕して、菜だの、莢豌豆だの、蠶豆などを作つた。

蠶豆は今漸く熟した。

畑の周圍、垣の縁には玉蜀黍がもう二尺位になつて居る。畑にはこれも母親がまだ病床に就かぬ前種

芋を下して置いた里芋が小さい葉を並べて、其隣には馬鈴薯が二畦ばかり出來て繁つて居た。

緣葉の日に照つた間から、若い細君の赤い帶揚が見えた。花鋏の音が靜かな空氣に絕えず聞える。味噌漉を脇に抱へて、畦と畦との間に蹲んで頻りに手を動かして居るさまが、机に向つて原稿を書いて居る銑之助の眼にをり〳〵映つた。丸髷と色白の横顏とが亂れてこんがらかつた空想の頭腦を鮮かに彩る……。

遲咲の葉の細かい躑躅が燃ゆるばかりに庭に咲いて居た。

少時すると細君は蠶豆の一杯に充ちた味噌漉を抱へて畝の中から出て來たが、其儘夫の勉强して居る座敷の前の緣側に腰を懸けて莞爾して、

『もう大抵出來ましたねぇ、そろ〳〵取つても好い位ですよ。』

『さうかねぇ。』

と夫は筆を熱心に運ばせて居る。

『ほら、こんなになつて。』

と莢の少し黑くなり懸つたのを一つ取出して夫に見せる。

『成程、もう出來たね』と銑之助は言つたが、思想が今胸に湧き上つたといふ風で、一生懸命に紙の上に筆を走らせるに餘念がない。お梅は、夫が相手になつて呉れぬのを不滿足と言つたやうな樣子で、

緣側の柱に寄懸つて、默つて蠶豆の莢をむき始めた。

不意に、

『貴方、ほらこんな大きなのが……。』

と、豆の五箇まで莢に入つて居るのを見せたが、夫が相變らず相手にせぬので、

『貴方、貴方ッてば！』

『何だ？』

『そんなに一生懸命にならずに、少し御休みなさいよ。餘り勉强すると體にさわりますよ。』

『何ァに……。』

『まァ好いぢやありませんかねぇ、一緒に手傳つて下すつても。』

『喧しい女だな。』

と言つたが、それでも銑之助は筆を置いて、立つて緣側に來た。

細君は笑つて居る。

見る〳〵若い青い莢が一杯に緣側に散らばつた。味噌漉には、剝いた新しい半熟の柔かい豆が段々多くなつて來る。

『もう其中に皆な取りませうねぇ。』

『まだ惜しい。來月にならなけりや！』

『さうですね。けども新は本當に旨いわねぇ、八百屋で買つたのとは丸で比べ物になりませんねぇ。』

『それはさうとも。』

『私、畑、大好き。田舍に居て幼い時分には、よく母樣と枝豆を取りに行つたのを覺えて居ますよ。こつちに來てからは、畑など見たくも見られないでせう。あんな混雜した處ですから、』と言つて、調子を變へて、『またいろんなものを作りませうねぇ。今度は茄子が好いのねぇ。』

『茄子はむづかしいから、駄目だ。』

『さう、むづかしいの？』

『母樣でも丈夫で居ると、いろ〳〵世話して下さるけれど……僕等には、茄子はとてもむづかしい。』

『さう……それでも玉蜀黍は出來てね？』

『玉蜀黍は今年は食へる。もうぢき、七月には出來る。』

『本當に畑は面白いのねぇ。』

莢はやがて大分剝かれて、青い若い蠶豆は味噌漉に半分位になつた。細君は膝を叩いて立上つたが、奥から皿を一枚出して來て、一半をそれに入れて、風呂敷で包んで、

『それでは烏渡母樣に上げて參りますよ。』

九

其夜、兄は弟の家を訪うた。

長火鉢の前に弟に相對して席を取つたので、細君は洋燈の向うに身を小さくして坐つた。

『さつきは難有う……母樣大變喜んで居ましたよ。』と、先づ蠶豆の禮を述べる。

『いゝえ、ほんの少しばかり……。』

『新の、出たてのは旨いからねえ、……それにあれは昨年母樣が御自分で種をお蒔きになつたんだから。』

『さうですつてねえ。』

『今少し經つて、皆な取つたら、五六升は出るだらう、さうしたら、皆樣にも上げますよ、』と銑之助は言つたが妻に向つて、『まだ少しあつたらう？』

『え……。』

『兄樣に御上げな。』

『ほんの少しですよ。』

『少しでも好いよ。兄さんは珍らしいものが好きだから。』

お梅は立つて勝手へ行く。やがて新蠶豆の茹でたのを盆に載せて持つて來た。

『貴方ちよつと側に寄つて下さい、』と、夫に退いて貰つて、長火鉢の側に來て、お茶を淹れようとする。

『梅さん、まァ好いよ。』

『でも、まァ、……召上つて下さい。ほんの少しですけど。』

『結構、結構。』

と言つて、兄は煙草入から煙管を出した。

『母樣、今日はそんなに痛まなかつたさうですねえ、』と銑之助が言ふと、

『あゝ……好い鹽梅に……。』

『昨夜のやうに痛みつゞけに痛まれると困るからねえ。』

『左樣だよ、本當に……何うかして痛まないやうにして上げ度いと思ふけれど、……』

『それから今日は母樣はむづかしかつたッて？』

と銑之助は兄の穩かな顏を見た。

『うむ。』

と言つたが、煙草を一服吸つて、煙管に手を當てゝ長火鉢の縁で輕く叩いた。

『困るナア、實に。』

『本當に困るのさ。』

『昨日結婚しての今日だから、嫂樣さぞびつくりしたらうと思つて……。』

『少しは吃驚してたやうだツたよ。』

いつもの快活に似ず、何處となく悄氣て居る。

『何故母樣あゝだらうねえ。』

兄は默つて居る。

二人の胸には長い間の家庭の暗闘苦闘のさまが思出された。他人には話して聞かせても想像させることの出來ぬほどの苦痛、兄は『母樣には何うせ私は氣に入らないのだから、銑に後を讓つて私は隱居する！』とよく言つた。ある日の夕暮の衝突、『そんなに仰しやるなら、私は死ぬ、』と兄は本氣に祖先傳來の短刀を出す。母は母で、『貴樣のやうな卑怯者に切腹が出來るなら見て居るから爲て見ろ！』と呶鳴る。銑之助は泣いてこれを仲裁した。又、英男の生れた時には、家は貧苦、兄は非職、嫂は死亡、母親は泣きながら冬の日の寒空に赤兒の襁褓の洗濯をした。銑之助の若い妻も、主人の新妻も、今はこの吉田家の家庭の人となつたが、渠等はその骨に徹する苦闘の何物をも知らぬのである。家庭の苦闘ももう終に近い……と二人は思つた。

母を憐むの情は兄の胸にも漲つた。

『母樣、やつぱり淋しいんだねえ。』

『本當にさうだ、』と銑之助はさま〴〵のことを思ひ出したといふ風で、

『それでも、かうやつて吾々が何うやら彼うやらしてるのは本當に兄樣のお蔭だ。』

『いやーまア、皆な人並になつて吳れて、私も安心してるのさ。秀雄の處から消息は無いか。』

と主人は態と話頭を改める。

『たよりは無いが、今日手紙を書いて遣りました。』

『さうか、』と言つて、茶を一杯飲んで、蠶豆を抓んで、『成程、これは旨い、八百屋のとは丸で味が違ふ。』

『旨しいですねえ、』とお梅がいふ。

『初物は贅澤なものだ、』と平凡なことを言つて、『何うだねえ、おあがり……。』

『私、澤山食べたんですもの。』

『それでもまア一つ！』

と快活に笑ふ。

『茹で方が下手だから、不味くつて駄目だ、』と銑之助が言ふと、

『好く茹つてるぢやないか。……それア、若いから、始めつからさう旨くはゆきやしない。ねえ、

梅さん。段々それは稽古しなけりや――』

兄は常に若い弟の嫁を慈んで、いろ〳〵のことを敎へて遣るやうにして居るのである。

『秀雄に母樣の病氣のことも書いて遣つたかい。』

とすぐ言葉を續ぐ。

『え、三崎博士の診察のことを知らせて遣りましたよ。そして、成るべく都合して出て來いと言つて遣りました。』

『秀雄もいそがしいからな。』

『それはさうでせうけれど……。』

『相變らずのんきに暮して居るんだらうな。「あだねす、ごだねす」なんて遣つて居るんだよ、屹度。』

『屹度左樣ねえ。秀雄さんはのん氣で好う御座いますねえ。』

『軍人は皆なあゝだ、瀟洒して居て好い。』

『本當にねえ。』

と若い妻は調子を合せる。

『田舍の姉さんも出て來さうなもんだ。兄樣さう言つて遣つたんでせう。』

『言つて遣つたがね……子供は多いし、貧乏はしてるし、……』

『だつて、來いと謂ふ方が好いですよ。勝氣だから、後で苦情を言はれると惡いですよ。こんなに惡くなつて居るのに、來いとも言つて呉れないなんて屹度言ふに決まつて居るから……。』

『實はお鐵は歸して了はうと思つてるからねえ……お米に少しの間來て手傳つて貰ふと好いんだけれど……。お駒さんはさう何時までも居て貰ふ譯には行かんし、お桂も今少し馴れなくつては……。』

『さうですとも……私ひとつ來るやうに言つて遣りませうか。』

『さうだねえ。』

と兄は進まぬ風である。

田舍の機屋の上さんで、子供が五人、一番末のが漸く今年生れたばかり、銑之助はまだ田舍に居る頃、其姉の夫に伴れられて、好奇に足利の市に車を曳いて行つたことを思ひ出した。

『此頃はちつとは好いんだらう。』

『いや、あゝいふ風の男だからねえ、損ばかりしてるやうだねえ。』

で續いて種々な話が出た。役所への途中の話、役所の話、關係して居る歴史編纂の話、國學の話、漢籍の話、お得意の漢文の批評も出た。渠の書生時代には外國の學問は異端の敎へといふやうに青年の群から斥けられて居て、外國語を少しも學ばなかつたので、此の頃新聞でよく使ふモダン（modern）といふ字は何ういふ意味だなどと銑之助に聞いた。で、お駒の娘が迎へに來るまで、種々のことを語りつゞ

けて居たが、何となくはずまぬ調子で、何時もの戯談や駄洒落は遂に出なかつた。

『兄さん、今日は元氣がありませんでしたね、』と歸つてからお梅は銑之助に言つた。

十

老母は輕い搔卷を懸けて臥て居た。枕元には藥瓶と覆盆子の皿に載せられたのが置いてあつて、風が通るやうにと前と後の障子が明放されてある。座敷から茶の間は一目、嫁と家婢とは勝手元で何か頻りに小聲で語りながら、時々低い物音を立てゝ居た。

六月の晴れがましい日の光、物は皆生々として、夏の烈しい生育の氣はそれとなく人の頭を壓迫した。病める者のかよわい衰へた體は、殊に其强烈なる壓迫に堪へ兼ねたといふ風で、痩せ果てた蒼白い顏が際立つて減び行くものゝ哀れさを語つた。

脇腹の痛を覺える時には、言ふに言はれぬ佗しさと苦しさを感ずる。氣が滅入つて了つて、猶且つ頭腦が苛々する。何うしたら好いだらうといふやうな絶望的の憂苦が漲つて、思はず一種の戰慄が出る。

今は沈着いて居る。腹の痛みも無い。別にこれと謂つて惡い處は無いやうな氣がするが、それでも何處かに恐ろしい力が潜んで居て、それが時機を待つて身を壓して來るやうに感じられる。鈍い佗しい理由のない不安がをり〳〵來る。

何うしてこんな病氣に罹つたかと思ふ。と、其の最初の時の狀態がすぐ思出される。昨年の春の初、脇腹に瘍が出來た。切開しなければならぬかと思つて尠ならず心配したが、懸りつけの醫師の盡力で、四月頃にはすつかり治つた。あの頃から此病氣は萠して居たのだ。あの時、好い醫師に見て貰へば好かつた。切開してすつかり惡い膿を出して了へば好かつた。

銑之助が別居した頃、家具を買ひに神樂坂によく一緒に出懸けた。長火鉢だの、米櫃だの、お鉢だの、陶器だのいろ〳〵なものを購つた。道具屋を軒別に冷かして見て歩いたッけ。其頃矢來の交番から郵便局までの間の路を歩くのが、不思議に思ふほど大儀であつた。何時もそんなことは無かつたのに……。

あの頃から此病氣は萠して居たのだと再び思つた。

鎌の嫁、銑之助の嫁、すぐ考が飛んで、四五十年も前の昔に返る。御國替以前のことが眼に浮ぶ。出羽山形から三里、高楡の御陣屋に成長したことが分明と……。石の多い水の少い立谷川といふ川があつた。その立谷川からすぐ考が變つて、鎌の姉（それは死んだ）の生れたばかりの時、夫が勤番の朝の歸途に、其立谷川で梟を捕へて來たことを思出した。其川原で梟が烏につゝかれていぢめられて居るのを、大小二本差した夫が拔足差足近寄つて行く光景が何だか畫でも見るやうに、其身とは何の關係も無いやうに眼に見える。家に持つて來て、座敷の床の間に置いた。梟はじつとして居る。置物のやうだなどと言つたことを覺えて居る。近所から人が大勢見に來た。そして夜になつてから可哀相だと言ふので、

裏の窓から逃がして遣ると、ばたゞゝと大きな羽搏をして、栗の樹の繁みに飛んで行つて了つた。

近いことゝ遠いことゝが丁度遠近の無い銅版畫を見る樣に一緒になつて集つて來る。いろ〳〵な顏が眼前を走馬燈のやうに過ぎて行く。其身は今年六十一といふことを忘れはせぬが、又一方では若い若い若い身のやうな氣がする。庭の樫の葉が微かに風に動いて、ちら〳〵と日光が差込む。前の井戸で水を汲む音がする。家婢のお鐵が門前で何か言つて居る聲が聞える。例の落合の八百屋の爺の聲だ。

『御隱居樣は如何です？』

といふ見舞の言葉がする。

お鐵が何か其返事を爲たやうであるが、聞取れない。床の間の置物の唐獅子が眼に附く。嫁の簞笥の上の鏡臺の鏡に自分の寢て居る痩せた脚が映つて居る。例の不安と共にある力が迫つて來たと思ふと、今迄胸に描いた總ての追懷、總ての現象が幻のやうに消えて了つて、チク〳〵と痛い腹の現實に歸着する。

老母は氣丈な性質である。夫に死なれてから二十年來、人に指をさゝれたことはない。物の解りの早い、正直な、感情的な、血の燃えた烈しい處がある。愛憎の念が如何にも强い。氣に入つたものは馬鹿に氣に入るが、氣に入らぬものは、その弱點ばかりが見える。ある目的を抱いて來るものを殊に甚しく憎んだ。

『私も御寺參でも始めようかな、』などゝ言ふ事がをり〳〵ある。かういふ時は、屹度其の家庭の衝突に苦しみ拔いた後だ。けれどそれは出來なかつた。珠數を繰つたり、お寺參をしたり、孫のお傳をしたりする普通の人の好いお婆樣を見ると、何うしてあゝ閑暇なのだらうと思ふほど其心は現實に觸れて居た。不安の念などを起さずに、嫁や息子のするまゝに、平氣で日向ぼつこりでも仕て居れば好いのであるが、何うもさうしては居られない。眼がある、物が見える、するとすぐ其の鋭敏な頭腦が動搖して、不安、不平の念が起つた。

これが其性質ではあるが、境遇もさうするのに與つて力があつたことは言ふまでもない。女子供だと思つて人に馬鹿にされまいといふ長い間の不安と努力とは、其神經を常に興奮させたのである。それに、老母は封建時代の女子の絕對の服從といふ境遇に、其屈しない烈しい性質を置いて來たのだ。自己の絕對の服從といふことは、其身が主權者となつた場合には、多くは自己の忍耐したやうな絕對の服從を他から要求するものである。封建時代ならそれでも好いが、今は人も變り、思想も變り、習慣も變つた。烈しい衝突と不平と不安と荒涼たる生活とは竟に竟に免るゝことが出來なかつたのである。

三男の秀雄のことを思つた。あれが人並に立派に成功したのは嬉しい。お上の御用で弘前などゝいふ遠い所に行つて了つたのはいかにも殘念だが、これも仕方が無い。斷念めて居る。此間來た時、『もう母樣はお前に逢へるか何うだか解らないから、丈夫で、』と言つたら『うん……』と平氣で言つて涙も滴

さずに車に乘つた。あの男らしい處が可愛い。何も彼もつけ〳〵と言つて吳れる處が嬉しい。鍬など、は丸で違ふ。かう思ふと其の軍服を着て劍を下げた額の白い無邪氣な顏が歷然と眼に見える。今一度逢ひ度いものだ。今一度、たッた一度で好いから逢ひ度い。

銑之助に手紙を書いて出して貰はう……と思ふ。

腹が矢張痛む。蒟蒻を當てようかと思つたが、彼奴等の世話になるのも面倒だと思ひ留る。腹を强く蒲團で押すやうにする。

眼では見て居らぬが、嫁が前の庭を通つて、四疊半の離座敷の垣の處に行くのがよく解つた。嫁は其處で、垣越しに隣の細君と長い饒舌を續けるのが常である。

老母は不愉快でならぬ。興奮した神經が手傳つて、其饒舌が此處まではつきりと聞えて來るやうに思はれる。前の嫁も井戸端でよく油を賣つて居た。何うして今の若い者はあゝだらう！　そんな閑暇があつたら、病人の世話をしたら好さゝうなものだ。でなくとも腰卷の汚ないのでも洗濯したら好いだらう。此間なぞ現に汚い物が其處等に散ばつて居た。女がさういふ不始末をするのは此上もない恥辱である。ふと前の嫁が朝飯の焦げを食ふのが厭さに、襤褸布に包んで押入の奥に隱して置いたことを思ひ出して、厭な厭な氣になる。

家庭の衝突は三度の食事にも痛くつらかつた。誰も焦げた飯や冷飯を食ふのは厭だ。けれど老母は四

十年來、それを食つて來た。嫁も當然食ふべき者と思つて居る。であるのに優しい主人は氣の毒に思つて、それを一二杯手傳つて遣る。主人が食ふのを弟の分際で食はぬ譯に行かぬ。二人の弟が手傳ふと、嫁のは殘り少くなつて、餘は暖い飯を盛る。と弟も不平、老母も不平、『一體、鍬が甘やかすから惡い、』といふ痛い非難が起る。

英男が四歲ぐらゐの時、焦飯が非常に好きであつた。ある時、銑之助は戲談に、『亡くなつた嫂樣は焦飯ばかり食はせられたから、英男も好きなんだ！』と言つた。と、老母はえらく怒つて馬鹿を言ふナと叱つた。――腹はチク〳〵と針で刺すやうに痛い。

神經は益々昂まる。頭腦が何のことなしに動搖する。いつもの痛を押へに押へて居るが、容易にそれが押へ切れない。追懷、苦痛、苛責、絕望、――

『私のやうな業法人は早く死ね、死ね！』と思つたが、一方では死ぬのが何よりも恐しく厭であつた。堪らなくなつて、

『お鐵！　お鐵？』

と叫喚くやうに呼んだ。

返事が無いので、

『お鐵！』

お鐵は飛んで來た。

老母は顏をしかめて、迫つて來る腹の痛いのを押へて居る。

『お痛みですか。』

『痛いから蒟蒻をつけて呉れ。それから、お桂があの垣の處で、饒舌をして居るから呼んで呉れ。』

立つて行つたが、『奥さん、奥さん』と呼ぶと、やがて返事がして、嫁は其處から姿を顯はした。

丸髷の壞れ懸けた頭で、交織の縞の單衣に黑繻子と綿繻珍との腹合の帶を緊めて、効々しさうに襷を懸けて居る。如才の無い態度で、

『おや、母さん、お腹が痛いのですか。ちつとも存じません、お饒舌をして……。お隣の奥さんが捉へて離さないもんですから。』

と言懸けて茶の間へ行く。

『何方がつかまへて放さないんだか解るもんか、』と腹を押へながら、老母は嫁の後姿をぢろりと見て言つた。

一時間ほど痛んだが、それでも好い鹽梅にやがて靜まつた。蒟蒻も一度着けたばかりで濟んだ。其處へ藥取に行つた銑之助の妻が歸つて來た。風呂敷から梨子を三箇出して坐つた。

老母は銑之助の妻の若々しい扮裝と生々した若い血色とを好ましさうに嬉しさうに見て居た。秀雄の

嫁が出來て、かうして來て居て呉れたなら、さぞ嬉しからうと思ふ。またしても青年士官のことが胸に上る。

十一

御維新の時、館林藩は烈しく動搖した。御親類の宇都宮の殿樣は、賊に襲はれて御城を取られて、大小も百姓家にお預けになつて、お微服で早川田口から逃げてお出になる。忍藩も形勢不穩で、何だか賊に味方をしたといふ評判が專である。藩はもうすつかり四方から圍まれて、何時戰爭が始まるか知れぬ。風聲鶴唳、人々は皆な荷擔して立つた。力になる男達は曩に既に多く出兵して了つて、年寄まで驅催されて、御番所々々々を固めて居るので、何處の家にも女子供ばかり、賴りになるものとては無い。丁度七月の暑い頃であつた。それ！　と言つたら逃げ支度を爲て置かねばならぬので、近所の上さん達は、門口に出ては聲を密めて落延びる先を彼れの是れのと語り合つた。第一に蒲團は持つて行かなければならぬ。蚊帳を忘れてはならぬ。先祖の佛樣だけは何を擱いても携へて行かねばななぬ。あれも持つて行き度い。是も持つて行き度い。考へるとあの時は實に心細かつた。丁度あの時お米が腹に居た。不安心で不安心で立つたり居たり、今にも鐵砲の音が聞えるかと氣が氣でなかつた。――其翌日、官軍が勢揃をして入つて來たのを見た時は、丸で生き返つたやうに人々は喜んだのである。陣笠に陣羽織にダンブ

クロ、槍が美しく日に光る。『宮さん宮さん御馬の前にひら〳〵するのは何ぢやいな、あれは朝敵……。』といふトコトンヤレナ節が城下に充渡つた。夜など錢湯に行つて歸つて來ると、其節を唄ふ聲が路の角や裏の畠の向うに聞える。螢がスイ〳〵と闇を縫つて飛んで行く。

あの時、鐐は三歳たつた。いつも午後に晝寢をする。其時分よく調練の太鼓の音が鳴響く。ドン、ドコ、ドンドコドン、――それが如何にも喧しいので、折角寢たのを眼を覺さなければ好いと、何のくらる苦勞にしたか知れなかつた。

――孝がすぐ變る。明治十年の二月夫が警視廳から歸つて來る。愈々戰爭に出ることに決めたといふ。『貴郎、田舍の老人や子供を置いて、もしものことがあつたら何うするんです?』と居直つて眞面目に聞くと、『其時は其時さ、なるやうにするさ、』と平氣な調子で、『御維新の時死ぬ筈なのを、十年生延びた、死んでも殘り惜しいことは少しも無い、』と言ふ。其頃夫は東京に出て下谷の根岸の警察に勤めて居た。老母に取つては其時が一番自由で樂しかつたのである。中根岸の榎の樹のある附近に借家をして住んで居た。近所に八百屋の市があつて、夜はカンテラの黑い煤煙が狹い通に滿ちて、相場を糶る聲が喧しく聞える。大根の白、漬菜の青、荷車が混雜とあたりに置かれてあつた。坂本のある横町の角には、夕河岸の魚を鬻ぐ露店が出て居る。鰯が今日は廉かつたと夫が歸り懸けに見て來ていふ。すぐ出懸けて行つて買つて來て夫の晩酌の料にした。戰爭に行く前年、十二月に秀雄は產れたのである。鐐は十

三歳、お米は十一歳、銑之助は六歳、戰爭に行つた跡は小さい家を借りて、御院殿の坂の下に住んだ。秀雄が弱いので、子供等を前の家に賴んで、結付に負つて、よく淺草の門跡の裏の小兒科の醫者に通つた。坂本の通に繪草紙屋がある。戰爭の錦繪が多く出て居る。それを行きに歸りに見て、戰地の光景を胸に描く。三月の末に戰地から消息があつて、『柳の糸も長く榮の花も咲きて、長閑なる氣候に相成候』と書いてあつたが、四月の中旬の御船の戰には夫は戰死して了つたのである。五月になつて一時絕えた郵便が開けて、何處の家にも消息はあつたが、吉田の家には無い。郵便脚夫の通るのを見る度に待渡つたが、遂に來ない。一日總領の鐐を牛込の同藩のある家に樣子を聞きに遣つた。夕暮を待兼ねて、御院殿の坂の上を見て居ると、其總領の少年は其家から貰つた大きな山吹の花の枝を擔いで、其姿を薄暮の空氣に浮出すやうにして歸つて來た。山吹の花を床の間の花瓶に挿した。月の末には戰死の報知が警視廳から來たのである。

國から舅が出て來て、七月には一家を纏めて田舍に歸る。利根川の河舟、薦包の幾個となく重つた後に、母親は其總領の少年が船頭に交つて淺瀨で無邪氣に泳いで居るのを見て居た。夏の暑い日が閃々と水に照り渡る……。

鐐が一人前になつて、東京に上つた時の利根川が續いて老母の眼に映つた。河舟、船頭、苫、岸の竹藪、柳、それが總て其一生と密接な關係を有つて居る。それから田舍家――狹い古い藁葺の田舍家が額

緣にでも入つた畫のやうにくつきりと見える。壁に貼られたまゝ、黑く煤けた西南戰爭の錦繪、野津大佐が劍を振り上げて軍旗を奪ひ返した。其傍に東市名所の不忍池の繪が一枚貼られてあつて、本鄕臺の大學校の時計臺が高く富士と共に聳えて居た。

不圖嫁の死んだ顏が眼前にちらつく。子癇といふ病氣は、姙娠中精神の過勞から來ると或人が語つた。此身が酷め殺したやうなものだ。かう思ふと神經がブリ〳〵する。もう呼吸を引取つたと謂ふので、怖怖ながら座敷に行つて見る。嫁は蒼白い顏をして死んで居た。鐐は男泣に泣いて居る。因果な赤兒は傍に放り出した儘誰も構手が無い。其死んだ蒼白い嫁の顏！　今思つても總身が戰へる。

睦しい若い夫婦の愛情、二十何年來自分の身にも增して愛育した息子を其儘奪ひ去られるやうな氣がして、一方では限りない孤獨を感ずると共に、一方では理由の無い嫉妬と忿怒とを感じた。襖を隔てゝの夜のさゞめ言、老母は嫁を仇敵の如く憎んだ。

誰に大きくして貰つた。此母親の爲めに人並に育て上げられたのではないか。此の母親が居なければ——あの時再緣して了へば、……　再緣した例はいくらもある……　お前達は何うなつて居るか解らんのだ。それなのに嫁の愛に溺れて、母親を粗末にするとは、男にも似合はぬ意氣地なし、何の爲めに學問をした。

『孔子樣の敎にはさう書いてあるか、』とよく罵倒した。嫁は容色は左程よくはなかつたが、小心な眞

面目な女であつた。暖かい家庭の懷から、この嵐のやうな姑の惡い機嫌、絕えず其衝突に胸を痛めて、常に病人のやうに蒼い顏をして居た。

蒼い顏が思出すまいとしてもまた思ひ出される。葬式の時の混雜、實家の父親の悲憤——もう、もう、思出すまいと自から眼をふさぐ。

その赤兒を老母が育てた。機械で腹から出したので、其痕の穴が後頭部に出來て、膿が絕えず出る。それを銑之助は熱心に繃帶して遣つた。銑之助の小心な文學好きな胸には、此時の光景は深く淺ましく刻まれて、殆ど家にあるに堪へなかつた位である。里子の遣る好い口が見附からぬので、久しい間、主人はそれを抱いて寢た。夜深に寢こじれて寢つかぬのを、ほい〳〵と主人は緣側を搖つて歩いた。母親はそれを世話して遣らうと思はぬではなかつたが、感情が衝突して居るので、腹では不人情と思ひながらも、それを平氣で見て居たのである。

青山の嫁の墓が今度は眼につく。椿、楓樹、風雨に曝された墓石、嫁の道具を歸す歸さぬで、一悶着があつて、三百代言風の男が實家から來て、五時間も荒々しい聲で饒舌つた。主人の生優しい聲が齒痒くつて、齒痒くつて次の間に聞いて居られなくなつて、飛出して行かうかと、母親は幾度も思つた。で、交涉の結果、縮緬の婚禮衣を賣つて、其の青山の墓石が建てられたのだ。

頭腦が眩惑するので、われ知らず突伏さうとすると、『また御痛みですか、』といふ聲がする。氣が附い

て見ると、銑之助の嫁が肩を摩つて居た。

少時すると、門前に俥の音がして、醫師が來る。

此附近がまだ田舍の頃から居る醫師で、脊の低い、元氣な、深切な五十恰好の莞爾した顏、氣輕に座敷に通つて、病人の起きようとするのを手で制して止めて、先づ胸をひろげて腹部を撫でゝ見る。凝結のある邊を堅く押へて、

『痛むか』と訊く。

老母は頭を輕く振つた。

『何時も痛むのは此處だナ、』と言つて、少し考へるやうな態度をして、『ふん』と獨で點頭いて、鞄から聽診器を出して、胸の其處此處と當てゝ見た。最後に脇腹の凝結の處を長く耳を澄して聞いて居たが、

『よろしい。』

と言つて、はだけた病人の胸を合せて、聽診器を藏ひにかゝる。お鐵が眞鍮の金盥に水を持つて來て、新しい手拭を出す。

手を拭きながら、

『大きによろしい。』

『氣分の方は少しは好う御座いますが、時々痛むのには困り切ります。』

『さう急には治らんナァ。』と醫師は笑つて見せる。

『何うか腹の痛みだけでも除つて頂きますれば――。』

『よろしい、屹度私が治して上げる。』

いかにも輕い病氣と謂つたやうな風である。不圖、其處にお桂の坐つて居るのに眼をつけて、

『これが主人の嫁さんかな。』

嫁は慌てゝ辭儀をする。

老母は、『此間貰ひまして……不束者ですが……何分宜しく。』

『私はまた此間まで此方が嫁さんかと思つて居ました。』

と丸髷姿のお鐵の方を振向く。お鐵は顏を赤くして茶の間に行つて了つた。

『……いゝえ、あれは召使で……』といふ老母の聲がする。

『此方のは弟御の嫁さんでしたな、』と醫師は猶平氣で、『お婆樣、かう好い嫁さんを澤山持つては本當に幸福だ。もう樂が出來る。』

『いゝえ、もう……。』

猶話を續けるかと思つたら、ついだ茶をも飲まずに、其儘ふいと立つて歸つて了ふ。俥ががらゞゝと坂を上る。

丁度其頃此家の主人は神樂坂の通を歩いて居た。紺羅紗の薄い夏の脊廣の三四年も着古したのを着て、パナマ帽の黄くなつたのを冠つて、紫の唐縮緬の風呂敷包を小脇に抱へて居る。風呂敷包の中には今夜校合しようと思ふ歴史編纂の書籍が入れられてあつた。俄に暑くなつた路に、シャツもズボン下もびつしより汗になつて歩を運ぶのも大儀らしく、汚れた手巾を隠袋から出しては、帽子を取つてをりをり額の汗を拭いた。街には車が織るやうに通つて、書生が行く、女學生が行く、商人が行く、番臺を擔つた魚賣が行く。氷屋の硝子の暖簾がきら〳〵と日に光る。角の交番には白い服を着た巡査が疲れ切つたといふ風をして立つて居た。

渠の精神も全く憊れ果て倦み果てゝ居た。役所の仕事も、囑託された歴史編纂も厭で厭で爲方が無い。新しく貰つた細君に對しても別に樂しいといふ感も起らない。馴染の女を鳥度念頭に浮べて見ても、それも何の反映をも起さずにすぐ消えて了ふ。不圖懐の財布に金が五十錢あることを思出した。丁度其前が青木堂の舗、果物や魚肉類の罐詰が山のやうに積まれてあるのが眼に入つたので、母親を喜ばせようと思つて、づか〳〵と入つて行つて杏の罐詰を一箇買つた。

十二

『お桂さん、たんと御馳走して下さいましよ、』と隣の細君が冷かすと、

『何んぢやろ、まァ、……。』

と手で打つ眞似をしたお桂の言葉には行田訛が殘つて居た。

『だッて餘り幕無しぢやありませんか。……默つて聞いてると思つて……。』

『何が幕無しぢやろ……ちつとも可笑しいことは無いぢやないかね。』

『だつて隨分ですからねぇ。』

『何が隨分なの？』

と笑ひながらお桂は態と膝を進める。

『お婆さんが妬くの……半襟を買つて貰つたのッて……、私や眞面目に聞いて居れば、好い氣になつて、たんとお惚けなさいよ。』

『今に新甘薯が出來たら、筋の無い所を澤山奢らうかねぇ。』

と相好を崩して笑ふ。

『人を馬鹿にして……。』

と隣の細君も打つ眞似をする。

『だッて左樣ぢやないかね。』

『ちつともそんなことはありやしない。私甘薯大嫌ひ。』

『さう、甘藷大嫌ひ？　それぢやお汁粉でも……。』

『お汁粉も大嫌ひ。』

ふとお桂は思附いて、『お汁粉つて言へば、昨日それやひどく叱られたんですよ……。』

『誰に……。』

『母樣に。』

『何うして？』

と稍眞面目になる。

『昨日の朝お汁粉が喰べ度い、干餡でない、小豆から拵へたのが食べ度いと言ふんでせう。丁度お梅さんも來るから、午時分までに拵へて御馳走して遣れと言ふから、私、一生懸命で、この暑いのに火を燃して、餅を三軒ほど訊いて廻つて、漸と買つて來て清しの方が好いだらうと思つて、あくぬきをして拵へたのさ……すると大小言さねぇ。』

『氣に入らなかつたのかぇ？』

『まァ、お聞き、かうなんだよ。私や旨く出來た積で、母樣の分だけ小さいお鍋に入れて持つて行つて置いて來るとね、始めは喜んで莞爾して、出來たかぇッて言つて、起返つたのさ。私は用があるから勝手に來て居ると、お桂！　お桂！　と尖聲で呼ぶぢやがね。』

『ふむ……。』

『吃驚して行つて見ると、苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏をして……お桂！　これは何だ？　これでも汁粉かと言つて、杓子を盆の上に、』と面白い手眞似をして見せて、『かういふ風に投り出すぢやないかね。』

すぐ言葉を續いで、

『そして、お梅さんの居る前で、こんな鏡汁のやうな汁粉が食へるもんか、汁粉の拵へやうも知りやがらないッてね、それァ不機嫌たら無いんぢやがね……。ごてぐと田舍風に拵へりや好かつたのに氣が利き過ぎてお氣に召さなかつたのさ……本當に難しい婆樣――。』

『婆樣なんて、そんな酷いことを言ふもんぢやありませんよ。』

『はい、はい、』と態とおどけた調子で、『御免なさいよ。惡う御座いました。これからは謹みますよ……。』

『お桂さんはすぐあゝだから厭さ。今少し眞面目になさいよ。』

『はい、はい』と笑つて居る。すぐ、

『でもね、家では旨く出來たつて食つて呉れましたよ。』

『結構ですよ。』

と隣の細君は冷かした。

少時話は途絶えたが、やがて、

『お鐵さんはまだ歸らないの？』

『歸す。歸すッて言つてるんだがね。何時歸るんぢやらうねえ。始のうちは私も不思議に思つたんだがね。あの顏に白粉をべたぐ〳〵つけて、いやにぢやらぐ〳〵して、厭な女ッたらありやしないんだものねえ。そして時々書齋に入つて、うちと何かこそ〳〵話してるぢやないかね。始めは私、てつきり……それだと思つて、お菊さん（隣の細君の名）もお菊さんだ、こんな處に世話して呉れるとは何うしたんぢやろと思うたくらゐ……。』

『まさか鐐さんが……。』

と隣の細君は笑つた。

『えゝ〳〵、それはそんなことは無いのはすぐ知れたけどもねえ……。』

『寢物語にたんと油を取つたといふ譯？』

『えゝ〳〵どうせさうさねえ。だけど本當に厭な人つたら無い。』

『あの人もお婆さんにはあれで隨分睨まれたものよ。』

『さうでせうねえ。それでもあゝして居るんだから、餘程旦那樣が見込まれたッて言ふやうな譯ですねえ、屹度……。』

『それは左樣よ。』

『其のうち、田舍の義妹が來るんでせうよ……。それ迄置くかも知れないとうちで言ふことは言つてましたがねえ。』

『さうですか。』

また話が變る。

『銑之助さん、よく見舞に來て？』

『えゝ〳〵。』

『際分難かしい人でせう。』

『えゝ〳〵もう私、閉口。何うしてあゝうちなどと氣分が違ふんぢやらう。むづかしいッて、それは一通りぢやないだがねえ。』

『それァあのお婆さんさへ、銑の變人には困る困るッと言つてたんですもの……。それは變り者よ。この隣の四疊半に居た頃などよく知つてるけど……一日蒼い顏をして默つて机に向つてるんですからねえ。そして時々大きな聲をして、新體詩とか言ふものを歌ふんでせう。それァ餘程變でしたよ。それから友達が來て、よく議論をするのよ。丸で喧嘩かしらと思ふくらゐ……。』

『今でも左樣なんだッて……それに、お梅さんは望んで貰つたんだッてねえ？』

『え、さうよ、』と笑ふ。

『あの變人が、お梅さんのことだと、大變なんだから可笑くなつて了ふぢやがねえ。お梅さんが母樣に小言を言はれやしないかと、そればかり苦にして居るんだよ……。それにお梅さん、まだほんにねんねえねえ。』

『何處か娘々してる子ねえ。』

『支度が立派だとか何とか言ふから、何んな衣裳持かと思つて、此間見せて貰つたら……。紋附が二重ね、箪笥が一棹、初めての嫁さんでは立派でも何でもないぢやがねえ。』

『でも、何から何まで揃つて居たッて、お婆さんお自慢でしたよ。』

『あんな鏡臺や下駄箱なら、いくらでも揃へられるがねえ。もう長持など鐶が外れて居るぢやないかねえ。』

裁縫友達は藏すところなくいろ〳〵のことを語り合つた。菓子器の餅菓子はみなになつて、茶が出流れて了つた。をり〳〵お桂の頓狂な笑聲があたりに聞える。

『只、本當に困るのねえ、』と暫くしてからお桂は梢眞面目な調子で、『話をしてられないのが一番困るんですよ、書齋に入つて、何か言つてると、すぐ喧ましいんぢやがねえ。本當に遣り切れないねえ。』

『睦しい間でも、親には疎々しく見せろッて言ふ話があるぢやありませんか、』と細君が少し笑ひ懸けながら言ふと、

『すぐあゝ取るんだよ、まア、……』と少し睨む眞似をして、『だから厭らしい。さういふ積ぢやないんだッてばねえ、本當に。』

『それはさうでせうよ……』と細君も調子を變へて、『まア辛抱するんですよ。喧しいたッて、はい言つてさへすりや好いんですからねえ……。もうあゝなつて居るんですもの、何うせ長いことはありはしない。此頃だッてよくはないんでせう？』

『えゝ〳〵、段々惡くなるばかり……。』

『辛抱なさいよねえ』と言つた細君の聲は眞面目であつた。

十三

お鐵は六月の下旬、梅雨の蕭々と降頻る日に其家を去る準備をして居た。臺灣に赴任する家族について行かうか、某病院の看護婦にならうか、此二つがかの女の將來の運命であつた。昨年の暮近く、ある希望を抱いて此家に來てから、隨分種々なことがあつた。其折々につけて怒りもし泣きもし嘆きもした。むづかしい老母を呪つたことも一度や二度ではない。けれども半年以上家族として働いた馴染は、今別

れに臨んで、一種の哀情を催さしめるに十分であつた。

嫁さんの馴れるまでと言つて留つて居たが、もう嫁さんも看護の仕方を覺えた。田舍の妹の來る迄と旦那樣は仰しやるが、さう何時までも便々としても居られない。其身の不仕合せの始末もつけなければならない。天にも地にも頼るものとては無い自分の孤獨を思つてお鐵は袖を濡らした。

嫁が出て行けがしに取扱ふのが憎くつて爲方が無かつた。反動として、この嫁の世話になる垂死の老母が可哀相になつて、同情の念が湧いた。

お鐵は玄關の三疊を一杯にして、其荷物を片附けて居る。小さい鏡臺を疊んで、行李の中に入れたり、二三册の書籍を其隅に押込んだり、蒲團や夜着を貲布の大風呂敷に包んだりして居た。昨日結つた丸髷に伊勢崎銘仙の單衣、黑繻子の帶を緊めて、烏渡小綺麗な身恰好。

がらゞ〳〵と音して俥が來た。

其儘座敷に行つて、

『それではお隱居樣、永々お世話になりました。隨分御機嫌よろしう……。此次私がお伺ひ致す時分には丈夫になつて……』と言懸けた聲は曇つた。

『あゝもう行くかえ、』と老母は起直つて、『いろ〳〵我儘を言つて世話になつたね。もつとお禮も爲なければならないんだけれど、かういふ有樣だから……』と少し途絕えて、『昨日、臺灣に行くとお言ひだけれど、そんな遠い處には行かないでね、東京に居て、時々は訪ねて來てお呉れ！』

老母の眼にも涙が見えた。

『旦那樣にも宜しく仰しやつて……。』

『えゝ、よく言つて置きますよ。あれもお前には大變世話になつた。……』

『いゝえ、何う致しまして。』

不意に『お桂は何うした？　お桂！　お桂！』

『いゝえ、四疊半にいらつしやいますから、私が參ります。』

と言つて、お鐵は緣側を傳つて行かうとする處へお桂が顏を出した。で、別離の言葉がまた繰返される。

荷物は車夫が俥へ運んだ。お鐵は爪革がけの足駄を穿いて、ちよつと裏の家へも暇乞ひに行つて來るとて門を出た。綠葉に降り濺ぐ絲のやうな雨、長く連る柴垣から、色附いた麥の黃い畠に添つて、急いで行く新しい蛇の目傘。やがて低い門の中に其傘の影は見えなくなつたが、十分ほど經つと、今度は銑之助の若い細君と並んで此方に歩いて來るのが見えた。

門にはそれでもお桂も見送つて居た。

『俥を今一臺呼んだら好いでせう。』と荷物で一杯になつて居るのを見てお梅が言つた。

『いゝえ、ぢき其處の藥王寺前に知つてるものがありますから、一先づ其處に落着かうと思つて居り

ますから。』

幌を半懸けた俥は動き出した。

梅雨の降頻る中に、蛇目傘を傾けて、三人は別れを叙した。

『左様なら。』

『それでは御機嫌よう。』

お鐵は俥の後に跟いて坂を上つた。其身の不運、將來の不安が簇々と思出されて、涙は袖を濕した。坂の上で振返ると、綠葉に包まれた其低い家には、雨が斜に降濺いで、銑之助の若い妻の蛇目傘は今し其門内に入つて行く處であつた。お鐵は別れて來た家のことを考へながら、泥濘の深い道を歩いた。

十四

さみだれが降り續く。庭の綠葉は低い檐にかぶさるやうに蔽ひかゝつた。床の悪い疊がでこぼこと濕つて、物の黴臭い鬱陶しい重い空氣はじめ〳〵と人の氣を腐らせた。

主人は古い長靴を穿いて、毎朝雨を衝いて出て行く。お鐵が歸つたので、家は俄かに淋しくなる。嫁のお桂はそれでも深切に病人の世話をして遣る積であるが、何うも老母の氣に入らない。粥の加減が拙かつたり、器具の取扱が粗雜であつたり、機嫌の取りやうが調子に合はなかつたりするので、兎角苦情

が起り勝である。

老母はいつも默つて、苦い顔をして、臥床の上に起返つて、盆に載せた小鍋の粥をさも不味さうに獨り食つた。

肩を摩りませうかなどと言ふことがあつても、滅多にお桂には賴まなかつた。嫁の身にしてはかう取扱はれるのがいかにもつらい。けれど何うかして機嫌を取らうなどといふ心は、二十八の再婚の女にはもう無かつた。銑之助の細君に後を賴んでは、氣晴しによく隣へ行く。主人が歸つて來ると、すぐ書齋に其後を追つて、くど〳〵と何事をか囁く。別に際立つて母親の蔭口を言ふ譯でもないが、これが少なからず母親の氣色を損つた。『それ、御覽、お桂がまた二本棒どのに甘つたれて、悪口を言つてるから』と傍に侍して居るお梅によく顎でしやくつて見せた。

それに、男の兒がなか〳〵懷かない。『婆ちやん、婆ちやん』と、老母ばかりを賴りにして、新しい母親などは殆ど顧みようともしなかつた。學校の世話、着物の世話、下駄の世話——小さなことによく紛紜が起つた。

お鐵が歸つてから、お桂は男の兒を其傍に臥かした。一夜寢そびれて非常に泣いたことがある。すると老母は、『お前達には任して置かれない。鐐も鐐だ、少しも自分の子供らしい世話は爲やしない、』と言つて、翌晩からは自分の蚊帳の裾の方に臥かすことにした。

病人は夜寢られなくつて困つた。蚊帳の中に行燈がぼんやり點いて居る。物の影が青く暗く一室に行渡る。藥瓶と果物の鑵詰と水差とが枕元に置いてある。中仕切の襖は閉てゝあるが、建附が惡るいので、夫婦の寢て居る隣の茶の間の洋燈のあかりが透いて見える。時計の音が際立つて耳につく。と思ふと鼠でも居ると見えて、時々天井で凄じい音がする。

洋燈がふつと消える。

十五

さみだれが猶幾日か降り續く。

裏の畑の麥は既に黄ろく、もう刈取らなければならぬやうになつた、百姓の老人夫婦が蓑笠を着て、濡れそぼちながら畑に働いて居るさまも見える。路が惡くなつて、足駄を泥濘に取られる若い女の姿も見える。銑之助は賣る當の無い長い小説に筆を着け初めた。豆腐屋の喇叭の音も雨に濕つて、御用聞の酒屋の笠からは雨滴がしとゞに落ちた。梅の實が黄く熟した。

ある夕暮に俥が來て門前に留つた。やがて三歳位の小兒を抱いた三十二三の髪を束ねた田舍風の女の姿が見えて、車夫は大きな風呂敷を抱へて先に立つて格子戸をあけた。案内を乞ふ甲走つた女の聲がする。

玄關に出た主人は、

『やあ、お米か。』

『兄さん！』とさも懷かしさうに。

座敷に入つて、憔悴した母親の顔を見るや否、

『母樣、何故こんな病氣になつたんだねえ。』とお米は聲を震はして言つた。

『お米か、よく來て吳れた。』

『母樣――。』

語を半にして顔を掩つた。

中野縞の細かい萬筋の袷を着て、髪は櫛卷にして居る。色の淺黑い、額の廣い、反齒の、いかにも田舍商人の上さんと言つた風、膝にまつはる年弱の三歳の女の兒を抱寄せて、胸をはだけて、大きな乳を含ませた。

『こんなに惡いとはちつとも思はなかつたものだから。』

かう言つたお米の胸はもういくらか輕くなつて居た。

『それでもよく出て來られたねえ？』

『來られるの、來られないのッて……。何うせ無理しなきや出て來られないんだから。』

『無理に出て來ちや後が困るだらう。』

『困るッて言ふけど……親が大病なのに私は何うしても行かなくつちやならないッて、無理矢理出て來たのさ、』と、少しやけ氣味な口振である。

勝氣で、亭主と衝突して、これまでにも出るの入るのとよく紛紜を引起した。主人も母親も、お米のことに就いては、既に手古摺切つて居るのである。

お米は又お米で、田舍に一人置去にされて、貧しい機屋の世帶、多い子供等と亭主の意氣地無しと薄情とを胸に描いた。現に昨日出て來る時も、亭主は機廻りにも出ないで、酒を飲んでふて寢をして居た。行くなら、歸つて來るなと言つた。えゝえゝ暇を下さるなら望む所だ！　と出て來た。物心の着いた總領の娘の十歳になるのがそれと知つて泣いて追懸けて來たのをも振放つて來た。

『定さん相變らず分らんかねえ。』

『もう爲方が無いんだもの。』

『それでも商賣の方は好いんだらう！』と病人が却つて心を痛める。

『商賣も一生懸命に遣つて呉れると好いんだけど……怠けてばかし居るんだものね……。』

『此頃は景氣は好いッて言ふぢやないか。』

『え、足利は大した景氣、夏物はそれは大層かるんだよ。だから今少し身を入れて呉れゝば好いんだけど……。』

『何故あゝだらうね。』

お米は默つて居た。

母親はじッと見て居たが、

『お前また出來たね！』

『え……。』

とお米は恥辱を含んだ腹立しさうな顔を少し赧くした。

『幾月だえ？』

『もう今月で五月……。』

『困るねえ、子供ばかり拵へて喧嘩して居ちや——。』

お米は默つて低頭く。

其處に、主人が茶を運んで來た。嫁のお桂は初對面だと謂ふので着物を着替へて出て來る。一通りの挨拶が取交される。お米は土產にと携へて來た中野縞の大名縞を一反、これはほんの印に嫂さんへ。今一反は母さんの寢卷にでもと……。

少時、何ともつかず語り合つて居たが、

『嫂さん、本當に大抵ぢやありませんね。』

とお米が言ふと、

『いえ〳〵、もう何も行屆かんので……碌なことも出來ませんでな……』と長たらしい調子でお桂が挨拶する。ぢやらぢやらと厭らしい人だとお米は思つた。

『婆ちやん、』と緣側から呼んで英男は入つて來たが、見馴れぬ客が居るので、きよろりとして立つて居る。

『英ちやん、まァ大きくなつた！』

『婆ちやん、鉛筆買うんだからお錢お吳れ。』

『何ですねえ、まァ、お客樣がいらつしやるのに、今に、母樣が上るから、お辭儀をなさるもんぢやがね。』

『婆ちやん、婆ちやん。』

『あゝ上げるよ、』と病人は蒲團の下から財布を出した。

田舍の姉が見えたといふので、銑之助もやがて遣つて來た。

夕暮を俄かの混雜。主人は洋燈を吊すやら、火鉢の火を見るやら、母親の世話を爲るやら——やがて何か看屋に行つて見て來ようと、自から傘をさして出懸けた。

嫁は勝手で、七輪にぱた〳〵と火を起して、惣菜の準備を爲て居た。もう夜になつた。戸外は細かい雨がまた降出して、隣の二階家の勝手を洩れる洋燈の光が濡れて夕闇を隈取つた。女の兒が旨く寢たので、お米は母親の夕飯の給仕をして居たが、それも濟んだので、鍋と盆とを勝手へ下げて、銑之助の坐つて居る長火鉢の横に來て坐つた。

男の兒は洋燈の下で、買つて來た鉛筆で、筆記帳に片假名のイロハを書いて居る。

『英ちやん、伯母さん覺えて居るかね。』

英男は默つて書いて居る。頭を上げようともしない。着物の袖の鍵裂が不圖眼に附いたので、本當の母親のない子は可哀相だと思つた。

銑之助に、

『好いお嫁さんが出來たつてね。』

『何ァに。』

『年は十九だつて。』

『うん。』

『兄樣もお前も皆な身が決つて、母樣は安心だ。』

『うん、』と銑之助は今日の新聞を見て居る。

『これで母樣さへ丈夫だと好いんだけれど……。』

『本當さ……。』

新聞を傍に置いて、

『少しは看病して行つて呉れるんだらうねぇ？』

『するともね。……今度は其積で出て來たんだから、一月や二月……。』

『さうして呉れると、母樣も心丈夫だ。此處の嫂さんでも、家の先生でも、他人だからねぇ。肉身のものが居なくちや……。』

『さうともねぇ。』

不圖顏を寄せて、小聲で、『母樣、餘程惡いんかぇ？』

銑之助は唯點頭いて見せた。

『後で詳しく聞くけども……困つたねぇ。』

と小聲で顏を曇らせる。やがて、

『秀雄も丈夫だらうねぇ。』

『うむ。』

『來られないのかねぇ。』

『その中、暑中休暇になつたら、來るッて言つて寄越した。』

『しばらく逢はないがねぇ、立派になつたらうねぇ。』

『うむ。』

『まだ中尉にはなれないんかねぇ？』

『さう早くはなれんさ、年限があるからなァ、來年だらう。』

『中尉にでもなれや好いお嫁さんが取れるねぇ、』とお米は笑顏になる。

『うむ。』

銑之助は氣乘りがせぬといふ風である。

玄關の格子戸が明いたと思ふと、『折角御馳走しようと思つて行つて見たが何にもありやせん。此處等は田舍だからなァ、』と言ひながら主人が入つて來た。少時すると、其處に茶湯臺が開かれて、兎に角に鮪の刺身、豆腐汁、蠶豆、飯が足りぬので、煮蕎麥が六箇ほど並べられた。德利が一本、主人は猪口を銑之助に差した。

病人は久し振で娘に逢つたので機嫌が好い。常に似ぬ明かな賑やかな夕飯の團欒、田舍に住んだ頃の物語も出て、誰彼の噂も盡きない。氣が付くと、お米は長女の泣顏をも忘れて居た。

十六

お米とお桂とはすぐ衝突した。

母親の世話をお米がすればするほど、お桂は除け者にされたやうな不愉快な氣がする。お米はお桂が厭にぢやら〳〵して、碌々病人の看護を爲ないのを腹立しく、折につけてチク〳〵と當る。それでも最初の中は、お互ひに腹の中で思つて居るだけで、あまり素振にも顯はさなかつたが、二三日來、母親の病氣が思はしくないので、家の中の空氣が何處となく陰氣で、重苦しく、氣が懊惱する。かういふ時には兎角感情の衝突が募るのである。

梅雨時の勝手の汚いのが綺麗好のお米の神經を殊に刺戟した。大瓶の水を汲むと底から塵滓が子子と共に湧き上る。流しには飯粒がすつかり流されずに殘つて居る。鍋や皿も洗はずに一隅につかねて置く。戸棚を明けると、黴臭い臭氣が鼻を衝いて、皿やら椀やら醤油さしの汚れたのやらがだらし無く散ばつて居る。お米は貧乏はしたが勝手を汚くして置くことは大嫌である。で、一日、朝から雲切れがして、碧い空が晴がましい日の光を珍しく四邊に漲らした時、お米は甲斐々々しく女の兒を負つて、蒲團を干す、寢衣を干す、下駄を干す、果ては跣足になつて、大瓶の水を汲み替へ、足駄の泥の堆く積つた水口を掃除した。

嫂も流石に見て居る譯に行かぬので、戸棚の中を頻りに掃除して居ると、

『嫂さん私が爲るから、』とお米が言つた。

別段何の意味でも無い。唯、ちよつと言つただけである。けれど互ひに反目して居るので、これが尠なからずお桂の氣に觸つた。自分の爲てることを綺麗であらうが汚なからうが大きなお世話だといふ腹になつて、フィと向うに行つて了ふ。

其態度がお米の癪に觸つたが、何構ふものか、汚いから、綺麗にするのだといふ調子で、さッさと片附けるものは片附け、洗ふものは洗つて了ふ。

勝手の掃除を濟まして、今度は洗濯に取懸る。

『嫂さん兄さんの汚れたものを御出しなさいな、次手だから……。』

と四疊半を覗きながらわざと言ふと、

『いゝえ、好いんですよ。』と聲ばかりする。

『好いことはないぢやありませんか。汚れて臭くなつたのがあるぢやありませんか。遠慮をせずにお出しなさいッてば。』

『私が後で洗ひます。』

『後だつて、晝からでは乾きませんよ。明日は天氣だか何だか解りやしないから。』

『いゝえ、私が洗ひますから。』

聲が尖つて居た。

『構はんでお置きな……あゝ言ふんだから。』と頭の上で饒舌られて喧しいので、病人が口を挿んだ。

『本當に何うかしてるよ、馬鹿々々しい。』

と、お米は口の中で呟いて、井戸端へ行く。繩釣瓶を繰る音がして、やがて洗濯の音がざぶ〳〵と聞える。

たまさかの美しい天氣、病人は自から蒲團の上に起き返つた。緣側には蒲團や搔卷や着物やらが、ずらりと並べて干してある。病人は庭樹の繁みと空の碧とをじつと見て居た。一月前から見ると著しい衰弱である。皺の寄つた顏の色は黃く濁つて、鋭い眼ももう其の光を失つた。齒の拔けた口は締りが無く、無造作に束ねた髮は白く、胸のあたりは見るに堪へぬほど細く瘦せて、もう長く此世の人ではないことは一目で解る。病人は瘦せた手を無意味に自分で飜して見て居た。

十七

終日病人が苦しんで、漸く落着いたある夕暮に、お米は子供を抱いて裏の家の緣側に腰を掛けて、銑之助と話して居た。

『何うもあゝ苦しんでは困るねえ。』

『本當だよ。』

『何うか爲やうが無いもんかねえ。』

『隨分手を盡したんだから。』

『それや兄樣もお前も居るんだから、十分なことは爲たんだらうけれどねえ。』

『あの病氣ぢや何うも仕方が無い。』

お米は嘆息を吐いて、『これから樂が出來ると謂ふのに、母樣も不運だねえ。これからならお前もかうして別になつて居るし、秀雄だつて母樣一人くらゐ何うにもなるんだから、厭なら兄樣の處に居なくつても好い身分になつたのに……。』

『本當に不運だ……。』

と銑之助も嘆息して、『痛くなると、苛々して手も附けられないやうになるけれど、せめて看護でもよく爲て遣つて下さい……。』

『それァ爲るともね……。その爲めに來たんだから……。けどもね、嫂さんといふ人は餘程ひどい人だねえ。』

返事を爲ずに銑之助が居ると、

『碌々母様の世話なんか爲やしない。四疊半に引込んで、ぐづ〳〵してるんだからねえ。さつきなども左様だらう。あんなに母様が苦しんで居るのに、顔も出さないんだから。本當に呆れて了ふよ。』

『だから肉身のものでなくつては駄目だと言ふんだ。』

『肉身のものに越したことはそれやないけれど、あんな嫂さんたらありやしない。口惜いから、私ぐんぐんして遣るのさ。母様の世話でも、英男の世話でも構はず爲て遣るのさ。……とね、あれでね、兄様に吩咐けるんだよ。子供ぢやありやしまいし、三十近くになつて、べた〳〵亭主にひつ附いて、泣いて見せたり、笑つて見せたりしてるんだから厭になつちまうよ。……だから母様だつて怒るんサ。あんな嫁はありやしない。』

すぐ後を續いで、

『此間もね、夕御飯を食つてると、兄様がね、「お米、お桂もまだ馴れない處はあるだらうが、此場合だから仲好くして看病して呉れ、」と言ふぢやないか。あの兄様だから私は別に何とも思ひやしないけれど、あのお桂づらが吩咐けたんだと思ふと、腹が立つてね。「何も仲を惡くしたつもりはありません、」と言ふと、「お前は母様の世話さへ爲て呉れゝば、勝手のことなどしなくつても好い、」と言ふサ。私はぐッ・と胸に來たから、うんと言つて遣つたよ。私はいくら田舍者だつて、貧乏だつて、物の道理は心得て居るからねえ。』

『まァ爲方が無い、そんなこと言つたつて。』

『それや私だつて、嫂さんだから、向うでちやんとして來りや、立派に立てゝ置くんだけれど……あんまり馬鹿にしてるからサ。』

『さう勝氣にばかりして居ても困るよ。』

『だッて本當に癪に觸るんだもの。私や來てから二三日しか經たない頃だッたから默つて居たがね。母様が鳥渡何かむづかしいことを言つたんだよ。すると、兄様が「そんなむづかしいことを仰しやつては困る。お桂は母様の看病ばかりしてるんぢやないから」ッて言ふぢやないか。私や餘りだと思つた。兄様もあんなことを言ふのは惡いが、あのお桂が焚き附けるから、あんなことを言ふんだ。私は口惜くつて涙が出たよ。』

『母様もむづかしいから、つい兄様もそんなことを言つたんだ。』

『いくらむづかしいたッて、あんまりぢやないかね。あの病人にサ……何時死ぬか解らないほどの病人に……。』

と頻りに激昂する。

『まァ然し——。』

『なあに、彼奴等に看病して貰はなくつても好い。私はどんなに手を盡してゞも看病して上げるから。』

『それが悪い。』

『悪くッたッて好いよ。』

と益々激昂する。

『だッて姉さんが好くつたッて、さう仲たがひを爲れて居ては、病人も氣まづいし、兄樣も困る……。』

お米はしばし默つて居たが、

『本當に厭つたらしい女ッちやありやしない。だから私や、成たけ口を聞かないやうにして、側にも寄らないやうにしてるんだよ、腋臭でそれァ臭いから。』

と態と顏を蹙めて見せる。

『姉さんも相變らず勝氣で困るねえ。』

と、あまり可笑いので銑之助は笑つた。

『兄樣も女房運の無い人だ。あの毬髪の腋臭の臭い——。』

『まァ、そんな悪口は好いぢやないか。』

『まだ來てから二月も經たないのに、結構上さんづらしてるんだから、癪に觸らァねえ。それも十分いろんなことが出來るんなら、まだ勘辨のしやうもあるけれど、英男の世話も碌々出來ない癖に此處は

自分の家だと言ふ腹があるんだからねえ。』

『それは左樣だらうさ、細君だから……。』

『あんなことを言ふ。お前も解らない人だねえ……。あんな女に、吉田家を掻廻されてたまるものかねえ。私は出た本家だから何時でも歸つて來て、幅で居るよ。あんな女にへい〳〵して居られるもんか。』

『それァ小さくなつて居なくつたッて好いさ。仲好くしてさへ居れや——。』

『誰が小さくなつて居るもんか。』

子供が泣出したので立つて、ほい〳〵と庭を搖つて歩いた。顏には感情の激した痕が名殘なく見えた。銑之助の全然同情をせぬ口振に一層烈しく激したのである。

『此頃は本を讀むかえ？』

銑之助は暫くして尋ねた。此姉が娘の時分太閤記や楠一代記などをよく讀んで秀吉や正成や淸正を理想の男子としたことを思ひ出したのである。

『本なぞ讀む暇は無いものねえ。』

『それでも氣晴しに少しは讀む方が好い。』

『講釋なぞ家で何うかすると買つて來るけれど、あんな人情本は面白くないからねえ。』

『八犬傳でも讀めば好い。』

『何處にも無いもの。』

『下の家にあるよ。兄樣が持つてるよ。』

『さうかえ、あるかえ、』とさも喜んだといふ風で、

『本當にあるかえ。』

まだ昔の若い血が流れて居ると見える。

姉はやがて歸る。

銑之助は一人になつた。妻は湯に出懸けてまだ歸つて來ない。不圖立上つて座敷の緣側に行つた。其處には四五日前に買つて來たハンモックが吊されてある。籐椅子が買へぬので、せめてこれに由つて空想に耽る快樂を得ようとしたのである。買つて來るとすぐ釘を柱に附けて、具合の好いやうに吊つて、妻とかはる〳〵身をその上に横へて、夕燒の雲や夕の星を見た。妻の爲めに輕く搖つて遣つたこともある。

銑之助は例の如く身輕にそれに乘ると、餘力でハンモックが輕く心地よく動く。もう薄暮である。夕照の餘影を受けて一時美しく榮えた雲も消えて、向うの丘の樹の上に星が閃々と光つた。

母親を思ふの念が胸にこみ上げて來た。自分ながらその餘りに多感なのを知つて居るが、何うもそれ

が容易に押へ切れない。醫師の宣告をも知らずに、まだ治るものと信じて居る母親の心を考へると、胸が壓つけられる樣な氣がして涙が出さうになる。

螢がひとつ明放した座敷を拔けて、ハンモックの上を飛んで行く。

郵便脚夫が門の郵便受函にがさこさと手紙を入れて行つた氣勢がした。昨日賴んだ新聞小說の話が纏つたのかも知れぬと思つて、銑之助は慌てゝハンモックを下りて、下駄を突懸けて取りに行つたが、闇に透かして見ると、吉田秀雄といふ大きな字が微かながらも眼に入る。

弘前の弟からである。

豫期と違つたので、やゝ失望したが、其儘茶の間の六疊に上つて、暗くなつたら點けて下さいと妻が吊して行つた洋燈にマッチを摩つて火を點した。そして其下で、封を截つて手紙を讀む。

大きな字で、卷紙の一行に五六字位しか書いて無い。旨いやうな拙いやうな自己流の筆蹟で、其文がまた思ひ切つて露骨である。候といふ字があるかと思ふと、處々文章體になつたり言文一致になつたりして居る。戲談もあれば眞面目な用事もある。母親の病氣のことも種々心配して書いてあつた。

輕い足音がして細君が歸つて來た。

湯上りの顏はほんのりとして、薄く化粧した頰のあたりが美しい。フランネルの單衣を着て平常のメリンスの帶をして居る。銑之助の手にして居る手紙を見て、

『何處から？』と訊く。

『弘前から。』

と銑之助はお梅に渡す。

お梅は一通りざつと見て、

『相變らず戯談を言つてますね。』

『お前のことが冷かして書いてあるだらう。』

『えゝ』と笑顔になる。

『餘程調子が變だよ。あの琴の娘がラバアになつたんぢやないかと思ふね。』

『さうでせうか。』

『だッて此處にかう書いてあるぢやないか』と手紙を展げて見て、『此處に、そら「琴の先生と一緒に……」と書いてある處があるだらう。其處がをかしい。』

『左樣ですねえ。』

『屹度もうラバアになつたんだ。』

『さうかも知れませんね。』

と、出流れの茶を茶碗についで飲んで、

『どんな人でせう？　寫眞でも送つて寄越せば好いのに……。』

『今度、寄越せッて言つて遣らうか。』

『えゝ』と言つたが、すぐ、

『別嬪さんでせうねえ？』

『何うだかなア……。顔は綺麗かも知れないけれど、津輕辯では爲方が無い。』

『さうですねえ。』

『高等女學校に行つてるとか何とか言つてたねえ……此間來た時。』

『えゝさうですよ。此間も私にね、嫂さん小學校卒業した限りだらうッて言ふから、——さうですよ、私行きたかつたけれど、家の都合で行けなかつたッて言ふと、駄目だなあッて言ふんでせう。私きまりがわるかつた。そして、あとで、僕の居るうちの娘は高等女學校へ行つてるッて言ふぢやありませんかね。』

『馬鹿にしてる。』

と銑之助は笑つた。

『そしていつ出て來るんです？』

『此處には何にも書いてないが、暑中休暇になつてから來る積りだらう。』

『さうすりや八月ですね。』

『さうさ。』

『母樣、あんなに悪いのに、もつと早く來られないんでせうか。』

『來られないッて言ふことも無いだらうがね。』

『早く來るやうに言つて遣る方が好いでせう。』

『さう言つて遣らう。』

『もしものことなどありやしますまいと思ひますけれど……、何うせ看病するなら早い方が好いですからねえ。』

『左樣だよ、兄樣も今日さう言つて居た。』

お梅はふと緣側に夏の座蒲團が出て居るのを見て、

『どなたか來て？』

『何ァに、田舍の姉がちよつと……。』

『私が行くとすぐ？』

『うむ。』

『何か話があつて？』

『何ァに、いつもの勝氣で困つて了ふのさ。』

『嫂さんのことを何か言つてッたんでせう？』

銑之助は點頭いて見せる。

『何んなことを言つて。』

『何ァに悪口さ。』

『何故あゝ仲が悪くなつたんでせう。』

『勝氣だからいかん。』

『さうですねえ、少し勝氣ですねえ。餘程母さんに似に居ますねえ。』

『兄弟で一番似てるさ。』

『あなたも似てますね？』

『さうかナ。』

『性急で、氣難くつて、私、はら〳〵することがありますよ。』

『それや親子だから、いくらか似てるさ。』

『秀雄さんも、何處か似てる處がありますよ。何うしても兄樣が一番沈着いていらつしやる。』

『お前だつて左樣だ、小石川の母樣に瓜二つだ。』

『さう……。』とにつこりする。

『此間、杉田が來てる時、誰かの女の寫眞の口繪を見てると……さう〳〵何とかいふ子爵の家庭の寫眞さ。子爵と子爵夫人と令孃が二人、その總領の娘が中々別嬪さんなんだが、子爵夫人に酷肖(そつくり)で、よくもああ似てると思ふ位なのさ。すると杉田が、いくら別嬪でもこれが子爵夫人のやうな婆樣になるんだと思ふと、色も戀も無くなるッて言ふのさ。そして君のフラウもムッテルによく似てるねえ！　と言ふぢやないか。』

『ムッテルッて何？』

『フラウが細君、ムッテルが母。』

と笑ひながら銑之助が解釋する。

『杉田さん、そんなこと言つて？』

『うむ。』

『ひどい人ねえ、今度來たら言つて遣るから好い。』

『だッて爲方が無い、己もさう思つて居るもの、年を取ると、小石川の母樣のやうに、腰をまげて、ああした調子でお世辭なんか言ふんかと思ふと厭になつちまふ。』

『まさか、私が……。』とまたにつこりした。

『それから、姉樣何んな惡口を言つて？』

『腋臭だの、毬髪だのッて、隨分ひどいことを言つたよ。』

『私は田舍の姉さんもひどいと思ひますよ。何もあんなに當り散らさなくつても好いんですもの。此間もあんまりひどいもんだから、兄樣怒つて居ましたよ。そんなに喧嘩ばかりしてるんなら、邪魔になるから歸つて呉れッて。すると姉さんも負けぬ氣で、私や母樣の看病に來たんだから、歸る譯が無いッて言つてました。』

『本當に困るよ。』

『嫂さんだッてそんなに惡い人ぢやないんですもの。』

『さうともさ……。だから兄樣は初めから田舍の姉の來るのを餘り望んで居なかつたんだ。』

若い夫婦は猶少時語つた。やがて銑之助が座敷に行かうとすると、

『今夜も遲くまで御書きなさるの？』

『うん。』

『今夜は早く仕舞ひませうよ。』

『まァ、少し書かう。』

銑之助は妻の淋しいのを知つては居るが、さりとて自己の生命なる創作を意味なく留めるには忍びな

かつた。で、其夜も遲くまで机に向つて、澁り勝なる筆を動かした。机を離れた時には、若い細君は既に、いぎたなく假睡をして居た。

十八

お米が來て、好いこともあれば惡いこともあつた。女の兒が際立つて羸弱なので、ちよつと何かすると、ヒイヒイと泣く。それにまだ締が無いので小便大便をよくしくじる。襁褓の汚れたのが彼方此方に散ばつて、惡くすると御馳走を踏附けることなども尠くない。銑之助は子供が嫌ひなので、泣聲を聞くと、さも不愉快さうな顏をして、時には『よく泣く子だねえ、』『姉さん、それ早く騙したら好いぢやないか』などとつけ〳〵いふ。するとお米はすぐひがんで、其身が貧乏で、無敎育な夫を持つて居るばかりに、兄弟にまでもかう馬鹿にされると思ふ。何もそんなに邪魔にしなくつても好ささうなものだといふ腹がある。『子供の泣くのは當り前だがねえ……』と顏色をかへて、フイと立つて緣側に行く。胸を半分ほど露はに、大きな乳をだらりと出して、はや五月の眼に立つ腹を抱へて、無作法に振舞つて居る形は餘り好ましいものではなかつた。

主人はそれでも其女の兒をよく可愛がつて遣つた。抱いたり、あやしたりするばかりではなく、偶には何か玩具などを買つて來ることもある。色の黑い、おでこの、毛の赤い、それは醜い子であるのに、

其笑ふのが可愛いと言つてはよくあやした。

病人はお米を力にしては居るが、子供の泣聲とその田舍風の無作法と氣の勝つた所置振とは矢張厭であつた。お桂と衝突するのも好いが、それが延いて主人と衝突し、銑之助と衝突し、銑之助の若い妻と衝突するのを見るのは餘り好まなかつた。お米の身にしては、田舍のことが苦勞になる、長女の泣顏が氣に懸る、夫から手紙が一本も來ぬので愈々心配になる。衝突はするものゝ、それがまた不愉快で居心地が惡い。

かういふ狀態の中に母親の苦痛がをり〳〵織込まれる。梅雨はやゝ晴れ氣味で、心持の好い光線が雲の間から洩れるやうになつたが、一家は相變らず暗かつた。

『お米さん、私、何處が惡いんぢやか、言つてお呉れよ。』

『嫂さんのやうな人には……。』

『だから、さう言ふぢやないかね。』

『好う御座んすよ。』

とお米は聲を尖らして座敷に行く。ある日曜日のことであつた。

主人は茶の間に居たが、勝手をのぞき込んで、

『また何うかしてるのか。』

見ると、お桂は戸棚の前に立つて、顔を掩つて口惜しさうにして居る。

『何うしたんだ？』

主人から聞かれても小言を言はれると思つて默つて居る。

『困つた奴等だナ。』

と苦々しさうに主人は言つたが、強ひて荒立てるにも及ばぬので、深く追窮もしなかつた。

一時間ほどしてから、銑之助の細君が遣つて來た。すると、お桂は手眞似をしてお梅を勝手にちよつと呼んだ。主人は病人の傍に行つてもう茶の間には居なかつた。お米は玄關の傍の檜の樹の涼しい蔭に鹽を持つて來て、いぎたなく睡つた子を負ひながら、頻りに洗濯をして居た。で、お桂とお梅とは長い間勝手の戸棚の前に立つて、何事かを話し合つた。お桂の饒舌る低い聲の絶間に、『えゝえゝ、さうですとも』といふお梅の聲が度々交つた。

『本當にあんな女ッたらありやしないがね。天道樣、ちやんと見て居らつしやるから。』

『えゝえゝ、さうですとも……。』

其處に生憎お米が洗濯石鹼を取りに來た。

銑之助がちよつと家を明けて遣つて來て、主人と長火鉢に相對して坐つて世の常の會話に耽つて居ると、洗濯を終つたお米は、緣側から茶の間にあがつて、眼を覺して頻りにむづかる脊の兒をぐるりと巧

に自から廻して下して、其處に坐つて乳を含ませた。穩かならぬ氣勢が其顏に歷々と現はれて居た。

お梅は夫が來たので、代つて家に歸るべく母親に挨拶して茶の間に來た。と、お米はいきなり、

『お梅さん、さつき何を話して居たの？』

『え？』

調子が烈しいので、若い細君は驚いて義姉の顏を見る。

『さつき、勝手で、嫂さんと何を話して居たのさと聞くんですよ。』

それと覺つたお梅の顏は俄かに赧くなつた。

『聞いて居ないから好いと思つて人の惡口を言つて本當に左樣だの、何だのッて、餘り人を馬鹿にして居るよ。私が惡けりや私が惡いとちやんと前で言ふが好いぢやないか。』

眞向から痰呵を切られて、お梅は其處にすくんで了つた。

『何うしたといふんだ？』

と主人が眞面目な顏でお米の方を見る。

『何うしたッて……兄樣、先程、石鹼を取りに勝手に行くと、嫂さんとお梅さんと、二人で一緒になつて私の惡口を言つてるんだよ。あんな惡人は無いの、天道樣が見て居るのッて、……』と、聲を震はせて、

『惡人でも何でも好い。大きな御世話さ。』

いかにも口惜しさうで、出懸つた涙を袂で拭つた。

『また、そんなことを言つて、困るぢやないか、』と主人は宥めにかゝる。

銑之助も顏を曇らせた。

『いくら私が貧乏したつて、あまり馬鹿にしないが好い。』かう言懸けたお米は聲はもう泣儚舌になつて居た。『本當に、いくら私が田舍者で貧乏生活をして居るからッて……。』

『お前はすぐひがむからいかん、誰が貧乏だッてお前を馬鹿にした？』

『誰ッて、皆な馬鹿にしてるぢやありませんか。』

『お前は氣ばかり勝つて、何ぞと言ふと、すぐひがんで爲方が無い、』と言つて、主人は『お桂――お桂――。』

病人の傍に行つて居たお桂は立つて其處に來た。

『お前、お米の惡口なぞ言つたのか。』

『いゝえ……。』

『そら、あゝしらぐ〳〵しいことを言ふ。私はちやんと聞いて居ましたよ。』

主人は强ひて深く追窮せずに、

『本當に仲好くして貰はなくつちや爲方がないぢやないか。お前は何しに此處に來てるんだ。母樣の看病をしなくちやならんのぢやないか。お互ひに讓合つて氣まづいことがあつても我慢して少しでも母樣の世話をするのが本當だ。それに、下らんことにいがみ合つて、滑つたの轉んだのッて文句ばかり言つて居る。お桂もお桂だ。何も知らないお梅にまでそんな智慧を附けなくつたッて好いぢやないか。』

お桂は默つて居た。

主人は傍に小さくなつて坐つて居るお梅に向つて優しい調子で、

『構はずお歸り、家が留守になつて居るんだから。』

お梅はそれを好い機會に、丁寧に挨拶して、夫の顏をちよつと見たが、緣側から駒下駄を突懸けて戸外へ出た。久留米絣にメリンスの帶をした丸髷姿が、夏の日影にくつきりと際立つ。

後で又一しきり難しい話が續く。

『一體何うしたんだ？』

『何うしたッて、兄樣、私は馬鹿にされて、邪魔にされて默つて居やしませんからね。惡人だの何だのッて……。』

『お桂そんなこと言つたのか？』

『いゝえ――そんなこと言つたんぢやありませんがね。お梅さんとちよつと話をして居たばかりです

がね。』

『そんなこと言つたッて駄目ですよ。私ちやんと聞いて居たんだから……。』

お米は口惜しい。一生懸命にかうして世話に來て居るのに、子供が邪魔にされたり泣くのを喧しいと言はれたりするのがいかにも殘念である。母親は不治の病氣、嫁達に兄弟は好いやうにされて、萬一を頼む實家もかうした有樣になつたのかと思ふと、其身の不運が胸に迫つて今更のやうに悲しくもなるのである。

『兄樣私に悪い處があるなら、ぐんぐ〳〵言つて下さい。蔭口を聞かれるのは、私は大嫌ひですから。』

『お桂も蔭口などを言つてはいかんよ。』

と主人は妻をたしなめた。

『お梅さんにもよく言つてお呉れ！』

とお米は銑之助に向つて言つた。其聲が稍尖つて居たので、

『お梅はそんなことは知りはせんよ。』

『だつて言つたんだもの。』

『言つたッて何だッて、……お梅は姉さんの悪口などを言ふ柄ぢやないからね……。姉さんも餘り勝氣過ぎるよ。』

銑之助は激して居るので、ついかう言ふと、

『私も勝氣だらうけれど、嫁さんを庇ふばかりが男ぢやないよ。』あんな肥つた女が何處が好いんだらうといふ腹がお米にある。

『庇つたッて好いぢやないか。』

『それは好いともねぇ……。』

『好いければ、そんなこと言はん方が好い。』

『だッて男が嗅どんに鼻毛を長くしてるのは、見つともないよ。』

『大きな御世話だ！』

と銑之助は激して了つた。

『まァ、好いよ、そんなに言はなくッても……。』

と主人は聲を和げて、『お梅の知つたことぢやない。お梅にそんな悪氣はありやしない……。お米も悪い。そんな餘計な口を利かんでも好い。』

『だッて餘りだからサ。』

『馬鹿な！』と銑之助は言つたが、其儘フイと立つて病人の傍に行く。

病人は向うむきに寢て居た。夏の晝の暑く、輕い搔卷も後へ遣つて綿入の寢卷を胸の上に懸けて居た。

『母様、何か上げようか。』

病人は大儀さうに寢反をして、銑之助の顏を見た。非常に憔悴したと銑之助は思つた。もう一月持つか持たぬかと言つた醫師の言葉を思出した。

『何も食ひ度くない？』

病人は輕く點頭く。茶の間では、まだ其悶着が續いて居るらしく、お米の早口と主人の緩やかな聲とが聞える。をり〳〵お桂の聲も交る。中仕切の襖が一枚開いて居るので、此方に向いた病人の眼にも、お米の後姿と長火鉢と時計と主人の顏が見える。

『何を言つてるんだい、さつきから。』

『何ァに、つまらんことさ……。』

『泣饒舌に饒舌つて居るぢやないか。』

『姉さん困るんだ、つまらんことを言つて……。』

『何うしてあゝだらう？』と言つたが、急に聲を高くして、『お米！　お米！……お桂も病人を置いて何をべちやくちや饒舌つてるんだ！』

で、茶の間の悶着は靜まる。お米は兒を抱いて緣側から庭へ下りる。お桂は勝手へ行く。主人は病室に入つて來た。前の低い田甫を越した小學校からは、生徒の體操をする聲が賑かに聞えて來る。

十九

小衝突の中に日は經つた。

病人は次第に惡くなつて行く。腹の痛いのもさうだが、此頃はわけて氣難かしくなつて、機嫌の惡い時は手も附けられないので、看護する者は一方ならず困つた。食物が第一喧しい。珍しいもので毒にならぬものは容易に手に入らない。牛乳は昔人の習で、臭をかぐのも厭だといふ。それに、二三日此方著しく症狀が進んで、もう起返ることが出來ない程に衰弱した。それで居て、神經は反對に昂奮して、よく物を拋り附けたり何かする。誰彼の差別なく叱り散した。

お桂とお米は絶えず衝突して居た。けれどそれが素振にでも顯はれると、病人はすぐ腹を立てた。『お前達は何をしに此處に來てるんだ。喧嘩をするなら向うに行け、』と癇の高い聲で呶鳴る。主人を捉へては『お前は一人の親を見殺しにしても好いと思ふのか、何故立派な醫師に懸けて呉れぬのだ！』と烈しい調子で責める。ある時、銑之助が少し氣に入らぬことを謂つたら、『馬鹿！　馬鹿！　小說を書くの何のッて生意氣だ。そんなことで小說が書けるか、』と罵つた。

此間までは女の兒が少しぐらゐ泣いても、『子供の泣くのは爲方が無い、』と謂つて居たが、此頃は『喧しい餓鬼だ、お米をもう歸して了へ、』とよくいふ。實の娘ながらお米の苛々した調子が煩さく、大きな

腹を抱へて居る醜い形に顔を蹙めて、『本當に人間の屑だ、滿足に育てることも出來ないで、餓鬼ばかり産むなら犬猫でもする、』などと惡口を加へる。

ある夜、腹が痛んだので、誰か來て呉れ！　と呼んだ。主人もお桂も晝間の看護に疲れて熟睡して居た。當番のお米も病人がよく眠つて居るので、ちよつとと思つて四疊半に行つて今寢たばかりである。二聲三聲呼ばれて漸く目が覺めて蚊帳の中から出て來たお桂の扮裝はだらしがなかつた。髪が亂れて胸がはだけて、寢卷の帶は解け懸つて居る。病人は痛い腹を押へながら、『くつゝいて寢て居るばかりが能ぢやないぞ！』

お桂は聞かぬ風をして、

『押へませうか、』と近寄ると、さも汚はしいと言つた態度をして、

『鐐！　鐐！』

主人が起きて來ると、

『鐐！　お前は親の恩を覺えてるか。』

『……。』

『女房と寢るばかりが能ぢやあるまい。親がかうして苦しんで居るのを、知らずに寢て居て、それで孔子樣に濟むか。』

主人は答へる術を知らなかつた。

『親が……子供を育てるのは一通りぢやないぞ。お前達がかうして大きくなつたのは、誰のお蔭だ。』

病人と思へぬ程辭色が烈しい。

『母樣、そんな無理を仰しやつたッて困ります。つい、寢込んで了つて、眼が覺めなかつたんですから。』

『もう好い、お前達の世話にはなりません。寢てお出で……。』

『そんなこと仰しやらずに……。』

『好いよ、世話にならない、私は一人で死ぬから。』

萬事が總てかういふ風に難かしい。

何ぞと謂ふと、『親の恩を忘れたか』といふ。『親は死んでもお前達は悲しくないだらう』と突込む。いつもの皮肉が一層烈しく鋭くなつて、人の弱點を抉ぐるやうに刺す。かと思ふと、心細い、悲しい、氣も滅入つて了ふやうな弱いことを言ふ。心底から出たやうな情のある訓誡を縷々として說く。心の狀態が著しく極端から極端へと走つて神經が絕えず動搖した。感情が總て發作的で容易に取留がつかなくなつた。意識しないまでも、「とても治らぬ」といふ恐ろしい事實が既に其胸を蠶食し始めたのである。

ある時何か思出して泣いて居るので、

『何うかなさいましたか』と訊くと、

『鐐！　死ぬのが厭だ。こんな好い婆婆に生れて來て、子供等も皆な大きく立派になつたのに、死ぬのは厭だ！』

堪へ難いやうに泣く。

『そんなことはありませんから、安心していらつしやい。』

『いゝえ――もう死ななけりやなりません。治る、治ると醫者は言つて吳れますけれど、もう死ななけやならない。』

と顏を蒲團に押附けて益々泣く。

いくらなだめても賺しても、醫師の言つた望の多い言葉を態と選んで聞かしても駄目であつた。氣が弱くなると子供のやうに弱くなる。

『父樣に草葉の蔭で逢つて、子供等が皆な丈夫で成長くなつて、銑には嫁が出來たし、秀は立派な父樣の後繼者になつたつて話したら、何んなに喜ぶか……』と歔欷をして、『父樣は今生きて居れば六十五、まだ其年頃で丈夫な人はいくらもあるのに、御國の爲めとは言ひながら、早く死んで、本當に可哀相だ……。老人子供の世話で、碌々樂もせずに……。』

聲を飲んで、

『それから思ふと、私など樂もした。面白いことも見た。もう死んでも殘り惜しいことは無いけれど

……。』

お米も顏を掩つた。

『母樣、もうそんなこと仰しやらんで、治つて戴かなくッては困りますよ、』と銑之助が言ふと、

『この體では、とても難かしい。』と銑之助を見て、『お前は覺えて居るだらう、父樣は一番お前を可愛がつて……根岸に居る時、よくお前を伴れて、新しく出來た田圃の金魚湯に行つたものだよ。覺えてゐるだらう。』

と、常に聞馴れた話ではあるが、平生、平氣で面白く聞いて居た時とは違つて、かうした場合しみじみと胸に沁みた。

『死んだら、お墓參などをして吳れなくッても好い。花などを上げて吳れなくつても好い。』言ひ懸けて顏をしかめると思つたら涙がぽろ〳〵飜れた。『兄弟仲好くしてね、養生をして、長生をして樂しく世の中を送つてお吳れ。』

常に難しい母親であるだけに、一層此言葉が人々の胸を刺した。

『お桂は？』

『鳥渡使ひに行きました。』

『お桂にもよく云つて吳れ、なあ鐐や、仲なぞ惡くしないでお互に助け合つて……短かい世の中だ

から何でも樂しく送らなけりや……それからお米も、餘りケン〳〵言はないやうにな……。これは遺言といふ譯ぢやないが……。』

『もう、母樣、そんなこと……。』

お米は堪へられぬといふ風で遮つた。

一座は暫し沈默に落ちた。

母親の一時の感情的發作は暫くして靜まつたが、ふと或事を思出したらしく、銑之助に、

『お梅は懷姙したやうだね？』

『さうですか。』

と言つた銑之助の顏は赧くなつた。

『知らないのかぇ？』

『何だか體が變だッて言つてましたけれど。』

『此間、庭で梅を喰べて居るのをちよつと見たし、體がいかにもだるさうだからねぇ。』

『けれどもまだ何だか解らんのでせう？』

『さうの樣だよ。』

とお米は少し笑ひ氣味にいふ。

午からお梅が看護に行くと、母親は常に似ず莞爾して居る。懷姙を聞かれたと夫が話したので、屹度何か言はれるだらうと、初めての身の、きまりが悪いやら、恥かしいやら、怖いやら、小さい胸はそゞろにさゞ波を立てゝ居た。

機嫌が悪く、皮肉でも言はれたら何うしようと思つて來た身には、姑の笑顏が此上なく嬉しかつたが、それでも何だか顏を見られるのが面伏のやうな氣がして、もぢ〳〵して居ると、

『御目出度いッてねぇ？』

と笑ひながら母親がいふ。

『……。』

『月のものを見ないんだらう？』

『えゝ。』

と辛うじて返事をして顏を赧くした。

『結構だね。』

病人は珍らしく上機嫌で、『初めてだから、大切にしないと好けないよ。何だか此間から、樣子が變だと思つて居たけれど……矢張さうだッたね。』

『……。』

『何でも心配しないでね、氣を緩くり持つて居ないと好けないよ。初めては樣子が分らないから、兎角苦勞なものだが、無理さへしなけりや何のことは無いからねぇ、』と飽かず嫁の顏を見て、『餘程前にね、お前が懷姙した夢を見たことがあつたから、實はもう出來ても好ささうなものだと思つてたのさ……。それからお前が赤ちやんを抱いて居る處を見たこともあつたよ。こんな風に横ッちよに抱いて、小兒が苦しさうにして居るところなのさ。夢つて言ふものはをかしなものだねぇ。』

病氣をも忘れたやうに機嫌よく、『其時分、子供が出來た時と思つて、少し襤褸などを集めて置いたから、ちよつとそれを出して御覽。』

座敷の押入を見よとのことである。で、お梅は立つて、床の間に接した方を明けると、『いゝえ、其方ぢやない、向うの方だ、』と敎へる。別の方を明けて見たが、上段には書藉と雜誌とが一杯、下段には古い長持が長く幅をして居て、其上に種々の道具が置かれてあるばかり、それらしいものも見えぬ。まごまごして居ると、

『其處に無いかえ、大きな風呂敷包だが……。』

『御座いませんやうです。』

『それぢや思違ひか。その向うの緣側の扉を開けて御覽。』

果して、其扉の隅に、色の褪せた大きな風呂敷包があつた。それを持出して、『これで御座いますか、』

と聞く。

『それ〳〵、』と病人が點頭く。

枕元に持出して、言ふがまゝに開けて見る。襁褓が幾箇となく出來て居る、大きいのと小さいのと。風呂敷の底の方には、いろ〳〵の襤褸が一杯。

母親の娘時代に着た着物の片（きれ）のぼろ〳〵になつたのや、子供達の稚い頃の筒袖の斷片（きれ）などもごた〳〵と一緒に丸めて交つて居た。

『お產をする時には襤褸が澤山入るものだから、汚らしいけど、寄せ集めて取つて置いたのだよ。襁褓も今ではとてもかう纏めることは出來ないんだけれど、四月頃だッたから、それだけ出來たんだから。』

『こんなに澤山に……。』と、襁褓を飜しながら、若い細君は姑の眞心を嬉しく思つた。

『家に持つて行つてお置き。』

『何うも難有う御座いました。』

禮を言つて、風呂敷を元のやうに包んで、そして座敷の隅に置いた。

『少しさすりませうか。』

と傍に寄ると、まじ〳〵とお梅の顏を見て、

『丈夫だと世話をして遣るんだけれど……。』

いかにも悲しさうであつた。

やがてお梅は後に廻つて足を摩つた。痩せたのが著しく氣に懸る、心地好さゝうに並べて二本延して居るが、それが厭に灰色で、血の氣が無く、脛など皐蜥の足のやうに細くなつた。

二十

かうした病人の優しい情も總て一時の發作であつた。泣くのも笑ふのも怒るのも癇癪を起すのも、皆同じやうに死の不安と恐怖とから來るので、或時などは身の置所の無いやうに焦れて焦れ通すことなどもあつた。新芽の發生につれて、古葉の凋落するやうな苦痛は常に力强く其胸を襲つた。

襁褓を出して呉れた情は、初め若い嫁の若い心を感泣せしめたが、其時から其言葉とは反對に、お梅は其身に對する姑の態度の著しく變つたのをそれとなく感じた。變つた、著しく變つた！　お梅の肥つた血色の好い顏を見たり、無邪氣な早口な快活な言葉を聞いたりすると、病人は今迄はそれが何とも言へず希望に充滿て居るやうな氣がして——その柔かい手で肩なり足なりを摩られるのを此上なく樂しいやうに感じて居たらしかつたが、懷姙したと定つてからは、一種の冷たい情が病人の胸に萠して、艶に憔悴した顏や、目の周圍に何處となく出來た暗い影や、そろ〳〵眼に立つて來た乳や、氣怠るさうな立居振舞や、すべて肉のしまりの無い放恣な形を見ると、今迄自分のものであつたものが、微かに自分

を背いて捨て去つたといふやうなさびしいつらい腹立しい氣が起つた。

お梅は足を摩つても、以前のやうに喜ばないのを始めの中は不思議に思つた。何うかすると『もう好いから、彼方に行つてお出で！』などと菅なく言ふ。莞爾した顏——お梅に對してのみする莞爾した顏ももう見られなくなつた。何か氣に入らぬことでも爲たのかと思つて、夫に話して見たが、それらしい樣子も無かつた。

銑之助の多感な心では、妻が懷姙したといふことが何だか不道德な罪惡のやうな氣がせぬでもなかつた。昔は親の喪三年の間夫婦は室を異にしたといふことがある。親を傷むの情しかあるべきことである。古い支那の道德の敎が不思議にも新しく銑之助の胸に反響した。

生活は矢張苦しかつた。月に、二十圓の收入を得るのが困難であつた。全力を擧げた長篇小說は全然失敗して、二百枚ばかり書いて破つて捨てゝ了つた。飜譯の安仕事、空想ででつち上げた紀行文、そんなものを賣つて纔かに生活を續けた。それに、漸く名を出し始めた身に、雨霰と注ぎ懸けられる罵評、それが何よりもつらく痛かつた。

結婚當座の甘い快樂も段々と薄らいで行つた。半年位經つた頃は一番破綻の生じ易い時だといふ。表には平和を裝つて居ても、腹ではいろ〳〵な不平が萠す。銑之助の此頃の胸は亂れ果てゝ居た。

四疊半に居る頃は、煩悶も苦痛も要するに美しい空想であつた。今のやうに、實際に觸れた苦痛は更

に經驗したことはない。今のは煩悶を煩悶で濟ましして置くことの出來るものではない。色彩を着けて、價値の無いものにも價値を與へて、好奇に快感を買つて居るものでない。そしてこの切實の苦痛が母親の死を待つ念と一緒になつて、銑之助の頭腦の中を廻轉する。

若い細君は身體の加減で、やゝ憂鬱に傾いて來た。平生の無邪氣もいくらか暗い影を帶びて、何うかすると緣側の隅で眼を赤くして居ることなどもある。氣怠るいと言つては、よく横になる。粉飾を爲るのも億劫らしく、丸髷の壞れ懸けたのを梳らうともしなかつた。

袂には青梅がいつも入れられてあつた。

二十一

青森を午前九時五十分に發した汽車は、夕暮近く、北上川に沿うた平野を平泉に向つて駛つて居た。藤原氏三代の偉業、西の京に摸した市坊は、今も猶淺壕と礎と古寺とを留めて、金色堂の古色は暗い杉樹の裡に其光を殘した。水の流れ、山のたゞずまひ——忙しい汽車の旅をする人もこの形勝の地を徒に過ぎ去るものはない。一しきり其古蹟の物語が車室の此處彼處に起つて、義經の戰死した高館の丘陵を指し合つて居るものもあつたが、不圖、二等室の車窓から少尉の軍服を着けた色の淺黑い顏が覗いて、夕日がその片頰を故ゆく照した。

軍帽を右の手に押へて、金鷄山の方を飽かず見て居たが、衣川の鐵橋をとゞろに汽車が渡り始めると、其儘顏を引込めて、元の席に復した。傍にズックの大鞄が一箇、あけび細工の手提が一箇、旅行案内に文藝倶樂部、新刊の偕行社記事が讀みさしの儘に其上に伏せてあつた。前には仙臺の商人だといふバナマ帽が唯一人相對して乘つて居た。

この軍人は吉田秀雄であつた。

秀雄は仲兄のことを考へた。仲兄が有名な旅行家で、此附近を跋渉して盛岡から秋田を踰えた時の物語を思ひ出した。續いて其身が弘前に赴任の途次、古蹟の遊覽に汽車に乘後れて、一夜を停車場前の汚い旅店に過したことを思ひ出した。昨年の大演習に此街道を南下して南軍に小牛田附近で接觸したことを思ひ出した。其時味方の大隊は聯隊の主力となつて、驀地に敵の中堅を衝いた。低い松原があつた。狼狽した敵を追つて追つて追ひ捲くつた。あの時ほど愉快なことはなかつた。かう思ふと、露營の光景、夜遲く或地點に着いて炊事當番の忙しい目に逢はされたことや、急な命令に接して、遲い夕飯をも食ひ敢へずに出發した難儀などが頻りに思ひ出される。續いて弘前の練兵場の黃い凄じい埃の中に、自分が眞黑になつて、兵を敎育して居るさまが眼に見える。突然窓外の風景にまぎれて忘れて居た昨日の電報のことが新しい鋭い力で頭を打つた。『ハヽオモイツゴウシテコイ』この電報を受取ると、急いで中隊長の許に走つた。そして一緒に大隊長の處に行つた。暑中休暇までまだ十日ある。それを賴んで都合して

貰つて、下宿に歸るとすぐ準備に取り懸つた。母の容態が氣に懸る。三月に行つた時からとても治らぬ病氣とは覺悟して居たが、愈々となると、離れて居るだけに心配になる。急いで土産物を整へた。園ひの林檎をも數多く買つた。下宿して居る家の母親に話すと、それは〳〵とさも驚いた風で、何彼と世話をして呉れた。階梯の下の暗い處に色の白い娘が立つて居た。ソッと手を握つたのを誰も知らなかつた。

難かしい昔氣質の祖母が其家に居た。孫娘は其祖母に殊に愛せられて居た。二人の交情が覺られやうものなら、それこそ大變である。津輕氣質として、短刀位突つけられるのは覺悟しなければならぬと娘はよく言つた。それに、戀する秀雄に取つて今一つ重大な心配があつた。祖母の同じ孫で、娘の從兄に當る財産家の息子があつた。祖母の腹では無論それに孫娘を妻はせる積である。父母は稍々當世で、血族結婚に不贊成であるが、——娘も東京から來た士官の若々しいのに胸を動かしては居たが、一家に無上の權力を振つて居る祖母は容易に其を聽きさうにもなかつた。

朝、弘前を六時に發つた。娘は母親の後に立つて、悲しさうにして見送つて居た。昨夜、何うかして好い機會を作つて、いつものやうに娘をこつそり二階に呼ばうとしたが、秀雄は其の目的を達しなかつたのである。

一の關に着いた時は、もう日が全く落ちて居た。辨當を賣る聲が賑かに聞える。秀雄は立つて隱袋に錢を探つて窓から辨當と茶とを買つた。

汽車は轟々として夜を駛る。

車燈の油の光る下に、秀雄は横に倒れて、寢て此一夜を過さうとした。けれどうと〳〵するとすぐ覺める。小さい薄暗い六角の釣洋燈が幾箇となく同じやうなさびしい田舍の停車場をぼんやりと照した。

半眠り半覺めた頭腦にいろ〳〵なものが通る。聯隊本部の將校室、大隊長の黑い難かしい顏、酒保の男の耳の疣、死に瀕した母親の皺だらけの顏、何處かの演習で怪我をした兵士の血だらけの姿、ふと娘の白い顏が見えて眼が覺めた。

自分の室がすぐ浮んだ。二階を上ると六疊と四疊半、四疊半は物置になつて居る。六疊には床の間が附いて居て、四季をり〳〵の花を娘はよく活けた。始めて其處に寄宿した時のことゝ、娘の可愛らしい姿を見た時と、それからもう一つ或ることを思ひ出した。娘を頭腦に描くと何時でもそのあることを思ひ出すのが、かれの此頃の例になつて居る。もう自分のものだ！　といふ念がすぐ湧き返つた。祖母が難かしからうが、父母が許さなからうが、娘は既に自分のものだ、かれは心にかう繰返した。

二階の階梯をこつそりと上る微かな足音がする、着物の物に觸る氣勢が待焦れた耳にはつきり聞える。六疊の障子は半分ほど明けてあつた。二階は眞暗であるが、下座敷に行燈がぼんやり點いて居るので、階梯を上つて來る娘の顏は白く見えた。

『もう自分のものだ！』

とかれは再び思つた。嬉しさが胸一杯になる。

祖母はその愛せる孫娘をその身のあたりから離さなかつた。寢る時も其室に一緒に床を敷かせた。晝間は琴を彈かせたり、昔の繪本を讀ませたり、花を活けさせたり、茶を立てさせたりする。秀雄はよく其祖母と物語をした。快活な無邪氣な正直な青年士官の性質は、其家の父母のみならず、昔氣質の祖母をも喜ばせるに十分であつた。

娘は光子と言つた。同僚が來た時、娘が秀雄の室に居たので、段々感づかれて、宴會の席で散々冷かされたことなどもある。會の崩れに、以前はよく誘はれて一緒に伴れられて行つたものだが、其頃から、

『君にや光子さんが附いてるから、誘ふのは氣の毒だ、』などゝ言はれた。けれどまだ其時分は戀をしては居なかつた。光子でなくてはならぬやうな氣も爲なかつた。寧ろさうした冷かしやら評判やらが遂に戀に落ちる材料となつたのである。

戀を得た今は別離がつらかつた。それに、此頃俄かに迫つて來た從兄との結婚談が心配になるので、

『何うかして、今度行くのを機會に、兄に話して、具合が好かつたら母にも話して、公然妻に貰ひ受け度いものだ、』と思つた。けれど今の場合、とてもそれの出來ぬことは自分でも知つて居る。

氣が附くと、汽車が停つて居るので、何處かと思つて、身を半起して秀雄は窓外を見た。停車場の六角燈の上部の青い邊に白ぬきに地名の平假名が出て居た。

『おほがはら』と微かに讀める。

時計を出して見ると十時半である。

まだ中々だ、寢ようと思つて再び横になる。仙臺で大分乘つたやうだが、それでもまだ車室は空いて居た。汽車が動き出すと好い心地になつて、すぐうとゝ〳〵する。又同じやうにいろ〳〵なことが頭腦を通る。今度は母親の顏が一層歷々と眼に附くやうになつて、それと重り合つて娘の笑顏が見える。『ハハオモイツゴウシテコイ』オモイといふ字が繰返し繰返し氣に懸る……

いつか眠つたと見えて、秀雄は福島を通るのを知らなかつた。

那須野を通越すと、朗らかな朝日が昇つて、鬼怒川の清い流が閃々と美しく光つた。秀雄の胸は愉快で、穩かで、そしてのんびりして居た。自から不思議に思ふほど母親のことを考へて居ない。かと言つて暗い家の光景や、病人の瘦せ衰へた姿を眼に浮べぬのではないが、それは餘り此身とは關係が無いやうに思はれる。母親が苦勞をして、吾々兄弟を養育して吳れた大恩に對して、何うか今五六年丈夫で生きて居て吳れて、思ふやうな樂をして貰ひたいとは、それは常に念頭を離れない願であるが、抵抗すべからざる力と相面しては、其願などは如何ともすることが出來ないほど小さいものである。若い者は若い者の道を進まなければならぬ。

美しく晴れた空のやうに、朗らかに輝き昇つた朝日のやうに、またはあたりの天地が生々した緣に包

まれて居るやうに其胸に若々しい希望が滿ち渡つた。

小山に來て、朝飯を食つた。もう東京がぢきである。旅行案内を繰ると、七時四十分には上野に入ることが出來る。秀雄はふと立つて傍の手提の中をさがした。既のこと忘れて來ようとした光子の寫眞が白紙に包まれたまゝ其中に入れられてある、手札形の小さい寫眞で、昨年の夏撮影した單衣姿であつた。

顔の長い、眉の美しい、ほつそりとした姿で、丈も何方かと謂へば低い方である。成程容色が好い、ちよつとこの位に眼鼻立の揃つた娘は少い。殊に眼が美しい。表情があると謂ふよりは、寧ろ落着いたといふ方で、此眼は餘り複雜した感情を顯はして居ないが、美しいことは此上なく美しかつた。惜しいことには扮裝は何うしても田舍風である。桃割に結つた髪の容から、着物の着こなしに、何處となく間が抜けた處があつて、帶の緊め方などどこか舊式である。津輕少女の訛のある言葉——秀雄はその愛らしい津輕訛を不圖思ひ出して堪らなく戀しくなつた。

暫くしてそれを元の手提に藏つて、今度は紙に包んだ林檎を一箇出した。紅く艶々して、何だか津輕少女の匂ひがこの一顆の果物にも顯はれて居るやうである。秀雄はナイフをチョッキの隱袋に探つて、皮を剝き出した。不圖、傍に二十七八の丸髷の婦人が七歲位になる可愛い男の兒を伴れて居るのに氣が附いて、手提から今二箇出して笑ひながら男の兒に遣つた。秀雄は子供が好きである。

男の兒は嬉しさうな顏をして、軍服を着けた青年士官を窺さうに見上げた。婦人は何か好いことを云ふ、

まァ、』と謂つて幾度か禮を述べた。

利根川の長い鐵橋を汽車の渡る時、秀雄は母や祖父母と一緒に買切の川舟で東京に出た折のことを思出したが、栗橋、久喜、大宮、赤羽と急行の列車は逸早く過ぎて、王子の烟突に漲る煤煙をも後に、やがて上野の停車場に着く。

二十二

停車場から車を傭つて、秀雄が喜久井町の宅に着いたのは八時半過であつた。低い門、庭樹の繁り、緣側には張物が出してあつた。車の門前に留つたのに氣が附いて、井戸端に居るお米が振返ると、眼に映つたのは立派な若い軍人姿！

『まァ秀だよ』と飛出して來た。

七八年逢はぬので、今更のやうに姉弟の胸は躍つた。

『母樣は？』萬事を擱いて秀雄が訊くと、

『今日は少し好いやうだけど……好いが好いでないものだから。』

かう言つたが、すぐ緣側に飛んで行つて、

『母樣、秀が來たよ。』

青年士官は劍を引摺りながら、やがて其晴やかな軍服姿を緣側の前に立たせた。

病人は涙を流して喜んだ。けれど其喜びはやがて深い悲哀である。抵抗することの出來ない力に對する悲愁は血を分けた親と子の全身の脈を動かした。

頰を流るゝ老母の涙と秀雄の默つて背けた顏とを、同じく默してぢつと見て居たお米は、堪らなくなつて自から顏を掩つて泣出した。

秀雄は嚴然と坐つて、顏を背き勝に低頭かせて、瀧津瀨と胸に集つて來る涙を下脣を嚙んで押へた。

一座は深い沈默に落ちた。

けれどもそれも瞬間であつた。涙や悲哀は長く續くものではない。時ならずして、其沈默は破られ、其涙は乾かされ、其悲哀は薄らいで行く。

病人の枕元には、紅い美しい數顆の林檎と土地の名產の林檎羊羹とが並べられる。病人は此頃は殊に食慾が進まない。それに食つてもすぐ反して了ふ。また旨く納つたにしても腸の痛むのが恐ろしい。でも折角秀雄が遠くから持つて來たのだと謂ふので、一番味の好ささうなのをお米は選んで、半分にさいて、皮を剝いて、小さく割つて、その儘手に持たせると、病人は秀雄の顏を飽かず見ながら、それをさも旨さうにサク〳〵と音させて食つた。

主人は役所に行つて留守、お姙も藥取りに行つて居なかつたが、やがて歸つて來て、切對面の挨拶をする。銑之助もそれと聞いて、書き懸けた安原稿の筆を擱いて、急いで裏の家から遣つて來た。

銑之助は秀雄の相變らず元氣で快活なのを羨しく思つた。軍服を輕い紺絣の單衣に着替へて、色の淺黑い、頭の丸い、莞爾した苦勞の無ささうな顏をして、頻りに無邪氣なことを言つて笑つた。林檎を選んで手づからナイフで皮を剝いて、『銑ちやん……これが旨いよ、』などゝ自から勸めた。

お米は秀雄の成功を目を聳てゝ見た。小さい頃母の手だすけに秀雄の世話をよく見て遣つたので、情合が何となく厚い。それに久しく逢はぬから懷かしくもあるし、力にする氣にもなる。『銑は若い女房に鼻毛を讀まれるやうな男だから駄目だ！』とお米は此間の衝突から銑之助を餘り快く思つて居ない。

秀雄は母親の病氣を思つたほどではないと思つた。それは衰弱したのは事實である。三月來た時とは丸で見違へるほど痩せ衰へて了つた。顏色も惡い、眼も光が無く一種のうるみを持つて來た。けれども う間もない暑中休暇をも待たずに、電報を打つて寄越したくらゐであるから、もつと危篤であると思つた。事に寄ると、死目に逢ふことすら出來ないかと心配した位であつたのである。

銑之助は其病狀を詳しく語つた。時々の烈しい疼痛、食慾の減退、身體の衰弱、神經が昂進して機嫌の惡いのが一番困るといふことから、死期の迫つて居ることをも殘りなく話した。秀雄は唯點頭くばかりである。

其處にお梅が來て挨拶したが、その憔悴した姿に秀雄はすぐ眼を着けて、

『姉さん、何うしたんです……夏まけですか。』

『いゝえ、さうぢやないよ、』とお米は傍から口を挿れて笑つた。

『何うしたんだい？』

『つわりだよ、お前。』

『もう出來たのですか、早いナァ。』

と秀雄は快活に目を睜る。

午飯を濟ましてから、昨夜よく寢なかつた、少し休まうと謂つて、秀雄は四疊半に入つたが、間もなく高い鼾が聞えた。お米が行つて見ると、枕もせずに、大の字なりに顏を上げて口を開いて熟睡して居た。

二十三

これで同胞は皆集まつた。容體が重いと言ふので、親類の人々も代る〳〵見舞に來る。果物の籠、鷄卵の折、珍らしい菓子など多く床の間に積まれた。

今一目逢つて死に度いとまで願つた秀雄も、來て見ればそれほどでもなかつた。泣いて貰つても、悲しんで貰つても、慰めて貰つても、要するに其身は獨り死ななければならぬのであつた。

一家の人々も長い看護に全く疲れ果てゝ了つた。治る病人ならば暇合がある。一度全快させて喜ぶ嬉

を見度いといふ希望も起るが、醫師も唯每日形式的に診察して行くばかり、全くの對症療法で、死ぬ病人、治らぬ病人と始めから多寡を括つて居る。病人はそれでも容易に死を自覺することが出來ず、少しでも氣分が好く、腹でも痛まないと、これで食ふものさへ食へば治るかも知れぬなどゝの希望をも起すが、看護するものには、これを見て居るのがいかにもつらい。ことに世話の難かしい機嫌の變り易い病人なので、それが各自の心やら境遇やらから起つて來る紛紜と一緒になつて、何うせ生命の無いものならば……といふ氣に時々なる。そんな考を起してはと誰も自から押へるのであるが、しかもその念を留め得るものはなかつた。

一家が總て浮足になつてそは〳〵して居た。主人は費用の多くかゝる上に、眼に見えて居る葬式の金の出所に就て日夜苦勞した。銑之助も秀雄も金を才覺するやうな柄ではない。相談をして見た處で駄目なのは知れて居る。二三箇所、先輩に泣附いたなら何うかして吳れるとは思ふが、さて其先輩にも結婚の費用などで、既にすでに多くの迷惑を懸けて居た。銑之助も此頃それと感附いて、兄を扶け度いものだと思ふ。けれど自分の生計すら辛うじて凌いで居る身には、何うすることも出來なかつた。秀雄はそんなことゝはゆめ知らず、

『まだあれではなか〳〵死ぬやうなことはありやしないよ。暑中休暇になつてから來ても遲くはなかつた。』

などと言つて居る。來てからまだ二三日經つか經たぬに、もう單調なる生活に厭いて、古い小說を押入の中から引張出して、四疊半に寢ころんで、それに讀耽つた。そして退屈すると、その書籍で顏を掩つて、いぎたなく晝寢をする。

裏の家にもよく出懸けて行つて、

『銑ちやん居るか。』

と門から呶鳴る。士官學校時代と調子が少しも變つて居ない。銑之助は仕事の邪魔をされるのを此上なく恐れて居るが、秀雄はそんな遠慮は無く、つか〳〵と座敷に上つて來る。銑之助が筆を擱かうが擱くまいが頓着せずに、すぐいろ〳〵な雜談を始める。前に釣つてあるハンモックに身を横へて、『こんなものより籐椅子を買へば好いぢやないか。籐椅子の方が好いぜ、』などゝいふ。

琴が袋に入れられた儘床の間に置かれてあるのを見ては、『嫂さん、此頃は琴も彈かないのか……。僕は上手になつたぜ、もう嫂さんに負けやしない。』

秀雄が三月に來た時から比べると、本家も裏も總て心持が變つて居た。お鐵がお桂に變り、それにお米が來て、互に絕えずすれ合つて居るので、調子に何處か合はない處がある。それに病人の重くなるに伴れて、人々の苛々した調子が何となく不愉快だ。

裏の家ももう以前のやうに樂しさうでも賑やかでもなかつた。

夫婦は默つて居ることが多く、殊にお梅は姙娠の故でもあらうが、眉の邊に何處となく淡い影が生じて、立居も勝れず、をり〳〵辛氣さうに嘆息をつく。畠には玉蜀黍ががさ〳〵と高くなつて、廣葉の蔭に、もう熟し懸けた實の黑い毛も見えた。

秀雄の身の上も變つた。

二十四

秀雄が餘り暢氣らしく閑暇な身を持餘して居るのを見て、お米は笑ひながら、

『お前、少し看病して上げたら好いぢやないかねえ、折角態々來たんだから。』

『うん……』と氣の無い返事をして、病人の枕元にちよつと坐つては見るが、別段手を下して爲ることもないので、直き四疊半に入つて了ふ。夏の日影は次第に暑く、病狀も日毎に重くなつて行く。

低い屋根の安普請、奧行が淺く、座敷の前後が緣側になつて居るので、朝に夕に日射が近い。殊に午後四時からは、夕日が座敷の半まで射込んで來て、その暑さと言つたら一通りでない。それに厠がそのすぐ側にあつて、穢いもの、乾く臭氣が堪へ難く人の鼻を襲ふ。蒲團は成たけ淸潔にして、敷布は絕えず洗濯するやうにして置くが、死に近い病人には、床摺れの靡爛や長い間の汚れた皮膚の惡い臭氣がそこはとなく纏つて、吐く呼吸も健康者の鼻には夥しく不快に感ぜられる。從つて蠅が多い。打つても打つて

も煩さく其周圍に集つて來る。棕櫚の葉を麻糸で結んだ蠅打が血で汚くなるまで打つても、容易に其數は減じようともしなかつた。ありもせぬ錢で、硝子の蠅取器を一個主人が買つて來て、それを座敷と茶の間との閾の上に置くと、時の間に黑くなつた。

親として曾て子等に對した權力はもうなくなつて了つた。家庭に種々の波瀾を起し壓制的に子等を壓迫した當時の勢力も認められなくなつた。もう嫁が厭でも、交情の睦じいのを見せつけられても、自から其身の不運不幸に忿怒の情を起しても、如何ともすることが出來なくなつた。親は親である。子は子である。子等の胸は、この難しかつた母親――理由の無い烈しい欲望の爲めに苦しい悲しい犧牲を敢てさせられた――そのむづかしい母親の亡くなつた後のことを想像するやうになつた。

銑之助には殊に其想像が强かつた。垂死の一塊物に對する不愉快の情と、不幸なる母親の一生の運命に同情する心と、自己の將來に於ける不安の念と、この三つが一緒になつて、常に凄じい波を擧げた。兄弟の中、銑之助が一番便りの無い心細い境遇である。それはお米も心細い。不安である。けれどお米にしろ、主人にしろ、秀雄にしろ、世間に觸れて、世と共に浮び且つ沈み得る人間である。世は世に觸れた人間を捨てゝ了ふことは滅多に無い。銑之助は文學を天職とした其身の苦痛を今更のやうにつらく覺えたのである。

ある時、銑之助がこれを秀雄に話すと、秀雄は寧ろ兄の例の癖とばかりで、『また始つたね、そんな

ことを言つたつて爲方が無いぢやないか、』と笑つた。

二十五

醫師はもう五六日しか持つまいと言つた、食物が殆ど通らなくなる。腹が痛むと、弛んだ澤の無い皮膚からは油汗がダク〳〵出て衣を浸した。苦しい、苦しいと言ふ聲は垣の外を行く人にも聞えた。

お駒も來た。お貞も來た。一家は更に一層の混雜を加へた。

代診が其度に來て、注射をして行く。初めはそれで稍落着いたものだが、後にはカンフルの注射位では餘り長い効能が見えなくなつた。さりとてこの衰弱した患者に、モルヒネを注射することは全然不可能であつた。

少し落着いた時には、それでも病人は口を利くが、もう癇癪を起したり物を投り附けたりする元氣は無い。看護する人の顏を見てはほろ〳〵と涙を飜し、秀雄の手を堅く握つては、もうこれがお別れだ！などといふ。弱い弱い人になつて了つた。

秀雄が脈搏を取つて見ると、餘程早く且つ不整である。呼吸もさも〳〵苦しさうにつく。

をり〳〵便の催すのをさし込の便器で取つた。病人は性來潔癖で、起き返られなくなつてからも、便をする時だけは、お米の手を假りて辛うじて身を起したが、四五日前からは、もう何うしても其自由

が利かなくなつた。體に締りが無くなつて、起返ると頭腦が眩惑する。で、やむを得ず寢たまゝ取ることにしたが、始めは馴れぬので一方ならず困つて灌腸までした。けれど近頃では何うやら斯うやら用を辨ずるやうになつた。痩せこけた脚を二本立てさせて、便器を其處に挿込むやうにするのである。

隣近所でも病人の段々重くなつたのを知つた。人の出入が非常に繁くなる。車がをり〳〵來て其門前に留る。丸髷の細君が來る。切髪の老婦が來る。洋服の紳士が來る。狹い玄關の靴ぬぎには、駒下駄やら、雪駄やら、足駄やら、編上げの靴やら、殆ど足の踏處も無い位。

勝手は相變らず汚なかつた。老母が喧しく言つて、銀のやうにてか〳〵光らせた釜も赤い錆が出て黑くなつた。釜の底などは十日に一度も庖丁で掻くことがないので、煤が厚く厚く積つた。七輪には物の煮え立つて吹き滴れた痕が條を爲したまゝになつて居る。お桂は勝手を自分の唯一の勢力範圍にして、襷を懸けた儘、其處に遁れて、ぐづ〳〵して居るのが例であつた。飯時分になると、茶湯臺が出て、茶碗と箸とが簡單に其上に並ぶ。多くは馬鈴薯の煮付か、豆腐汁か、鹽の辛い鮭か煮豆か乾物かが菜として顯はれる。

『豆腐ばかり食はせられて、こんなに痩せちやつた。銑ちやん、何か肉でも御馳走して呉れないか、』などゝ秀雄は裏の家に行つて言つた。

母親は、『己が死んだら、佛壇や神棚などどんなになつて了ふのか解りやしない。御燈明一つだつて

上げる奴はありやしまい、』と口癖のやうに罵つたが、まだ母親の死なない中から、佛壇も神棚も全く閑却されて、塵埃が一杯に積つて居た。

夜は二人づつ起きて居ることにした。病人は落着いて居る時は唯すや〳〵と寢るばかりであるが、痛み出して來ると、唸聲が烈しいので、隣の人も寢られぬといふ程である。けれど家人は連夜の看護に勞れ切つて、狹い蚊帳に鮨をつけたやうにぐつすりと寢込んで了つて、眼など覺ますものはなかつた。

一夜銑之助がお桂と夜伽をして居ると、前の田に水鷄の聲が面白く聞えた。渠は立つて戸を明けた。夜はもう十二時を過ぎて居た。曇つて暗い空を透して、梅、樫、檜、百日紅などが更に暗くこんもりと影を重ねた。四邊は全く寢靜つて、坂の上の二階屋の門前の瓦斯燈が覺束なく點いて居るばかり、蛙の聲が田やら畠やらに滿ちて聞えた。

低い田にちよろ〳〵と流れ込む小川があつた。草が流に浸つて、水馬が晴れた日の影にのどかに遊ぶ。蜻蛉のつるんだのが、水に尾を落して休んで居ると、子供が長い竹竿を寄せて、抜足差足近寄るのを常によく見懸けた。この闇の夜に、恰も其の小川の邊を水鷄がこゝと鳴く。

銑之助は庭から井戸端の柴折戸のかき金を外して垣の外に出た。胸は何となく沈着いて、自然の穩かな靜かな光景に全く一致して了つたやうな心地がする。

渠は母親の一生に同情した。けれどそれがいつもの同情とは不思議にも異つて居た。常には母のかう

した境遇に身を置くに至つた徑路やら、正直な我儘な性質から萠した悲劇やらに涙を濺いで、快樂といふ快樂をも遂げずに、自から身を亡して行くのを悲しむのであつたが、今宵は何故か母親の死が人類一般の死と相聯關して居て、何うせ一度は死ななければならぬ人間の儚なさがひしと胸に迫つた。

銑之助の眼には草の生えた墓と生れたばかりの赤兒と白髮の老人と死に瀕した母親とが眼前を通り過ぎた。深い深い生の悲哀が其多感多情の胸を抉つて、熱い涙がほろほろと頰から落ちた。

かうした感を渠は久しく起したことはなかつた。空想の境から實際の人生に入つた身には、さういふ悲哀は要するに粧飾である、繪具である。粧飾や繪具が糧にならぬのは渠自身にもよく解つて居る。けれど今はもう堪らなくなつたのだ。

暗い闇の中に自分唯一人生きて居るやうな氣がした。

銑之助は田の緣の草原に腰を休めた。草原には露がしとゞに置いて居る。蛙の聲の相變らず喧しい間を、水鷄はこゝとさびしく鳴く。

暗い丘の向うに黑い榛の樹が怪物のやうに並んで立つて居る。淡竹の藪の中に微かな寺の燈火が見えて、其上に星が一つ光つた。

突然飛附いたものがある。喫驚して立上つたが、見るとそれは平生よく馴れて居る近所の野良犬で、嬉しがつて兩足を立てゝ頻りに銑之助に飛びついた。

渠は暫くして家の方に戻つて行つた。庭に入ると、一枚明けた戸から行燈の火が洩れて、檐に近い蓆が半ほど其微かな餘光を受けて居た。靜かに歩いて、戸の傍に近寄つた。障子も明放してあるので、蚊帳の靑く風に動くのが見える。母！　母！　大恩ある母！　なつかしい戀しい母！　その母にももう別れなければならぬかと思ふとまた涙が出さうになる。

靜かに緣側に上つて、蚊帳の中に入ると、お桂が蒼ざめた顏をして、さもさも物に怖れたといふ風で、聲を低くして、

『銑之助さん、今、母樣が……。』

がたゞ震へて居る。

『何うしたんです？』

『今、母樣が怖い眼をして、譫言を仰しやるんですがね。』

銑之助は病人の方を見た。成程大きく眼を見開いて居る。

『母樣、何うかしましたか。』

其返事はせずに、

『誰だ！　其處に居るのは、行くのは厭だ、厭だ、誰が行くものか！』

眼を恐ろしく見張つて、手をひろげるやうにする。

『母様、母様！』

と、銑之助が呼んで見たが通じない。

丁度其前に恐ろしい或物が坐つて居るかのやうに、見張つた眼をぢつと据ゑて、氣味悪く空間を見詰めて居る。油汗が額からダク〳〵出る。

『母様、母様。』

矢張返事が無い。

爲方が無いので、銑之助はお桂に向つて小聲で、

『さつきからかうなんですか。』

『え、もう少し先程……すや〳〵眠て居らつしやると思ふとねえ、急に、聲を立てゝ誰だ！　誰だ！其處に居るのはッて仰しやるですがね。私です、お桂です、何か御用ですかッて聞きますとね、それには御返事を爲さらずに、「迎へに來たのか、來たッて、まだ行きやしないぞ！」と仰しやるぢやありませんかね。私、怖くつて、怖くつて何うしようかと思つて居ましたがね。』

『夢を見てるんだね。』

と銑之助は無造作に言つたが、それでも何となく無氣味であつた。病人の見張つた眼が微暗い行燈の光に見える。

病人は又始める。

『迎へに來たッて、行かない。厭だ、厭だ！　歸つて吳れ、歸つて吳れ！』と手で拂ふ眞似をして、

『和尙樣、私は何も悪いことは致した覺えはありません。私は正直に世を渡つて參りました。……』

『母樣、母樣、何うしたんです？』

矢張通じない。

『何うしたんでせうねえ、』とお桂は矢張ぶる〳〵震へて居る。

『和尙樣……和尙樣……。』

『母樣！』

と、今度は聲を强く、見張つた眼の前に顏を出して、輕く肩を搖ぶると、漸く氣が着いたらしく、空間を見詰めた眼で、銑之助の顏をぢつと……。

『母樣！　何うした？』

『今、其處に衣を着た和尙樣が……。』

『夢だ夢だ！　和尙樣なんか居やしないよ。』

『其處に居るぢやないか。』

『何處に？』

『それ、其處に坐つて居らしやる。』と行燈の陰を指した。

銑之助はギヨッとした。お桂は顔を袖で掩つた。

『嘘だよ、誰も居やしないよ。』

『其處に居るぢやないかナ。お前にも見えないかナ、』と、さも情なさゝうに、『和尚樣、何うかもう少し……もう少し待つて下さいまし。』

眼がまた据わる。

『折角迎へに來て下すつたのだけれど……もう少し……あゝ馬車、立派な馬車、折角だけれど……私等の乘るやうなものではないから……和尚樣……和尚樣……。』

言葉が斷續する。天井では鼠が鼠を追ふのか凄じい音があたりに響き渡つた。

時計が一つ鳴つた。

夜は寂として居る。老いた蛙の鳴聲が絶えてはまた續く。四疊半から秀雄の高い鼾がする。少時すると、病人は安心したといふやうな長大息を吐いた。

二十六

其夜に限らず、病人は可笑しなことを言ふやうになつた。それも總の爲めの遺言とは違つて、眼をば

つちり開いて、看護をするものゝ顏をまざ〳〵見ながら言ふ。では、もう人の見さかひがつかなくなつたのかと思へばさうでもない。銑之助や秀雄を捉へていろ〳〵正氣な話もした。

何處かに行くといふことをよく言つた。それから衣を着けた和尚樣が一晝夜に少くとも三度位は迎へに來た。其時は丸で意識を失つて了つて、坊主が來た！　坊主が來た！　と叫ぶ。据ゑた眼がいかにも恐ろしさうで、細い痩せた手を重さうに擧げては、胸の邊りを頻りに搔き拂はうとする。口をもぐ〳〵させて何か言はうとしても、其時は滿足に言葉が出ぬらしい。他界の神祕が人々の胸を衝いた。

又かういふ話があつた。昨夜、お駒が看病して居た。勞れてついうと〳〵すると凄じい音がした。確かに誰か來て戸を叩いたに相違ない。で、はいと返事して、玄關の雨戸を開けて見たが、誰も居ない。門まで出て見たが、矢張誰も居ない。不圖氣が附いて、急に戰慄(おぶるひ)が出て、慌てゝ戸内に入つた。『實にあの時は怖かつたですよ。何うしようかと思つた位でしたよ。だから……急いで秀雄さんに起きて戴いたんですがね……』とお駒が話した。

近い田舍から出て來た義妹に當る老婦も同じやうなことを語つた。此頃毎晩胸騷ぎがする。不思議な夢を見る。病人が重いのではないかしらんと苦勞にして居ると、一昨夜確かに姉さんが來た。それは夢ではない。まだ宵の口で、火鉢の前に坐つて居ると、姉さんが莞爾と笑つて入つて來た。はて不思議だ。あんな病人が歩いて來られる譯が無いと思つたら、もう影も形も消えて無かつた。お暇乞に來たんだと

思つたから、今日は何事をも措いて出て來たとのことである。かういふ話が幾つとなく人々の口に上つた。

病人は依然として腹が痛むのであるが、もう押して貰はうともしなかつた。押しませうかと言ふと、手を振つて見せる。そして小聲で、『押すと却つて痛い、獨りで我慢する、』といふ。

お梅は夜伽を恐れた。と謂ふのは、二三日前の夜にお桂に賴まれて少時の間一人で起きて居ると、病人が怖い眼をした。身體の具合で神經が昂ぶつて居る身には、それが怖くつて怖くつて爲方が無かつた。それからは賴んで成べく夜伽を許して貰ふやうにした。主人もお梅は姙娠して居るから餘り無理を爲ないやうにと注意して呉れた。

お梅は晝間病人の傍に居ることが多かつた。病人はお梅の顏をぢつと長く見詰めて居ることがある。他の人はさうで無いのに、何故に自分ばかりかう注意されるのだらうとお梅は時々無氣味に思ふ位である。殊に其夜伽の時の眼を思ひ出すと、戰慄が出るほどに氣味が惡い。其身が懷姙してから、病人の調子が著しく變つたことが常にそれとなく若い細君の心を惱して居るのである。

久留米耕の單衣に赤い帶揚をして、大きな丸髷に結つた肥つた若々しい姿は、痩せ果てゝ、骨と皮とばかりになつた垂死の姿と相對して坐つた。

二十七

かういふ狀態で猶幾日か經過した。

午後三時過ぎ、秀雄は晝寢から起きて、裏の家に行く。緣側で少時仲兄と話して居たが、不圖立つて畠に入つた。

玉蜀黍の熟したのを取らうとするのを銑之助は見て、

『いかんよ、玉蜀黍を取つちや――。』

『何故？』と秀雄は振返つて、『好いさ、好いさ、此間から覘ひをつけて置いたんだ。』

ギイと折る音がする。

それを手にして、畠から出て來て、皮を剝いて、『ほら……この通りに立派に實が熟つて居る。』

『困るナア、お梅が大事にして居るんだよ。』

『嫂さんが……。構ふもんか、己が取つて食つたつて言へば好いぢやないか。』

秀雄はずん〳〵畠に入つて、暫くがさ〳〵と熟したのを搜して居たが、やがて毛の黑くなつたのを五六本抱へて出て來た。

銑之助はハンモックに身を横へたまゝ、默つて見て居ると、秀雄は自分で臺所へ出懸けて行つて、ガ

タピシとけたゝましい音をさせて、七輪を前の縁側に持出して、火種を火鉢からさがして、消炭と炭とを上に乘せて團扇でばた〳〵煽ぐ。

『銑ちやん、手傳つても好いぢやないか。』

銑之助は笑つて居る。

『燒けても遣らんよ。』

『けしからんことをいふ、人の家の玉蜀黍を無斷で取つて、人の家の炭で燒いて、遣らんよもないもんだ。』

『遣らん、遣らん。』と言つて、ばた〳〵煽ぐ。

火がやがて活々と起る。秀雄は取つて來た玉蜀黍の皮を剝いて、三本ほど火の上に載せる。其處にお米が女の兒を抱いて、だらし無い恰好をして遣つて來た。

『何だね、まァ、秀。玉蜀黍なんぞ燒いてるのかい。』

と笑ひながら言葉を懸ける。母が病氣なのに暢氣なといふ調子である。

三人の胸には同時に幼い時のことが浮んだ。夏の日學校から歸る時分には、母親とこの姉とが（姉は其頃もう學校を卒業して居た）二人の弟の爲めに玉蜀黍を燒いて待つて居て呉れた。姉が畠に行つて玉蜀黍を折る音がぎ〳〵ゝと聞えた。母親は賃仕事に坐つて、前には大きい銀杏の樹物板が据ゑられてあ

つた。姉弟は言合せたやうに其時分のこととと今のこととをひきくらべた。かうして人は生れ人は死し世は移り行くのである。

お米は田舍に置いて來た子供等をも思ひ出した。

秀雄は燒けたのを二本取つて、

『暑い、暑い。火の傍はたまらん。姉さん燒いてお呉れ。』

もう用が無いといふ風で立上る。

『ひどいね、まァ秀は、』とお米は笑ひながらいふ。

『だッて、かういふことは女の役目だ。その代り一本遣るよ。』

『己にはよこさんのか。』と銑之助がハンモックの上からいふ。

『姉さんが今燒いてやるとさ。』

『お前がまだ一本持つてるぢやないか、それを寄越せ！』と半ば身を起して取りにかゝる。秀雄は笑ひながら逃げて廻つた。大人とは思へぬほどの無邪氣である。

火の上に載せてあるのが焦げるので、お米は止むを得ず、子供を緣側に這はせて、七輪の前に立膝して蹲踞んだ。

やがて殘らず燒ける。

玉蜀黍を食ひながら、をさない頃の物語が始つた。一粒づゝ玉蜀黍の實を爪で取つて空地を拵へて、此處が三疊、六疊、ずッと奥が便所！　などゝ物眞似をして食つたものである。それに同胞の一人が屹度後まで殘して置いて、態と見せびらかす惡い癖があつたので、最後はいつも奪ひ合やら喧嘩やらに終つた。

『もう忘れても燒いて遣りやしないから覺えて居ろ、』と母親がよく叱つた。

その頃を誰も皆思つた。お米は自分の教つた小學校の先生から結婚を申込まれたことを思ひ出した。其先生は今も田舍の近鄕の學校の校長をして居る。時々町で邂逅すことがある。銑之助も秀雄も其先生を知つて居るので、其先生の話から、段々田舍の話に移つた。

銑之助は銑之助時代、秀雄は秀雄時代の友達やら娘やらのことをお米に訊いた。故鄕に殘つた友達は、多くは小學校の教師になつて、其頃の娘達はそれ〴〵子持になつて居る。銑之助のラブした丸顏の町娘はもう三番目の女の兒を抱いて、此間も街頭を歩いて居たとお米は語つた。秀雄は十二の時田舍を去つたので、まださうした戀の經驗はない。渠は釣のことや沼のことや竹馬の友のことを飽かず訊く。

『お前が士官になつたのが、そりや田舍では評判だよ。』

とお米は言つた。

『一度國に行つて見たいね。』

錦を飾り度いといふ氣が秀雄の胸にあつた。銑之助は此頃『ふる鄕』といふ小說を書きかけて居た。故鄕は渠の爲めには失戀の故鄕であり失意の故鄕であり灰色の故鄕であつた。かれは飄零落魄した男が一夜を人知れず故鄕に過すといふことに筆を着けたが、其男は無論銑之助自身であつた。錆色の淺茅沼、泥塗れの小舟、藻や蓴菜や蓮の繁茂、それが目の細かい網のやうに其記憶に織込まれる。

故鄕の追憶にはいつも母が伴ふ。士族屋敷の小路、裏の畠、湯歸りの田畝道、沼の畔の朴の樹――姉弟はこれ等の縮圖の中に母親のなつかしい顏を見た。

『母樣今少し生かして置きたいねぇ！』

と、しんみりした調子でお米は言つた。けれど母親はもう現在の人としてよりは過去の人として子等の頭腦に映つて居たのである。

七輪に懸けた鐵瓶が煮立つたので、お米は茶を淹れて弟共に出すと、

『茶はあついナ、銑ちやん、己がサイホンを奢らうか。』

『奢れ、奢れ。』

で、姉は子供を秀雄に託して使に行く。暫くして、喜久井町の通の氷屋の婢が氷のぶつかつたのとサイホンの罐とを岡持に入れて持つて來る。風通しの好い涼しい松原の綠の漲つた一間に姉弟は樂しさうに氷を啜つた。

かうして居る間にも秀雄は娘のことを思つて居た。

銑之助は『ふる鄕』の話をして聞かせた。秀雄は聞終つて、

『それで一册書いてよほど金になるのかね？』

『金は僅少だ。』

『でも書いて呉れッて、書肆から賴みには來るんだらう！』

『それは來る。』

『それから、書いて持つて行きさへすりや、何處でも買つて呉れるんだらう？』

『うむ。』

銑之助の答は稍曖昧して居た。

『それなら好いさ……。軍人なんざ本當に詰らん。朝から晩まで埃を浴びて、大きな聲で呶鳴つて、そして時々は大目玉を食ふんだから。』

『東京には出て來られないのか。』

『さうさなア……。其中には出て來られるだらうけれど、今年は駄目だ。』

『田舍にぐづ〳〵して居ると、後れて了ふぜ。』

『大丈夫だよ。』

『大學には入らんのか？』

『入る積りで、勉强してるけれど……駄目だよ、僕には。』

『何故？』

『參謀なぞ柄にない。』

『始ッからさう捨てゝ了はなくつても好いぢやないか。』

『野戰隊の方が面白いからナ。』

『野戰隊でも旅團長位になれや面白いけれど……。』

『無論なるさ。』

と秀雄は笑つた。

秀雄には銑之助が解らなかつた。お互ひに交情は好い。やさしい人だと秀雄は思つて居る。けれど何うもその文學的の處が腑に落ちない。何ぞといふとすぐ悲しい方にばかり物事をきめたがる。平凡なことを罪惡だとか言つて大騷ぎをする。何ういふ譯だか解らない。長兄の形式的の辭令にも餘り感心はしないが、仲兄のやうに神經過敏でも困ると常に思つた。

『人間も死なうたッて中々死ねないもんだねえ、』と秀雄が突然いふ。

『何故。』

『だッて、母樣でも死ぬ、死ぬと醫師から宣告されて、未だに生きてるぢやないか。』

『あんなひどいことを……男はのんきだねぇ。』

とお米が呆れる。

『だッて左樣ぢやないか。何うせ死ぬんなら、早く死んだ方が好い。僕などは卒中か何かで、ぽつくり死んで了ひたいよ……』と秀雄は平氣で、

『それにしても、よく保つもんだねぇ。丸で一週間から食ふ物も食はずに、あゝして居るんだがなァ。』

『本當だ。』

銑之助も言葉を合せた。

『姉さんも國の方を何時まで投つて置いて好いのかえ。何とか消息があつたかえ。』

『好いたッて、惡いたッて、かうなつて親の死目に逢はないで歸れやしないやねぇ。秀はのんきなことばかり言つてるよ、一體、情が薄いね、お前は……。』

秀雄は笑つて居る。

けれど銑之助は秀雄のかうした言葉をも別に不思議とものんきとも思はなかつた。まして情が薄いなどと夢にも……。秀雄が心から母親を思つて居ることは銑之助はよく知つて居る。自分よりも數等情が篤いことも知つて居る。銑之助は涙を流したり悲しい言葉を言つたりする。けれどそれは傍に篤い爲めではない。昨夜もハンモックの上で、五日頃の月を見て、此月のいつ頃に母の死に逢ふことかと烈しく泣いた。けれどそれは母親を悲しむといふよりは寧ろ自己の感情に泣いたのだ。其證據には、其處に若い細君が歸つて來たら、其涙は忽ち乾いて了つたではないか。其の柔かい手を握つたではないか。

銑之助は自からかう罵つた。

二十八

月が段々明るくなつて、今日はもう十日だといふ。街の賑はひ、氷店の繁昌、鉢植の草花、神樂坂は毎夜毘沙門の緣日のやうに雜沓するとの噂。山の手の奥からも白地の浴衣に薄化粧の夫婦連が幾組となく出懸けて行く。

病人はまだ生きて居た。

平生後生を願はなかつたからといふ聲が彼方此方に聞えた。だから言はぬことではない、私は御寺參をあれほど勸めたのにと親戚の法華かたまりの老婦が得意さうに言つた。お駒は人知れず叔母の爲めに榎町のお釋迦樣に跣足參をして、何うせ治らぬものなら一刻も早くお引取下さるやうにと願を懸けた。

主人は月の始めから暑中休暇で家に居た。小まめに病人の世話やら家事やらを手傳つて、暇には緣日で買つた草花などをいぢつて居る。男の兒の爲めに、小さな池を庭に掘つて、金魚を三四疋放つて遣る

と、英男は大喜びで、前の田から鰌やら目高やらを自分ですくつて來た。いつもは蜻蛉捕蟬捕に夢中で、晝飯も碌々食はずに遠くまで彷徨き歩く。緣側の隅の紙屑籠には、ぎんやらちやめやらやんまやら蟬やらが一杯入れられてガサ〳〵騷ぐ。

『此子はまア父樣に似たと見えて、こんなにやんまを捕つて來て……。』とお駒がいふ。

兄弟の中で主人が一番頑健であつたといふ。蜻蛉や蟬を澤山取つて來ては緣側に籠を伏せて置くので、祖父が喧しいと言つて爲方が無かつた。それに惡戲と言つたら界隈でも名代で、近所の兀頭を打つて吸鳴り込まれたことなどもあつた相だ。『あの惡戲子がこんな立派な旦那さんにならうとは思はなかつた、』などと其頃を知つて居るお駒は笑ひながら常に昔を語る。

『秀ちやんは知らないが、銑ちやんは成人しかつたよ。此子はおすばりで家に引込んでばかり居て、滅多に戸外に遊びになど出なかつたからねえ。それに此兒が生れたばかりの時、叔母さんがね、よく實家に抱いて連れて來てね、御飯の時は、お駒、鳥渡代つて小兒を抱いて遊んで來なッて、祖母さんに吩咐けられて、戸外に行くのさ。すると此子はそれは泣蟲で、火のつくやうに泣いて泣いて、いくらだましても泣止まない。餘り泣くもんだから、お駒、落しでも爲たんぢやないかつて、祖母さんによく叱られたものさね！』

『其時幾歳だつたえ、お駒さんは。』

『十五か六で、よく機を織つて居たァね。』

『秀もなかなか惡戲だッたよ。』

と傍からお米が言つた。

『さうかねえ、秀ちやんも惡戲だッたかねえ。私は叔母さんが叔父さんと東京に出てからは、足利に嫁に行つて了つて知らないけれどね……それにつけても、かうしてまア、皆な大きく立派になつて、揃つて看病するとは、叔母樣も仕合せさね。』

此お駒が老母の若い時代のことも話した。實家の祖母の話では、老母は嫁に行つた當座、舅姑が難かしいので、幾度も實家に歸つて來た。それをいつもすかしたりなだめたりして歸して遣る。處がある時、もう今日こそは死んでも歸らぬといふ。段々樣子を聞いて見ると、餘程辛いらしい。けれど昔はさう容易く離緣は出來ないから、もう一度我慢して辛抱して呉れ！　ッて、泣いて祖母が慰めたさうだ。母は泣きながら夕暮の田圃道を一人さびしく歸つて行つたが、其時から居る氣になつたと見えて、間もなく亡くなつた總領の姉が腹に出來たとの話である。母がある時酒を飲んで醉つて、『お前の父樣などは氣樂くつて來たくはなかッた。もつと好い人はいくらもあつた、』と言つたことを銑之助は思ひ出した。永久の人生に連珠の如く輝くのは若い戀である。

夕暮になると前の田圃に蜻蛉が蚊を食ひに來るので、近所の子供が竹竿を携へて多く集つた。銑之助

と秀雄は、夕飯後の運動に、男の兒と一緒になつて、竊竿で蜻蛉の縱横に飛交ふのを拂つて居ると、井戸端からお米が事ありげに手招きした。母樣の容體が變だ！

行つて見ると上目をして一ところを凝と見詰めた眼は凄くうるんで居た。仰向に白髮頭を括枕に載せて、兩手を胸の邊に合せて、不整になつた呼吸をする度に、咽喉の處が微かに動く。をり〳〵聲を出して何か言ふが、それがもう解らぬほどに舌が縺れた。

『あら、もう舌が廻らないのだよ、』とお米は慌てゝ、『母樣、母樣』と聲を高くして呼んで見る。

病人は眼を聲のする方に向けた。まだ意識があるといふのが解る。時々顏に皺を寄せる。

『まだ痛むと見えるね。』

三時頃から少し容體が變つて來たのである。午まではいつもの狀態、別にこれと謂つた徵候も見えなかつたが、不圖傍に居た主人が氣が附くと、舌といひ、眼といひ、皮膚の色といひ、何うも唯ならぬ氣勢がそれとなく見えた。折よく醫師が來た。形のごとく胸に聽診器を當てゝ、眼緣をめくつて見て居たが、いつものやうに病人に聞かるゝのを憚りもせず、『うん、これはいかん。もういけません、』と平氣である。醫師は病人が既に聽覺視覺を失ひつゝあるのを知つたのだ。

『お大事になさい、もしもの事があれば何時でも起して好いから。家の耳門の呼鈴を知つて居るかね、あれを押しさへすると夜中でも通じる。』かういつて急ぎに去つた。注射などはもうする必要が無かつた。

子等は兎に角其周圍に環を爲して集つた。誰の視線も皆な痩せ衰へた病人の上に落ちた。

病人は微かな呼吸を刻むやうにする。そして一分の中に一度位ハァと深く大きな呼吸を交へた。其時に半開いて締のなくなつた頤ががつくりと外れさうになる。右の手を辛うじて持上げて、胸の邊を搔拂ふやうな眞似をしたが、其度に微かな無氣味な形容の出來ない唸聲を立てた。

誰も皆沈默した。障子に移つた夕燒の反照も次第に消えた。

やがて日が暮れたので、お桂が先づ立つて茶の間に洋燈を點けた。そして病人の枕元に行燈を持つて行くと、お駒とお米は立つて蚊帳を釣りに懸る。

緣側に並んで立つた秀雄と銑之助。

『いよ〳〵駄目だね』

『今夜はあぶない』

『今日は幾日だッたね？』

『十五日』

『さうか八月の十五日』

と秀雄は何事をか思ひ集めるといふ風でかう繰返した。

舊曆は七月十二日、銀盤を磨いたやうな月は既に水のごとき光を庭に落して居た。樹の影草の影が黑

く地上に横つて、垣には蟲が早鳴き始めた。

其處に男の兒が兩手の指の間に隙間なく蜻蛉を挾んで歸つて來て、

『叔父さん、これ！』

と得意さうに見せる。

『一人で捕つたのか』

秀雄がかう訊くと、

『一人とも、まだ澤山居るんだよ！』と、跣足で上にあがれぬので、身體を延して籠を取つて、ガサガサと蜻蛉を其中に入れる。

『新ちやめが二疋に婆ちやめが三疋！』と嬉しさうに叫んだ。

『英ちやん、もう足洗つて寢るんですよ』

と其處にお駒が來て、バケツに水を汲んで足を洗つて遣る。

時計が八時を打つ頃には、其男の兒は茶の間の一隅に蚊帳を半分釣つて、小さい鼾を立てゝ寢て居た。茶の間には紙笠の五分の洋燈が徒に明るく點いて、一家の人は皆座敷の蚊帳の中に集つた。

蚊帳の中は薄暗くつて蒸暑かつた。それに物の腐る臭が人を壓して重苦しい呼吸の音が沈默した一間に際立つて聞える。

行燈の微かな光は枕元の黑塗の盆、藥瓶などから懸けて、蒼白い死人のやうな顏を照した。周圍に集つた人々の顏も眞面目で陰氣でそして暗かつた。今までは、主人が小さい水差を口に宛てゝ遣ると、さも旨さうに嚥下したものだが、今はもうそれも出來なくなつたのである。止むなく筆に水をふくませて飲ませた。

時計が十二時を打つた。秀雄は久しく病人の足元に坐つて居たが、ソッと蚊帳をまくつて裏の緣側に出た。眠くつて眠くつて爲方が無いのであつた。で、茶の間を通つて、緣側から下りて、井戸端に行く氣勢がしたが、續いて水を汲む音がして、頭を洗ふ音がざぶ〳〵聞える、

月はもう餘程傾き懸けて居た。美しく晴れて居るので、樹と草の影がいかにも濃い。影と影とが暗く重り合つた處から少し離れて、椿の葉が一つ一つ露に光つた。

秀雄の黑い影は門の處に少時立つて居たが、やがて駒下駄の音をさせて緣側から茶の間に上つて、長火鉢の前に坐つて、煙草を一服吸つた。眠むさうな顏を洋燈が斜に照した。不圖傍に姉のお米が見て居た八犬傳の最後の卷が一册讀み懸けたまゝ伏せてあるのを手に取つて、無意味に頁をかへして見た。八犬士が八人の姫と籤を引く個所である。幾度も讀んで知つては居るが、つい釣込まれて二三頁讀むと面白くなつて來た。けれど蚊がいかにも多い、大きな奴がこつそり來て、着物の上から痛く刺して行く。

其處に、お米が出て來た。矢張眠さうな顏だ。

『同じだらう』と秀雄が小聲で訊く。

お米は點頭いて見せる。蚤に責められて痒いと見えて、體の彼方此方をボリ〳〵搔いたが、急に立上つて、前をはだけて、白い腰卷を洋燈に寄せて蚤をさがし始めた。また初めたナと秀雄は眉を顰めた。

銑之助も主人に續いて出て來た。やがて鹽煎餅が山のやうに盆に積まれたまゝ出される。秀雄は八犬傳を讀みながら三枚も四枚も食つた。主人が淹れた茶を姉弟は皆飲む。

今度は銑之助が緣側に出たが、『好い月だナァ！』と言つて、すぐ庭に下りた。多感の銑之助は此落月の寂しさを無意味に見ることは出來なかつた。かれの悲哀は長く黑く曳いた物の影に細かに織込まれるやうな氣がした。

月は低くなつた。裏の水口の戸が今まともに其光を受けて居る。戸の上の壁の崩れも明かに眼に見える。土用を過ぎても刈込まぬ杉垣が不整に亂れた影を路に落して、蟲の音が物哀れに聞える。母の最後の夜——かうした落月の物の影と洋燈と蟲の音とがかれの胸に鮮かに印せられて、一生忘れる時がなからうと思はれた。

銑之助が上つて來た時、

『潮時といふことがあるもんだ相だ。……』

と主人の言ふのが聞える。

『それから生れた時刻に人は死ぬものだと謂ひますねぇ、叔母さんは何時頃生れたんでせう、知つてる人はありませんか、』とお駒が言ふ。

誰も知る者は無かつた。

月が落ちた。黎明の光が何處となく行渡つた。潮時も來てやがて過ぎた。

鳥が啼く。日が出る。車井戸を繰る音が其處此處に聞える。家々の引窓からは朝餉の烟が昇る。味噌をする音がする。新しい日毎の生活は始つた。けれど病人はまだ生きて居た。お駒は井戸端で、『まだ御引取下さいませんでね、』と朝水汲みに來た隣の細君に話した。

二十九

其日の午後四時、主人は四疊半で古文書を取調べて居た。お米は玄關の三疊で女の兒に乳を呑ませながら眠つて了つたし、お駒は汚れたものゝ洗濯を爲て居るし、秀雄は裏の家の座敷が涼しいと言ふので午後から態々出懸けて行つて晝寢に耽るし、銑之助は暑い日盛を袒(はだぬぎ)になつて一生懸命に原稿を書いて居るし、病人の傍にはお桂とお梅とが唯形式的に坐つて居るばかりであつたが、急に樣子が變になつたので、お桂は慌てゝ夫を呼んだ。

主人はすぐ來て見たが、お梅に、

『早く銑と秀を呼んでお出で！』

お梅は慌てゝ顔色を變へて飛んで行く。主人は玄關のお米を搖り起す。お駒は濡れた手のまゝで緣側から上つて來る。靜かな夏の晝の平和は忽ち破られた。

『貴郎、貴郎、大變！』とお梅は庭から聲を立てゝ入る。

『何うした！』

『母樣が變です！』

銑之助はすぐ立上つた。そのまゝ傍に仰向に寢て居る秀雄を搖つたが、容易に目覺めない。うん〳〵と返事を爲ながら、すぐまた眠つて了ふ。いろ〳〵にして漸く起すと、目を摩つて不平さうに、『何うしたんだ？』といふ。『何うしたんぢやない、母樣が……』と話すと、澁々ながら起き返るには起返つたが、まだすつかり眼が覺めないといふ樣子。

それを漸く促し立てゝ、急いで下の家に驅附けると、お米が眼を赤くして筆で末期の水を含ませて居る處であつた。呼吸はまだついて居た。深く刻むやうに時を置いて、半開いた痩せ果てた頤が其度毎に動いた。見開いた眼は義眼のやうにぱつちりして、手を遣つて見ても、もう眼ばたきを爲なかつた。

『母樣！』

と泣聲でお米が呼んで見たが、もう通じぬらしい。

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！』

お駒は一生懸命に唱名をして、頻りに口を筆で濡らしながら、『死ぬ時と謂ふものは、水が欲しいものだ相だから』とか何とか言つて、さも〳〵情に堪へないやうに、『好い叔母樣だッたに……。よく物の解つた、利口な叔母樣だッたに……。』

涙が其頰を傳つた。

呼吸が絶え〴〵になつたと同時に、ぐつと痰が咽喉にこみ上げて來て、二度三度頤をしやくつたと思ふと、それきり息は絶えた。

手の脈を取つて居た主人も今が最後であるのを知つた。

最後！　死！　と思ふと、悲哀の情が溢るゝやうに人々の胸に漲つた。死は總ての事情を忘れしめ、總ての汚れた思を淸淨ならしめる。死に面しては、誰も嚴かな悲哀と同情とに撲たれぬものはあるまい。

『南無阿彌陀佛〳〵』とお駒は猶唱名の聲を止めずに、『銑ちやんも秀ちやんも最後の水を含ませてお遣りなさい。親子の緣もこれが限りですよ。』

低頭勝にして居た銑之助の眼からは、涙が霰のやうにほろ〳〵こぼれた。秀雄は少し離れて覗き加減に死者の顏を見て居たが、この悲しい言葉を聞くと、堪らなくなつたといふやうに平手で無造作に面を掩つて下脣を嚙んだ。つとめて押へて居る樣子であるが、胸には波を打つて悲哀が押寄せて來ると覺し

く色の淺黑い無邪氣な大きい顏を涙が流れた。

主人もお梅もお桂も皆泣いた。

醫師は來たが、ちよつと脈を取つたばかり、もう胸を明けて見ようともしなかつた。極めて平氣で、

『たうとう亡くなつたか。お婆さん、幾つぢやナ？』

『六十一でした。』

と主人が答へる。

『六十一ではまだ惜しかつたぢやな。八十まで生きる人もあるんだから……。それにかう息子さんが皆な大きくなつて、立派になつたのだから猶殘念だ。』

『もう、一二年生かして置きたう御座いました、』と言つた主人の聲は曇つた。

『まア仕方が無い。幼い子を三人も置いて死んで行く母親もあるんだ。……それに、手當も十分にしたんだし、これも壽命とあつて見れば止むを得んぢやて……』鞄を携へて立上つて、『それぢや診斷書はすぐ書いて置くから取りに寄越しなさい！』

さつさと暇を告げて行く。

子等はまだ其傍を離れがてに、默つて其周圍を取卷いて居た。一しきり泣いた烈しい壓迫は夏の空の低氣壓のやうに、ぬらにして過ぎ去つたが、今度は靜かな深い追懷に伴つた悲哀が人々の胸を蔽つ

て、互ひに思出したいろ〳〵の悲しい記憶を一つ一つ語り合つては誰も涙に曇る眼を拭つた。暑い夕日は畠の緣の玉蜀黍の赤い葉と丈の高い杉垣とを越して、まともに此八疊に照り渡つた。

其處に搜しに行つたお貞が英男を伴れて歸つて來た。

『坊やは何處に行つて居たんだねえ、まあ、』とお駒は逸早く立つて行つて、『お婆ちやんが——お婆ちやんが死んだがね、もう。』

とまたも涙に聲を曇らせながら、そのまゝ傍に坐らせて、

『そら、御覽、お婆ちやんがもう死んで了つたよ。』

一座は又濕つた。

男の兒は困つたといふ風で、眼を開いたまゝ死んだ祖母の顏をこはゞ〳〵見た。子供ながら、朧ろげに死の何物たるを知つて居るので、涙こそ滴さぬが、默つて悲しさうに頭を垂れた。お駒は水を含ませた筆を手に渡して、

『もうお別れだに、……口をぬらして御上げなさいよ。お婆ちやんはもう死んだからね！』

男の兒は言ふがまゝに死んだ祖母の口を筆で濡らした。

『本當に、お婆ちやんは坊やを可愛がつて居たのに……。もう抱いて寢て呉れる人も無いねえ。』お米は堪らなくなつたやうに聲を立てゝ泣いた。